
仮面ライダーディエンド～世界を盗む大怪盗～

ブラッキン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディエンド〜世界を盗む大怪盗〜

【Nコード】

N2279R

【作者名】

ブラッキン

【あらすじ】

…彼の名は“海東大樹”

世界を廻る「仮面ライダー」であり「怪盗」でもある善と悪の男。そんな彼が手に入れたのは、不完全に写る18枚のカード。

お宝を完成させるため彼は旅を続ける…

世界の破壊者・ディケイド。門矢士の仲間である彼…そして『彼女達』が行き着く先は果たして…？

世界の放浪者・ディエンド 幾つもの世界を渡り、その銃口は何を射抜く…？

ディエンドが『劇場版ライダーの世界』を巡る物語です！

ストーリー改変・誤字の恐れがあります。
何なりとご指摘お願いします！

皆様のおかげで累計ユニーク数10,000人・アクセス数60,000突破しました！！これからも宜しくお願いします！

現在メイプル畑さん・エターナルさんのキャラとコラボさせていただきます！

…最近疲労の所為で執筆作業に力が入らない一方であります（汗）
不定期更新になりますが、温かい目でお守りくださいませm（- -）m

First TARGET プロローグ・1

「・・・ククク・・・とうとう完成だ・・・」

・そこは多くの機械や薬物が置いてある広い研究室

そう呟くのは全身が黒と白のマスクにスーツ姿で研究者のような服装をした男

しかし、それは一人だけでなく男と同じ姿をした者が大勢、笑みを浮かべて「ソレ」を見つめていた・・・

彼らが見ている「ソレ」は緑色の液体が入った巨大なポッド
しかし彼らが見ているのはポッド自身ではなく・・・その「中身」だった

そのポッドの「中身」には絵柄がぶれている18枚のカード
その内9枚は中心に何かの紋章のような絵が写ったカード

残る9枚は絵が二通りで上は背を向けた人影、下には武器のようなものや

異形のようなものが写っているが、それぞれ絵柄が違うカードがポッドの中でプカプカと浮かんでいた

彼らは『ある者』に命令されこのカードを作成していた

初め彼らは何も気に止めず『ある者』の命令に忠実に従い、作成を続けていた・・・

が、作成期間はなんと6ヶ月。完成させるまでパソコンに向かう、薬物の調合、

そして失敗が続く実験を繰り返したのだった

そのため食事時間や睡眠時間を減らし、完成へと近づこうとした

苦勞、苦痛そして後悔が蝕む中
ただ

ついに彼らは完成させ

その事実には達成感を浮かべた笑みを浮かべ、ある者は号泣していた

「・・・やりましたね」

「ああ・・・」

「終わったんだ・・・これからは遊べるんだ・・・」

「ううう・・・ぐずうっ・・・！！・・・」

疲労や歓喜、感動など各自感じる事は別々だった

長い沈黙が続くなか上司と呼ばれていた男が部下達に切り出す

「よし・・・私は報告に行ってくる。それでは各自解散！！」

『ハイ！！！！』

上司の言葉に部下達は喜びに満ちた声で返事をした

パチパチパチ

「いやぁ実におめでたいね」

「？」

そんな中男達の内一人が拍手をしながらそう言った

まるで他人事のようにさらに彼らを見下したような口調だ

彼らはその言葉に首を傾げたり、何人かは馬鹿にされたんだと思い
彼に掴み掛っていた

「え？」

「イヤ・・・どうしたお前」

「お前なんだよその言い方」

「なーんか他人事みたいに」

「はぁ・・・お前もうちょい口調つても」

「僕に指図する権利なんてない」

ズキユウン！！

「がつ・・・！？」

「?!」

彼はマスクを外しながら右手に銃をもって男達の内1人の脳天を正
確に撃ち抜いた

そのからは血がドクドクと流れ、崩れるように倒れていった

その光景にそこに居る者は誰もが恐怖した

「ヒイイイ!?!!」

「あ・あ・あ!!」

「て・・・テムエ!!何・・・を・・・!?」

誰もが絶叫をあげるなか一人が激昂していたが撃った男の素顔を見た途端

驚愕の顔に変わった

「僕に指図する権利は・・・」

その青年・・「海東大樹」は銃を片手に懷から一枚のカードを取り出した
そして持っている銃「ディエンドライバー」にカードを装身、それを上に構え

【KAMEN・RIDE...】

「僕だけにある！」

変身!!」

【DI・END!】

そう叫んだ途端銃口からプレートが現れ海東の体にはビジョンが重なるように移動する

やがてビジョンは重なり体を灰色のアーマーに包みプレートが頭と肩に掛かり

鮮やかなシアン色が浮かび上がった

そして「仮面ライダー ディエンド」の姿がそこにあった

「「ディッディエンド?!」」

「何故お前が此処に!」

「無論君たちが作った最高のお宝を頂きに来ただけさ」

【A T A C K - R I D E : B R A S T !】

ディエンドはそう言うと同時にカードを装身し、シアンの弾丸を発砲する「ディエンドブラスト」を浴びせる

「「「がああああ!!」」」

「「「うわああああ!!」」」

その内何人かは銃弾を喰らったり、その場から逃げだすものもいる

そして研究室にはディエンドただ一人になった

「さて・・・と」

敵が居ないことを認識するとディエンドは目の前にあるポッドに銃弾を撃った

そしてポッドは粉々に砕け散り緑色の液体が盛大に飛び散ったことで中に浮いていた

カードもまた辺りに散らばってしまった

「これが僕専用のカード・・・やはりこれは最高の「そこまでだ!!」」
「っ・・・!」

玩具をもらった子供のように興奮するディエンドだが敵の声に気づきすぐに態度を変えた

後ろを向き先手を取ろうと構えるが・・・

「・・・・・・・・・・。」

「このコソ泥めえ!捕まえてやるう」

そこにいたのは・・・全体的に特徴的な所が薄いそれも弱そうな怪人

「ダミードーパント」がいた

「かぐくしろ．．おおう！？．．でええええええええええ！！！」

Dドーパントはディエンドに突っ込むが・・足を引つ掛けその場で盛大にすっ転んだ

余談だがその場には石とかこれといって転びそうなものは一切ない

「ショッポッポッ！！！！」

「ちよおつ！そんな強めに言わないでくれる！？」

ディエンドは某大声を出すことが特徴であるノーマルタイプのポ○モン並の大音量で叫んだ

そのためDドーパントはor zってたが・・

「シヨツボ!!超シヨボツ!生理的にもシヨツボ!!!」

「ぎゃああああ！！言わないでえッ！つーか生理的つてええ！？！」

その深みはドンドン増していった

「まあ……そんな生屑にはコレをプレゼント」

【KAMEN - RIDE...OUJA!】

【KAMEN - Ride : KAI X A !】

「……すいませんでしたから……もうつてええええええ!!!?!?」

ディエンドはカードを二枚取り出し装身、そして引き金を引き現れたのは

「イライラするんだよお……！」

紫の装甲に蛇をイメージした装甲に身を包んだライダー、王蛇

「……………」

をイメージした仮面と体に金色のラインのライダー、カイザ

「コイツを殺しておくんだ」

「へっ！ちょうどイライラしてた所だあ」

「…コクっ…」 無言でうなづく

「まってえええ！！？それ八つ当たりだよな？オレ関係ないよねえ！？黄色の人にいたっては無言だから怖いんだぎゃああああああああああ！！！！！！」

場所は変わってここは外

『師匠！お迎えに来ました』

「御苦労だよ少年くん」

研究室から出てきたディエンドは巨大な紅色の鷹・「ヒビキアカネタカ」の迎えを感謝していた

「それで師匠室は「もちろんさ」…さすが師匠です！！」

ディエンドは仮面の下で笑みを浮かべながらHアカネタカの目の前に18枚のカードを見せ、

アカネタカはそれを称賛していた

「でもそれって絵柄がブレてますけど使えるんですか？」

「いいや…だがこのカードはいずれ完成させる。そうすればこれは正真正銘最高のお宝だッ！」

「は…い？」

決意するように言うディエンド
一方のハアカネタカはよくわからないのか頭に？を浮かべ首を傾げていた

「とりあえず小屋に戻りましょう！今夜はビーフシチューを作りましたよ」

「へえ・・・それは楽しみだ」

そう言つてディエンドはハアカネタカに掴まりハアカネタカは飛行し、

「これは・・・長旅になりそうだな」

「何か言いました？師匠??」

「いや」

カードを見つめながらディエンドは呟く

星が煌めく空に一匹の鷹は怪盗を背負っていた

ハイこの度投稿しました ブラッキンです

海東「ほい」 メリケンサック装着でアップー

ぶつふう!?!?・・・ちよっ何すんの?!オレ作者よ?

海東「僕のキャラが全く違う件で」

アスム「あんなの師匠じゃないです!!」

ああ・・・それについては話を進めるうちに書いてく・・・つも

「にっこり」 笑顔でディエンドライバー構える

ウソです書きます書かせて戴きますハイ。

アスム（これでも十分キャラ崩壊な気が・・・）

王蛇「まあ次回も見ときな」 ジェノサイダー撫でながら

カイザ「・・・コク・・・zzzz」 サイドバツシャーで寝ながら

Dドーパント（人間態）「・・・。。」

全身血まみれでスタボロ&尻にベノサーベルとカイザブレイガン
刺さってる

アスム「そこまでしますか!!?」

プロローグ・2 (前書き)

更新遅れて大変申し訳ございませんm m

それと次回から『ターゲット』と表記します

それではどうぞー！

プロローグ・2

遠い山の麓

Hアカネタカは担いでいたディエンドをそこへ降ろした

「ふう・・・師匠着きました」

「御苦労だよ、もう戻って構わない」

そう言いながら降りると変身を解き元の海東大樹の姿に

Hアカネタカはさっきまでの巨大な鷹から、筋肉がついた紫色の体にのっぺりとした鬼のような顔と角がある「仮面ライダー響鬼」に戻る

それだけではなく
燃え盛った

響鬼の体から淡い紫色の炎が

そしてその炎が蠟燭のように消えると・・・さっきまでの鬼の姿ではなく

それより背の縮んだ少年

「アスム」となった

「本日もお疲れ様です、師匠！」

「ああ・・・それより早く着替えたほうがいいよ。風邪引くからね」
「はい!!」

頭を下げるアスムに海東は軽く返事をし、アスムは木に掛けてあった道着を取りに行く

ちなみに言っておくがアスムが響鬼の変身を解いたとき
彼は何も着てなくすっぱだかつた

海東は、さすがに全裸で頭を下げるのは気が引けるため（周りの人が見たらシニールな事もある）

弟子に服を取りに行かせた

海東は今日の仕事（主に盗難）を終えて自身のテントに戻っていた

「あ！お帰りなさい大樹さん！！」

明るく元気な声で帰りを迎えたのは、蒼い髪ショートヘアの十年代ほどの少女

「蒼風 スバル」である

彼女は海東が帰ってくる途端に彼の腕に抱きついて出迎えていた

「今日のお仕事どうでした！？お宝は？」

「勿論さ・・・この通り余すことなくコンプリート」

「おお～～！！！」

海東は研究所で手に入れた18枚のカードをスバルの眼前に見せスバルは

それを目から大量の星空ほどの輝かしい目でそれを見ていた

「あれ・・・でもこのカードって何にも絵がないですよ？」

「このお宝はまだ完成じゃないからね・・・まあいずれ僕が手にしてみせるんだけどね」

「????」

海東の言葉を聞いた彼女はアスム同様頭に？を浮かばせていた

「はあ・・・毎度毎度わけわかんないわねアンタは」

そう悪態をつくのはオレンジ色の髪を赤いリボンでツインテールしている少女

「星河 ティアナ」である

ちなみにスバルとは年が近い

「ふつう泥棒って金とか宝石とかそういうのを盗むもんでしょ
それなのにあんたって金目の物かどうかも怪しいものばかりじゃない
やない

今日にいたってはカードって・・・子供みたい」

ティアナは侮辱するように哀れみな視線を向ける

「勘違いしないでほしいね・・・僕はあくまで『怪盗』だ 金になる物だけを盗むんじゃない

・・・これは金銭すら変えられないほどの価値を持つこの世界だけのお宝だ!!」

「おお」

「似たような物じゃない」

高々と告げる海東にそれをパチパチと拍手するスバル、対照的にさらに呆れるティアナ

・・・・・・・・・・

尚彼女たちは現在いるこの世界の住人ではない

彼女たちもまたアスム同様別の世界の出身なのだ

はまた別の話である

そんな彼女達と海東がどう出会ったか

「海東さん！！また仕事の話聞かせてください！どんな敵でした？
これってどんなおたけ」また後で聞かせてあげるよ、それより夕食「ハイ！」

「おまたせしました！」

着替えたアスムがビーフシチューが入った鍋を持ってやってくる

それから彼ら4人は食事を取りながら海東の怪盗話を聞いていた
その中でアスムとスバルは童話を聞く子供のように興奮し
スバルは何杯もおかわりしたせいで他3人は取る分がなかったとか
どうか

ちなみに演説者はシチュー、野菜しか食っておらずタンパク質はとれてない

〃〃〃

???の世界

『未確認生物がB地区に出現!!戦闘部隊はただちに出勤せよ!
繰り返す未確認生物が出現!!ただちに・・・』

警察所でサイレンが鳴るなか多くの武装した男達が車を出勤させ
現場にかけつける

「・・・君!!G4の出勤よ!!ただちに現場に!!!!」

「了解ッス!!おらああああ!!」

一人の婦警が熱い男に告げていた

〃〃〃

海東達のテント

ガンガン！

「あゝさでゝすよゝ！」

アスムがフライパンを叩きながら3人を起こしに行く

（・・・寝かせてくれないかな昨日徹夜だったのに（涙））

起床時間は午前5時である

プロローグ・2 (後書き)

・登場人物一通り紹介

・蒼風スバル 読み：あおかせ すばる 蒼い髪のショートヘア
ーの少女

性格・設定は原作とほとんど同じ
ある世界の「平行世界」の出身

・星河ティアナ 読み：ほしかわ ていあな
オレンジの髪に赤いリボンで結んだツインテールの少女
こちら性格・設定は原作とほとんど同じで スバルと同じ世
界出身

えゝゝ皆様、少々お願いがございます

原作のスバル&ティアナの設定を教えてください！！m(・・)m

ホントにすいません！！

自分りりなのは存在は他の小説家の皆様方を見て
初めて知ったので・・・

性格やデバイスは調べつくしたのでわかるんですが
主に技名とかそのあたりが： デバイス・バスターなど or z

宜しければ感想と共にそのあたりを教えてくださいようか・
？

それさえ分かればガンガン執筆もストーリーも出来ますので

どうぞ宜しくお願いします

それとアスムの件ですが話の中で彼絡みのストーリーを描くつもりなので・・

その中の回想的なもので明かそうと思います

TARGET・1

緊急出動（前書き）

お待たせしました！ブラッキンでございます

話の区切りは5話になります

尚、話の都合によって短くなったり更新が遅れたりと・・・
卒業式が近いのであまり進まないかも・・・

なるべく都合があれば執筆します！

それでは「G4編」スタート！！

翌日

（ほぼ強制的に）起こされた海東ら一味は朝食を済ませ
次の『お宝』を狙うべくディエンドライバーの世界を超える能力を
使い

次の世界へ向かった

「さて・・・諸君準備はいいね？」

「ハイ！この世界のお宝・・・コーンポタージュ味でGETのアイス
棒5本とも

忘れてません」

「・・・まあOKね」

「こ、こっちもです」

スバルは大好きなアイスで手に入れた当たり棒を手を持ち返事をした
この彼女・・・スバルは極度のアイス好きなのだが・・・
どういうわけか一般のバニラやチョコの他、妙な味のアイスを好ん
でいる

ちなみに此処より前の世界では チキンラーメン味、 ナポリタ
ン味 といった

アイスを食べ、当たり棒を手に入れていた

彼女曰く『全てのお宝へ アイス』は私の物だよ!!』である

(ティアナさん・舌つて何科に行ったらいいんですかね?)
(知らないわよ・胃袋もそうだけど一回検査受けるべきねアイツは。)

アスムは彼女の身体&健康を気にし始めティアナは親友の見慣れた行動に
呆れていた

「へえ、今回はコーンポタージュか・前回といい今日も良い収穫だね。本当に・・・

これ自身が彼女に惹き付けられているようだよ」

「えへへ／／／」

・・・んなわけないでしょ・・・

一人違ったが。

~~~~~

????の世界

キヤアアアアアアア！！！

うわあああああああ！！？

此处では多くの人間が「異形」から逃げ惑っていた

その異形は・・・

『ヴゥヴゥ・・・！』

『ギゲギヤアア！！！』

『ハーツハハア！！！！捕食しろ貴様ら！！人類の進化を完全停止だあッ！！！！』

『ギギギイツ！！』

人類を超えた超越生命体・・・「アンノウン」

そのアンノウンのなかでも蟻のような姿をした者は「アントロード」と呼ばれる者である

大量の『フォルミカ・ペデス』を引き連れ、そのリーダーなのか赤い体をしたアントロード・・・『フォルミカ・エクエス』が仕切っていた

『徹底的に食らい尽くせ！！余すことなくなあッ！！！！』

「あ、あ、ああ、ああ、ああ！！！」

「ぎゃああああああ！！！！！」

人間達はペデス達の口から吐く液体を喰らい窒息させ  
さらには鋭い牙で噛み尽くしている者もいる

人類は奴らに恐怖し悲鳴を上げ、ただ逃げ惑うだけだった

「そこまでだッ！」

現れたのは角状のアンテナに青と銀のスリムなボディをした戦士が立っていた

そしてその赤い眼はアントロード達を凝視している

その名は・・G3

「この害虫が！民衆に手を出す奴は許さねえッ！！覚悟しな！」

そう言いながら武器・・・GM 01をペデス達に構える彼だが・・・

「追ええッ！！決して誰一人残すなァ！！」

「ギギイッ！！！！」

「オイイ?!無視かよお!!!..あ、虫むしだけに?..クスッ」

その敵には虫・・・いや無視され、一人でつまらんシャレを考えるG3

(何やってんだろ・・・あのロボットみたいなライダー・・・)  
(とりあえず分かるのは・・・アイツが馬鹿<sup>アホ</sup>だつて事ぐらいね)

その様子を物陰から見ていたのはボーイッシュな服装に革製の帽子を被ったスバルとティアナであつた

この世界に着いた後彼女達はどいつた世界なのかを調べるためこの街に来ていたのだ

そして多くの人の悲鳴が聞こえたので駆けつけてみたら・・・今に至る

「・・・つてそんな場合じゃねえ！？アンノウンはっ・・・アレ？」

ヒュウウウウウ

そんな風が吹くかのように・・・G3の周りには誰もいなかった人も、アントロードも。

「チッ！なんて逃げ足が速ええんだ・・・」

・・・逃げたつていうか・・・アンタが逃がしたんだよ・・・  
そんなG3に呆れてツツコムスバルとティアナ

『アホかあアア！？アンタが逃がしてんのよ！！こんの馬鹿タカ！』  
「うおッ！！・・・んだよスミコ。」

『んだよ。じゃない！！・・・アンノウンは北エリアに移動してるわ。早急に駆けつけて頂戴。』

反論は断じて許さん！！』

「しねえよ！後わかってるのッ！！・・・これだから便秘女は苦  
つ」

『・・・は？』

「ぎよおっ！？」

『タカ・・・この仕事終わったら、超直進にかえってきなさい？』

「ハイ。ワカリマシタ」

G3の耳元におそらく女性だろうが大声で入ってきた通信と会話しているG3  
最後の所で何故か片言になるG3を見て首をかしげるティアナとスバル

だが

『・・・！？タカ！！』

「ああ！？んだよ？」

『・・・』

「おい、どこかしましたかー？」

『・・・出たわよ』

「何が？」

『・・・G4』

「！！ッ」

彼の耳元に入ったその通信は彼を大きく驚愕させた

「それ・・・マジか」

『こんな事態に冗談なんていうと思う？』

#### 警視庁

茶髪の髪を後ろで結んでポニーテイルにしている女・・・〔雨宮  
スミコ〕は冷や汗を流して

北方向にある港を写したモニターを見ていた

そのモニターには先ほど逃げられたアントロード達

そして・・・角状のアンテナとメタリックなボディをした機械兵

此処まではG3と若干似ているが      その眼光は青、さらに黒と

銀色のボディ

そして肩にはこう表記されていた

「G4」と

「ん？・あれって」

僅かだがスミコはG4とアントロードの他、革製の帽子を被り彼らを眺めているかのように隠れている一人に青年を発見したスミコはG3に通信を送る

所変わって・・・

『タカ！！現場に一般市民を一名発見！』

「はあ！？何だよ！」

『わかるわけないでしょ！！なんであんな・・・危険区域に』

「相当命知らずって事じゃねえか？」

「まあとにかく現場に直行でいいんだろ」

『急いで！彼まで巻き込まれたら・・・』

「わーてるよってんだ！！」

彼はそう言って青と白を基調とし、Policeと書かれたバイク

「ガードチエイサ」に乗って  
港へ向かった

「G4つて・・・」

「・・・そいつもこの世界のライダーかもしれないわね」

「行ってみようよティア！！この世界のことも分かるかもしれないし！」

「そうね・・・アイツの後をついていけばたぶん・・・」

ティアナはそう言って近くに乗り捨てた、オレンジと白を基調としたバイクに乗り

スバルはその後ろに乗った

「さあ、全速力で追うわよ！！しっかりつかまってなさいスバル！」  
「ぶ、らじゃー！！！」

~~~~~

「フフッ・・・やっと見つけた」

G4が居る港の影で・・・帽子をかぶった彼、海東大樹はその現場を見ていた

「今度こそ僕のものにしてあげるよ・・・G4チップ」

海東はG4に向かって指鉄砲を撃つ仕草をした

~~~~~

「待つてろよお！すぐに向かうぜえ！！」

サイレンを鳴らしながら現場に駆けつける

その後ろをティアナとスバルが乗ったバイクが走っている

「テ、ティアゝあの人速いよゝもつと速く！」

「うっさい馬鹿スバル！！アンタだけ降ろすわよ！」

~~~~~

港

G4は現在50体近くあるペデスに囲まれている

「ギギヤア・・・！」

「グルルウ・・・！」

「貴様、下等生物の分際で我らに齒向かうとは・・・なんと愚かな！
！」

その中でエクエスが言い放つが・・・

「愚かか・・・それお前らもじゃないか？」

G4はただ武器・・・GM-01改四式を取り、そう言うだけだった

T A R G E T : 1

緊急出勤（後書き）

G3とスミコの会話だけで2時間かった・・・く（
ぜえぜえ）。

もう3時ですよ

真夜中に何やってんだ俺は・・・

そんなこんなで次回も宜しく願いますm m
御休みなさい

TARGET・2

G4チップ（前書き）

スバル「あらずじこゝナ」

アスム「・・・ってそんなに話進んでませんよね？」

海東「まあいいじゃないかどの小説に置いてもコレ常識」

ティアナ「スバルが奇怪アイスの当たり棒ゲットね」

スミコ「そして『馬鹿』という名のG3出現」

海東「さらに少年君の出番がG4編をもって恐らくゼロの予想だね」

アスム「えゝ」

スバル「えええ？・・・おいしいのに」 明太子味アイス食べてる

タカさん「バカじゃないもん！！——（涙）」

T A R G E T ・ 2

G 4 チ ッ プ

「愚かか・・・それお前らもじゃないか？」

そう言つてG 4は武器・・・G M - 0 1改四式を構える

『・・・っ！！殺れ貴様らアア！！』

『ギギイイツ！！』

『ガアアアア！！』

エクエスの指示で多くのペデスが標的に襲いだした
その数ざつと30体

「ハアッ！」

『ギギイ！？』

G 4は01改の引き金を引き的確にペデスを撃ち抜く
中には口から液体を吐いたり噛み砕こうとする者もいるがG 4はそ
れを巧みに避け
襲いかかるペデスにパンチやキックを繰り返す

二人のペデスが隙を突き羽覆い締めにしよつとするが、左腕の腕部

分に装着している

電磁コンバットナイフ・・・G K - 0 6 改を取り

見切っていたかのように後ろを向き、突きさし、切り裂いた

『ギッ！？』

「・・・ラアアア！！」

ズバツ！

『ギイヤアアア！！！！』

その後も一切の乱れがない攻撃に30体近くいたペデス達も
爆発しながら消滅していった

その様子を見ていた海東はG 4の強さにトレジャーハンターとしての
血を湧き上がらせていた

「これがこの世界のG 4・・・この強さ、オリジナルのG 4を上回る
だろうね・・・フツ必ずや
僕の物にしてあげるよ・・・！G 4チップ！」

興奮を抑えながら海東は再び指鉄砲を撃つ仕草をした

『クウツ・・・！何故だ！何故邪魔をする！！下等生物が我らに逆ら
うなど・・・子ウサギが獅子に

堂々と顔をだすのと同じことだぞ!？」

未だ数体残っているペデスがいる中、エクエスが激昂して訴えるが・

「子ウサギねえ・・・でもな俺達人間から見たら、ロクな理由もなくただ襲っているだけのお前ら（獅子）のほうが・・・下等生物に見えんぞ?」

G4はガードチェイサーの白を黒、青い部分を銀色に染めた自身のバイクに歩みながらそう告げる

「・・・ギガント、Combine」

ピピッ

「OK・Change GIGANT Combine」

G4がそう言うのとガードチェイサーはバイクの姿から大きく変形して巨大な多目的巡航4連ミサイルランチャー（ギガント）になる

「さて、と・・・」

G4はギガントを構え、ギガントを構えそこから伸びているコードを右側のベルトにあるアタッチメントポイントに接続し、左側のベルトにあるスイッチをひねることでギガントにエナジーボリウムが送られる

ドオオオオオン！！

『『『グウアアアアアア！！！！』』』

さらにそこから発射されるミサイルによってペデスは全て撃退し、
エクエスは辛うじて
回避し、逃走した

「ふう・・・しゅーりょーと・・・」

G4はギガントをガードチェイサーに変形し戻した

そして

「・・・オイ、もう終わったぞ出てきたらどうだ？」

「！・・・気づいていたのかい？」

すでに気づいていたのかG4は海東が隠れている倉庫に呼びかけ
それに応じて海東もそこから出てきた

「最初から分かってたぞ・・・よくこんな危険なところに来たな死に

たいのか？」

「生憎、死ぬのはごめんだよ・・・それ以前に僕には命を賭けてでも手に入れなきゃいけない物が

この世に億、兆とある。そのためにも命は大切してるつもりだよ」

「・・・命より大切？なんだそれは」

「そうだね、例えば・・・」

君の力の根源とかね！」

「ッ!!」

海東はそう言っでディエンドライバーをG4に向け発砲した
しかしG4はそくさに反応してそれをかわした

「お前・・・何者だ？」

「通りすがりの仮面ライダーさ、覚えておきたまえ・・・変身！」

【KAMEN・RIDE∴DI・END!】

海東はディエンドに変身する

G4はいきなり人間が別の姿になったことに驚き01改を構える

「アンノウンか・・!」

「聞いていなかったのかい?通りすがりの仮面ライダーだってね」

「黙れッ!!!」

そこから先は両者、激しい銃と銃との撃ち合いだった

ディエンドライバーと01改と銃音が辺りに響き、射撃の腕がディエンドのほうが勝るのか

序ケに押していった

「チイツ!」

「さて・・しばらくは兵隊さんに任せようか?」

【KAMEN・RIDE∴RIOTRUPERS!】

ディエンドライバーにカードを一枚スラッシュ引き金を引くと
ブロンズの体に銀色の二つ目のライダー「ライオトルーパー」が三人現れる

「さらに隊長もね」

【KAMEN・RIDE∴THEBEE!】

ディエンドはもう一枚スラッシュ引き金を引くと
スズメバチのような黄色と黒のライダー「ザビー」を召喚する

「さあ！^{パーフェクトハーモニ}完全調和を奏でるんだ」

「フッ！」

「ハッ！！」「」

「クッ・・・こいつらは？」

G 4は突然現れたライダーに戸惑い、混乱しながらも戦闘を開始する

しかし4対1という分なのかライオトルーパーの連続攻撃+ザビーの猛攻に押されている

一人のライオトルーパーが接近する時・・・

「ハッ！」

「・・・舐めるな！！」

「！」

G 4はそれを捕え、首筋に06改を当て

ズバッ！

「ギャアアアあ！！」

「良し！」

一気に切り裂き、ライオトルーパーは消滅した
デイエンドはその光景を見て兵隊に同情することなく、倒したG 4に感心し拍手していた

一方のG 4はかなり体力を消費している

「お見事だ。その戦闘能力、やはり手に入れる価値がある」

「・・・部下を倒したんだぞ心配はしないのか？」

「あくまでそれは虚像であり人形だ。そいつらは僕の命令に忠実に従うだけで生命なんてものは一切存在しないし、心配無用さ」

「・・・そうかよ」

そんな会話のなか、ザビーとライオトルーパー二人はG4に攻撃を仕掛けようとした

その時だった

「待てッ！」

「「？」」

「えーと、そこの青い奴と蜂みたいな奴は知らないけど・・・G4！いや・・・マコト！！お前を逮捕する！署まできてもらっぜッ！」

現れたのはやつとこさ現場に着いたG3である
ちなみにスバルとティアナもG3と一緒に到着し、隠れながらその様子をみている

（大樹さんもいるけど・・・戦ってたのかな？）

（でしょうね。それにしても・・・あれがG4か）

ティアナはこの世界で見るもう一人のライダー、G4をマジマジと見つめている

その風貌からして今の所、『あのG3（バカ）より強い』と認識し

ている

「一（邪魔しないで欲しいんだけどねえ）・・・君達行ってきたまえ」
「ハッ！」「ハッ！」

ディエンドは思わぬ邪魔に軽くため息をつき3人に命令をだす
ザビー＆ライオトルーパー2人はG3に近づき・・・

「ハッ・・・ハッ！」

「な、なんだお前ら！！抵抗するってんな」

「ハッハッハッ！」

「グッブ！？」

3人はG3の複眼にライダーパンチを繰り出し、気絶させた一（仮面つけてるが）

「悪いな助けてくれて」

「！！！」

G4は隙を付いてガードチェイサーに跨りディエンドにそう告げながら

逃走していた

「待てッ！！！」

【ATTACK-RIDE...BRAST!】

ディエンドはG4にディエンドブラストを浴びせようとするが・・・
その銃撃は難なくかわされG4はそのままどこかへ姿を消したのである

「クソッ！」

「大樹さん！大丈夫？」

「まんまと逃げられてんじゃない」

スバルはディエンドに駆け付けながら心配し、ティアナは悪態をついていた

「だけど・・・次は逃しはしないよ、G4チップー！」

〃〃〃

一方G4は・・・

「ハア・・・今日はホント散々だったな」

溜め息をつきながらガードチェイサーを走らせていた

（あの青い奴・・・おそらく俺のG4のシステムが欲しかったんだろうが・・・）

G4は自身の腰に巻きつけてあるベルトを見つめながら・・・

「無駄なものにな・・・絶対に」

切なそうにそう言い、走らせていた

TARGET・2

G4チップ（後書き）

G4の武器『GK-06改』ですが・・

G3の武器ユニコーンをパワーアップしたものです

G4って映画では01改とギガントしか披露してないんですよ・・
なのでオリジナル武器を考えてみました！

次回も宜しくお願いします！

T A R G E T ・ 3

呪われし者

(前書き)

ギユリイイイイイ!!

タカヒロ「おおー助けえええー!!!」

スミコ「さあ・・・お前の罪を数えろ」

アスム「なんですかアレ」

スバル「公開処刑」

海東「詳しくは前回を見てね・・・ちなみに状況を簡単に説明すると、デストロイヤーを構えさらにジェイソンの仮面をつけた雨宮さんがG3君を襲ってる」

ティアナ「それってアイツの武器じゃなかった・・・?」

スバル「あ、今ちよつとだけかすったね」

スバル「大樹さんがG4と戦ってたね!」

ティアナ「でも逃げられてんじゃない」

海東「G3君はクロスアタック使うまでもなく、めったにないザビラのライダーパンチで瞬殺だね」

アスム「この襲撃はストーリーとは関係ありません。本編にご期待ください」

タカヒロ「うええええ!!?」

スミコ「ハハハハ」

TARGET・3

呪われし者

（警視庁）

「お疲れータカ」

「・・・ああ」

アンノウンを撃退し、任務を終えた黒い短髪の男・・・G3装着者でもある「沢木 タカヒロ」はスーツを脱ぎながら溜め息混じりに返事をしていた

「わりい・・・またダメだった・・・」

「・・・一応言つとくけど正しくはまたまたまたまたまたまたまたま
たま・・・」

「分かった！！もう分かった！！分かったから人の過去の傷口抉んな！？」

アンノウン達に逃げられさらにそれをG4が全て撃退しおまけにそれが「捕えるべき相手」のため

ひどく落ち込むタカヒロ。そんな彼を責めるが如く告げるスミコ

「イヤ、ホントに何回目よ？アンタのこれまでの戦闘経歴、逃げられた数倒された数スタボロで帰ってきた数もカウントしたら・・・たぶん・・・50は超えてる・・・か？」

「うぐっ！・・・そ、それは・・・」

これだけはさすがに 本人曰く『大体本当の事』なので言い返せなかった

彼はアンノウンに対抗するべく開発された『対未確認生命体用強化服』 G3ユニットの装着者に今年選ばれたばかりのもの、その敵であるアンノウンには瞬殺と言っているほど無様に負けるか、気付かれずにほっとかれ、そのまま逃げられるパターンのどちらかだそんな彼のため、ほとんどのアンノウンは全てG4が倒している

「まったく・・・あゝ・・・マコト君帰ってこないかな？そうすれば彼がG3やってゝんでもってタカは用済みみたいなもんだから、お去らばになるし・・・」

「っ!!」

悪戯っぽくわざとらしく明後日を見つめるような口調で言うと、怒りを表すかのような形相でスミコを

睨みつけた。一方のスミコは心の中でやべつと呟きペロツと舌を出していた

しかし彼が一番反応していたのは・・・『マコト君帰ってこないかな』のあたりである

「何アホみてえな事言っただよ。アイツが・・・マコトが帰ってくるはずないっていうか帰ってこれるはずがねえだろ！あんな事して・・・ノコノコと・・・」

「ジョークよ、ジョーク。・・・彼が犯した罪くらいおばばになっても抹消されないぐらい覚えてるわよ・・・私だって」

長い沈黙が続く・・・

コンコンッ

「失礼すんぞ？」

「！・・・あ、はいどうぞ」

ドアをノックし現れたのは黒淵の眼鏡をかけた、40代を思わせる男性・・・「南 トオル」である

彼は警視庁のなかでもエリートと呼べるほど長年幾つもの事件を解決してきた刑事であり、もはやベテランとも呼んでもいいほどだ。さらに煙草を吸っている姿がより大人の男性という姿を漂わせる彼は煙草を一服した後タカヒロに質問していた

「ハアアア・・・そういや今回はどうだった？またG4が出たとか聞いたが」

「・・・あ！？え、えーとですね実はお「ミスりました盛大に」オイ！！」

「はは・・・そうか。しっかしどうもお前さんがやる事にや失敗の連続だねえおい」

「す、すんませんっす」

笑いながら上司もからかうように言ってくるが、タカヒロはまだスミコよりはマシだと思っていた

学校の教室で例えるなら、トオルは分からない所をアドバイスの感じで教えてくれ、スミコは分からない所をクラス中に響き渡るような大声で口にするというべきだろうか。とにかくトオルはスミコより優しいそれだけである

「まあとにかく、次また出た時頑張るときゃいいんだ。焦らずゆっくりはげめ若者」

「は、ハイ!!」

(・・・甘いわねえ南さん)

ちなみにスミコはさすがに相手が上司なのであくまで心の中で告げていた

「しかし解せんな・・・何でマコト(アイツ)がG4のスーツなんて持ってたのかねえ」

トオルは先ほど写っていた港のモニターを見て呟いた
タカヒロとスミコもそれは同じだった

「ですよ・・・そっぴやオレG4スーツつてだっぴ前に使用禁止つて聞いたことがあるんですけど」

「ああ。アイツはG3みてえな簡単に着こなせる代物じゃねえ。戦闘の時は装着者の体力や精神といった物をエネルギーに変え力にし、スーツ自体が自動的に動き敵を倒してくんだ・・・だがそんなもん長時間も着けてりや着ている奴あ・・・どうなると思う?」

トオルの問いにスミコは答える

「・・・やがてスーツが装着者の命までも吸い取りエネルギーに変え・・・死亡」

「・・・っ・・・」

「正解。そんなもんだからいくら強くてもそれは封印せざるをえねえ。世間じゃ『呪われたライダー』やら呼ぶ奴もいんだからよ。他にもなんか体力のありそうなゴチイ奴、なんかアスリートとか、中には勇気を出して推薦する若者もいたが・・・」

トオルは煙草を吸いながら続ける

「全員死んじまった。誰もアレに付いてけねえのさ・・命を吸われるなんざ阻止できるわけねしな。なんだかんだあつてG4は今後一切使用禁止。アンノウンとかはG3やら過去の産物に頼るしかねえわけよ・・なんか最近じゃ『まいるど』とか誰でも着れるヤツとかそんなんも出てきたしな」

「しかし、そのG4を・・〔浅沢 リサ〕が盗み、警察から逃亡。」

突然スミコはそんなことを言った

いきなりの事で戸惑うタカヒロだが、トオルはあまり動じなかった

「ああ。結構前になるが・・G4の資料が盗まれたとかなんだか」

「半年ほど前ですね・・浅沢が突如G4システムの構図と共に姿を消して、そのまま行方不明・・今回やこれまでの件も浅沢の補助があつたからだと・・」

（み、皆結構詳しいのね・・）

深い話に若干ついていないタカヒロは二人の話を聞いていた

「しっかしようそもそも本当にアイツ・・マコトか？」

「え・・南さん？」

「言い切れませんが・・・そもそもスーツ自体、高い身体能力に優れた者が扱えるんですから一般人じゃまず無理でしょう。浅沢と手を組んでいるのであればマコト君が一番ありえるでしょう」

「なあーる・・・」

トオルは静かにモニターを見つめていた

彼の犯した罪も重ね・・・

「ところで・・・コイツは？」

「「え？」」

トオルはG4ではなく・・・後ろにいるディエンドを見てそう言う

「アンノウンでは？」

「それにしちや青くねえか？今までの奴あ黒そうなのが多いだろ？」

「もしかして・・・イメチェンして体を「黙つときなさい」・・・」

「とりあえず分かんのは・・・化け物でもねえなんかつて所だろ・・・
まあなんだ俺もヤマがまだ残ってるし、爺はこれにて退散」

「「ありがとうございました」」

自分の都合と話の終わりということとでトオルはこの場を出た

そんなトオルは廊下を歩いて行く中・・・

（そついやずいぶん昔に・・・怪人っぽいがアンノウン倒していた奴がいたな・・・ここ最近出てこねえが）

トオルの脳裏には 化け物のような緑と黒が混ざった体に
橙色のマフラーをたなびかせ、二本の角がつき、赤い眼光をした
人間とは程遠い異形が写っていた

〔街中〕

同時刻・・・

「・・・あーもう！！どこほつつき歩いてんのよ！あんの馬鹿ス
バル！！」

街中を通りながら

ティアナは二重の意味で激昂していた

それもそのはず・・・港で彼女達は海東と別れる際、

『G4に関する情報を集めてきてくれ。街中だけでなく警察にこつ
そり侵入して、資料も盗んだりしてくれて構わないからね。・・・
それじゃあ期待してるよ、僕の優秀な助手達 』

（どこの誰がだー（怒）！！）

これが一つ目、もうひとつは・・・

『わーい』

『・・・くうっ!』

街中で情報収集の際、アイスの奢りでじゃんけんをして・・・ティアナ、負ける

その後、三回勝負で申し出たら・・・ティアナ、全敗
結果・・・ティアナ、コーンアイス九個も奢らされた

「ゆ、諭吉が損失してないだけまだマシかしら・・・?・・・スバル
!!食べたらしささと・・・」

ティアナ・・・振り返るがスバルの姿がない

「・・・すううつばるうあああああああああ!?!?!?!?!
(怒)」

これが二つ目

少し時間を遡り、スバルは・・・

「うぐっ・・・ひっく・・・うう」

「どうしたの？大丈夫？」

スバルはティアナにじゃんけん全勝＆アイスGETで上機嫌の中、泣きながら歩いている桜型の髪留めで三つ編みの女の子を見つけ話しかけていた。女の子は言葉が途切れながらも話す

「あの・・・ね・・・おう・・・ぐす・・・ちがあ・・・」

「お家が分かんなくなっちゃたの？・・・あ、アイスあげよっか？食べる？」

「ひくっ・・・ありが・・・と」

スバルはせめてもの慰めに持っていたアイスを差し出した
女の子はアイスを食べてみる、アイスのおかげなのか女の子は機嫌を良くしたのかだんだん泣きやみ、笑顔も見せるようになった。スバルはそんな彼女の頭を撫でる

「おねえちゃん、ありがとう」

「良かったゝ　おいしい？」

「うん！」

「あ、居た居た！おいサヤカ！！」

「あ・・・！おにいちゃん！！」

「え？」

『サヤカ』と呼ばれた少女は黒髪の天然パーマの青年に駆け寄る
あの人がお兄さんなんだろうか？
そう思ったスバルも男
に駆け寄る

「あの・・・あなたがお兄さんですか？」

「あ、まあ何と言うか・・・ちょっと違うけど一応コイツの兄貴です」
「おにいちゃん」

サヤカは兄に頬を擦り付けるように抱きついていた
その兄は深々とスバルに頭を下げていた

「初めまして、『木之城』と申します！この度はサヤカを助けられて本当にありがとうございます・・・そうだお礼をしなければいけませんね！！くだらない物かもしれないけど家へ招待します！」
「え、ええエ！？」

い、いつ時代の人？・・・ていうか・・・昔話？？
あまりの招待にスバルは困惑するが、木之城は真顔で告げる

「俺の父と兄が言ってたんです。人に恩を返す時はその人がしてくれた親切の何倍もの持て成しをするようにって。それこそがいろんな人にとって最高の恩返しになるって」

「へえー・・・じゃあお言葉に甘えて」

「おねえちゃん、おいで！サヤも恩返しする！！」

サヤカも手を引きながら笑顔で招く
スバルはこれは受け入れるべきだと思いとりあえず恩を受け取るべきだと思い、付いていくことにした

「……すうううばるうあああああああ……！」

そんな怒声が街中に響いていたが……彼女の耳には届かなかった

そんな彼女達を

ビルの屋上から眺めている者がいた

「ようやく見つけた……かな？」

そう呟く彼の視線は……木之城に向けられていた

TARGET・4

マコトの罪／蟻の策（前書き）

ティアナ「こんの馬あ鹿スバルー!!」

スバル「ええええ!!?いきなり何なのー!!?」

アスム「まず一つ言わせてください…スバルさん貴方は『警戒心』
つてのが無いんですか」
スバル「は、へ??」

此処は地球の地下深く…

其処にはその場を覆い尽くす程大量にいるペデス達がいた

此処は 彼らアントロード達の巢…

名づけるなら…【アント・クローリー】

通称「蟻の巢」

騒がしくその部屋にいるペデス達の前にエクエスが叫ぶように告げる

『さて…皆の衆集まったようじゃな？』

『貴様らあ！！女王様のお見えだぞお！』

ペデス達とエクエスが控えるように頭を下げる

その女王は…ペデスと同じく黒い異形といえど美しい姿をしたアントロード…

「クイーンアントロード」こと、「フォルミカ・レギアス」

『今日、皆を余の元に集めたのは他でもない……エクエス、お主らは又あの産物に邪魔をされたいな？』

『……っ！……も、申し訳ございません。なるべく前回より戦力は固めておいていたのですが……』

不機嫌にエクエスを見るレギアスに、頭が下がるようにエクエスは
呟く

そんなエクエスが気に食わぬのかレギアスは三又の槍「黄金の鑑」を床に突き刺し怒鳴った

『黙れっ！一度ならず二度……嫌何千度もの失敗を犯したと思うとる。たかが人間の作り出した産物じゃぞ！！そのような物に我らが劣るなど大恥じゃっ！！』

『も……申し訳……』

『黙れ。余は言い訳など聞く気が無い！』

『いえ！、お聞きくださいませ。女王様の申される通り我らはあの産物に邪魔をされました。しかし標的である人間風情はほとんどの抹殺に成功です！』

エクエスは必死でレギアスに説得する

そもそも彼らアントロードこと、アンノウンは「G4に打ち勝つ」事が目的ではない

「並の人間を超越する人間を消す」事なのだ

先程の件でも多数の人間がペデス達を恐れ逃げ出していたが、ペデスが殺していたのは『超能力』という特別な力を与えられた人間や、

生まれた時から持っていた人間

その他の人間は標的対象ではないため殺していない

しかしその人間達は『人間ではない化け物』という存在に恐怖し、必死で逃げていたのである

そして一方のレギアスは第三者：．．自分達の目的を邪魔する者の存在　G4を憎く思っていた

その思いが行動にも向けられるのか、標的を『人間』から『G4』を消す事を命令されたこともある

『確かに其処は評価してやろう。だが：あの産物の存在が消えぬ限り、余の苛立ちは治まらんと言っておるのだ』

『女王様：』

『皆の衆聞くがよい』

レギアスは座っていた玉座から立ち、ペデス達に告げる

『余が直々に出向こう』

『『『ツ！！？』』』

レギアスは「自分が奴と戦う」という意味でそう言った
それにはエクエスもペデスも動揺した

『お、お待ちください女王様っ！？何も貴方が表に出ることなどい

「ごいません！！人間の抹殺は我らの使命。ですから…」

「嫌、余はあの産物を壊すただけに出向くのだ。人間は皆に任せよう。・・それよりも光栄に思うが良い」

「お主らを長年苦しめてきた産物の存在を、息を今こそ余が消してやろうではないかっ！！」

そう高らかに告げるレギアス

ペデス達とエクエスの瞳にはそんな姿が輝かしく見えていた

それは：『希望』と呼ぶに相応しい程に・・・

エクエスは女王の同行を了承し、ペデス達に告げる

「貴様らあ！！女王様を絶対に援護するのだ！自身の命など」「ゴッ」
「と思え！！全てを女王様に捧げるのだあ！！！」

「オオオオオオオオオ！！」「」

〃
〃
〃

【レストラン SAUL】

「さあ着きましたよ」

「へえ… 木之城さん家ってレストランなんですね」

スバルはバイクから降り、着いた先は街から少し外れた先にある木造建築のレストランだった

看板には「SAUL」と赤いペンキで書かれていて、その雰囲気から一昔前のものを思い出させる

スバルは店を眺めているとほっと思い出し渋々といった表情になる

「こんな事しか出来ませんが家の料理をお召し上がり…」

「あ… あ、御免なさいあたしお金が…」

「構いませんよ、単なる恩返しなんですから」

「ホントですか？ありがとうございます！」

スバルは木之城の心の広さに感謝し頭を下げる

因みにスバルは今日財布を忘れた

嫌、敢えて忘れてきた

今日一（アイスを賭けて）ジャンケンをした事がそうだった

飯に負けたパターンになったとしてもスバルは金を持ってない

だからアイスを買う事がないわけで奢られる心配がない

要するに…保険をかけていた

それともうひとつ、『多分ティアが奢ってくれる』と思い、持つていく事がない思ったのも理由の一つである

そんな事を考え、ティアナに少し罪悪感を感じていると…サヤカが袖を引っ張っていた

「おねえちゃん、はーやーく〜」

「コラサヤカ！…すいませんね？」

「あ、いやいや大丈夫ですよ。あたし子供好きですし」

そんな会話をしながら三人は店に入っていく

店内は

ある意味意外だった

綺麗に並べられたテーブルや椅子、喫茶店のような落ち着いた雰囲気
で大人の世界をイメージさせる

此処までは良い、そう此処までは良いのだが…

中央の大きな丸テーブルの中心には

巨大な戦車

さらにカウンターには

アメリカ人の軍隊フィギア

その他モロモロ似たようなフィギアが飾られてあった

「……………」

「わーまたあたらしいおにんぎょうさんだー」

スバルは口をあんぐりと開けたまま啞然とし、木之城は俯いたままプルプルと震え、サヤカはフィギアが増えた事に喜んでいたのでカウンターには大佐のような緑色の服を着て、黒いロングヘアにサングラスを掛け、付け髭をした肌からして三十代ぐらいの女性が立っていた

「キノシロー！たかが買物に何時まで時間を潰すつもりだー！！さっさと仕度せんかー」（棒）」

「…………アリスさん。…それならアンタは何やってんですかぁ！？」

木之城は男声で喋る『アリス』に店に響き渡るくらいの大声で怒鳴った

スバルは憤怒状態の木之城の驚いたのかビクツと肩を震わせ、サヤカは気にしてないのか軍人人形で遊んでいた

「今度はなんですか何処の軍隊ですか！？何また変な飾り付けしてるんですか！！！」

「アハハハハ！イメージよイメージ！…今回はシリーズは南米軍隊です」

「良いんですよ！！余計なことしないでください！」

「ハア…分かってないわね。だから殺風景なのよ。思い出しなさいあの落ち着きようがない地味さを」

「良いんですってば！！派手とかそういうの僕は求めてないんです！」

ギヤアギヤアと騒ぐ木之城とアリスを余所にスバルは苦笑いを浮かべる事しかできなかった

「あ…ご、御免なさい！お見苦しい所をお見せしてしまって…今すぐ用意しますからね」

「アハハ…気にしないでください」

「お キノシロー、あんたもついに春がきたか!？」
「ひゅーひゅー!」
「ち、が、い、ま、す!！」

二十分後

「お待たせしました!オススメランチです」
「わあゝ」

出てきたのはオムライスだった
ふわふわした卵が綺麗にライスに乗せられていて、赤いケチャップ
が『』を書いてある
隣にあるトマトやブロッコリーから新鮮さが伝わってくる

スバルはオムライスを掬い、口に入れる
それが美味だったのか歓喜の表情になり、木之城もそれにつられて
笑みを溢した

「んゝ美味しゝ」

「ハハ、それは良かったです。幾らでも作りますからね」

「じゃあおかわり!!」

「え、もうですか？」

その後スバルは大盛りオムライスを五杯おかわりした

凄いなあ…あの子

木之城はそんなスバルを称賛した

ゝゝゝ

「ふいゝ…」

スバルは満腹になった腹を抱え、椅子に座っていた

サヤカはスバルに近好き遊んでもらおうとしたが、あるものに目が

止まった

その眼先は
なもの

スバルの左腕の袖にあるリストバンドのよう

「おねえちゃん」

「?どうしたの?」

「それなーに?」

「え?……ああコレの事か」

スバルは見やすいようにサヤカの眼前に『ソレ』を近づけた

『ソレ』は

藍色の宝石のようなものが中心にあり、その
宝石の中には水色の魔法陣が浮かび上がっており、それをバンドと
一体化したようなものだった

「コレはね……人を守る為に使うものなんだよ」

「ひとを?」

「そう……この子は何時もあたしの事を助けてくれて何時もあたし

は感謝してるんだ」

「へえ・・・」

サヤカは『ソレ』をまじまじと見つめる

一方見せているスバルはどこか懐かしそうな・・・悲しそうな表情が混ざったかのような顔つきをしていた

「・・・女の子がそんな顔しちゃ駄目よ、蒼風ちゃん・・・だっけ？」

「あ・・・？」

ヒョイと現れるかのように先程の女性・・・アリスが顔を出す

「話は聞いてたわよ。よっぽど大切なものなのねソレって・・・ただ」

「？」

「そんな辛そうな顔をするってことは・・・昔なんか嫌なことがあったの？」

「・・・」

アリスの質問にスバルは黙るだけだった

・・・あんまり思い出たくないわけね

アリスはスバルの様子を見て、聞かないほうが良いと思い、話を切り替えた

「あー御免さっきの忘れて」

「でも・・・」

「いーからいーから！さっきのはオバさんの独り言。分かった？」
「ハ、ハイ」

アリスはスバルの隣のテーブルに座り、うまい棒を食べながら話していた

「・・・なんかアンタ見てるとさあ若い頃思い出だすねえ・・・」

「アリスさんの若い頃？」

「自慢じゃないけど、アタシ元警察なんだよね」

「ええエ！？つつそおお！！」

スバルは身を乗り出し、昭和時代の漫画なら目玉が飛び出るほど驚いた

何しろ彼女にとってアリスは見た目から判断すると『仕事が見つからない駄目人間』にしか見えないのだ。もしくは『ニート』というてよい程だった

「・・・何よその驚き様、予想外？こんな軍人のコスプレしたお姉さまが警察だなんて超予想外とでも言いたいのか？？どうなの、ん？？

「？」

「ええ！いいや、そんな事滅相も思つてございません」

「ハア…兎に角一応警察なのよアタシヤ」

スバルは目の前にいる女性の威圧に若干怯えていたが、アリスは頬杖をしながら話を続ける

「一年位前かしらね。アタシ、警察ではなんかの発明の研究者だったのよ」

「え、刑事とかじゃないんですか？」

「そういう責任感がありそうなのは無理。やってらんないわそれよ
リアタシ機械とか弄るの好きだしね」

「へえ、それって何の研究なんですか」

「あー御免、そこんとこ個人情報だから」

「まあ段々飽きてきたから辞めたんだけどね。…あ、そうそう」
「？」

「キノシローの兄貴も警察なのよ」

「キノシローって…木之城さんの事ですよね」

「そうそう、その兄貴『マコト』っていうんだけどね？まあ兄弟共々礼儀正しくてね。ちよつと優しくしてやったくらいで恩返しなんだらと…」

「ハ、アハハ…」

確かに似てるなあ・・

「ハハ、面白いなあマコトさんって。そういえばそのマコトさんって今何処にいるんですか？」

「・・・・・・」

「ん？」

「・・・・・・」

「あぅ・・・・？」

「マコトはね・・・・」

「逃走中」

「へ？」

答えがあまりにも予想外だったのでスバルはつい間抜けな声を出してしまった

「当時マコトには恋人がいてね、〔久藤 マナ〕って言うのよ」

「で、ある日銀行に強盗が入って人質をとられた事件があったんだけどね。．．その中にマナちゃんもいたのよね」

アリスは話を続ける

「その強盗、警察に身代金を要求したあげく『金を持ってこなきゃ二分毎に人質を一人ずつ殺していく』とか言いだしてね。ホントに殺して行つたのよソイツ。マコトの奴『マナも殺される』とか思ってたんでしょうね．．．何も考えずに突撃したのよアイツ」
「．．．」

「此処からは人質からの情報らしいんだけどね？マコトの奴強盗に向かつて二発くらい撃つたらしいのよ。それで．．．」
「それで．．．？」

「内一発は強盗に当たったけど・・・焦ってたんでしょうね」

「もう一発は マナちゃんに当たっちゃたのよ」

「！！！！」

「結局マコトは怯える感じでその場から逃げて…事件解決といえどマコトは射殺の罪が課せられて現在は消息不明ってことになってるらしいわよ」

全てを聞き……スバルは絶句していた
あまりにも衝撃的すぎてどう返答すれば良いのかわからないのだ
必死で脳内をフル回転させ、言葉を見つけ出そうとするが…頭が真

っ白になって全くわからない

「アリスさん……」

「っ！」

「キノシロー……」

木之城の声で思考が正常に戻った

彼の視線はアリスに向けられている

それは優しさでも何でもなく……恨み

そんな視線を彼女に向けていた

「アリスさん……関係のない人に気分を濁す様な事を話さないでください」

「……悪かったわよ」

「それは本当に反省してるんですか？……」

「き、木之城さん……」

「……おにーちゃん？」

木之城はズカズカと歩み寄り、殴りかかろうとする形相だった
そんな彼を慰めるように声をかけるスバルとサヤカ

その時

キイイイイイイイイイイイイイイイ

「っ!!」

突然木之城の脳内で何かが響くような音が拡散する

木之城はすぐさまコートを取りに行き、外に出ようとする

「アリスさん・・・話は帰った後です。逃げたりしないで下さいよ」

「おにーちゃん?・・・」

「どうしたんですか・・・?いきなり・・・」

木之城は彼女達の声に耳を傾けることなく外へ出て行った
店内にはスバル達三人しかいない

・・・・・・・・

「・・・すいません、あたしちょっと失礼します」

「あ、・・・おねーちゃんどこいくの」

スバルはサヤカにバイバイと告げ、店から飛び出した

「バーカ・・・」

彼女の脳裏には木之城の姿が・・・G4の姿が写っていた

~~~~~

警視庁

一方警視庁では波乱が起こっていた

それは

アントロード達が警視庁に乗り組んだこと

本部に攻めてくるなど今までにない事だったために局員一同パニックに陥っていたのだ

そんななか・・・タカヒロは急げと言わんばかりに全力で走っていた

「クソッ！・・・どうなってんだよ！なんでアンノウン達がいきなり・・・」

「

タカヒロの意識はそこで途切れた

場所は廊下の突きあたりの所

何が起こったのかタカヒ口は崩れるようにその場に倒れる

そんなタカヒ口を・後ろから眺めている者がいた

そしてその者は

口元を引きつらせ笑みを溢していた

## TARGET・4

### マコトの罪／蟻の策（後書き）

更新遅れて誠にすいませんでしたmー（　）m  
昨日、祖父達とで鳥取の温泉に浸かったものでして…

次回からはなるべく早めに更新します！

番外編

泥棒一味からのお預かり（前書き）

ティアナ「…あたしは違うでしょうよ…!？」

似たようなもんだよ？

番外編

泥棒一味からのお預かり

- - 光写真館

やあ皆、海東大樹だよ

本日のお仕事一（という名の窃盗）は一時お休みだ

久々に士達に顔を見せてあげるついでに預かって欲しいのがあるしね

海東「君達、ご機嫌麗しゅう？」

スバル「こんにちは〜！」

アスム・ティアナ「お邪魔します」

．．．．．  
シ                      ン．．．．．

おや．．？

珍しく誰も居ないのか．．？

何時もならマスター（栄次郎さん）が作ったお茶菓子で  
士と小野寺君が取り合いをして、笑いの女神様に制裁を喰らってる  
と思っただけだね・・・

スバル「アレ・・・居ないのかな？」

アスム「士さん達はたぶん出かけたにしても、栄次郎さんは絶対家  
には残ってますよね・・・」

ティアナ「後何でか分からないけどお菓子作ってるし・・・」

スバル「うーん・・・栄次郎さん居ますかー！」

・・・シ

ン・・・

スバル「・・・え　　！　　いい　　-　　！　　！　　じい　　-　　

！！！！ろおおおさああああん！！！！」

ちよ蒼風ちゃん……ポリュームを下げてくれないかな!?

ティアナ「うっさいわよスバル!! もうちょいボリューム下げなさい!!」

アスム「み、耳が……」

スバル「ウエエエエエエエエエエ！！！ズイイ！！！！  
ルウウオオオザアアアアア・・・・」（以下省略）」

うう・・・何か二年位前の夏に聞いた事があるような、ないような  
声が・・・

士「うるせえっ！！！！」

ゴォン！！

スバル「ギョボっ！？」

アスム「あ、士さん」

ああすまないね・愛用カメラで顔面クリティカルヒット決めてくれて・・・

君に感謝するのはある意味久しぶりかな・・・？

ところで・・・

海東「・・・・・・・・それは何の決心だい？君は」

ティアナ「・・・・・・・・つぷ・・・・・・・・」

アスム「つ、士さん（汗）」

スバル「・・・・・・・・きゅ〜@〜@」

士「……戻る気はないし、何も決めちゃいない……!!……」

・・読者の皆に分かりやすく言うと・・

全身黒に人間の骨組みのような白いラインが入ったタイツを土は着ているね……

普通なら顔もマスクで覆うけど……流石に其処までは無理か

夏美「あ、御免なさい！大樹さん達来てたんですか？」

ユウスケ「何か聞いたことあるような声だったけど……スバルちゃん達だったんだ」

キバーラ「あら アスム君いらっしゃーい！」

アスム「お久しぶりです皆さん」

・・・ナツメロンやキバーラも居たのか

マスターは居ないみたいだけど・・・あの人だったら買い物かな？

ティアナ「すいません。いきなりで悪いんですけど・・・土さんのアレは」

夏美「ああ・・・次の世界へ移動したら何故かその場で変わっちゃって・・・」

ユウスケ「何時もなら外出た時だけ変わるのにな・・・」

士「・・・何故よりもよって一番着たくないのを・・・!!」

何時もみたく『俺様何でも似合うぜ発言』はしないんだね・・・  
まあアレって色んな意味で着たくないしね僕もそうだし

スバル「ところでアイスありますか」

ティアナ「復活早ッ!!」

士「オイ、力馬鹿さつき爺さんの事呼んでなかったか？」

スバル「スバルですよッ!!居ないんだったらしょうがないですし、また作ってくれるのかなッって思っ

キバーラ「あら、それって前に栄ちゃんが作ってたのでしょ?出来たのが冷蔵庫にあるっていつてたわよ」

スバル「わーい？」

ユウスケ「オレもなんか食べよっかな」

クロックアップ並の速さで冷蔵庫に行っただけど・・・  
彼女連れてきてれば、ゼクター奪えたかもしれないな・・・

士「・・・で何しに来た?お前が来るなんて」

海東「『珍しい』かい?生憎コーヒを貰いに来ただけじゃ無いん

だよ？」

夏美「え・・・じゃあ何ですか？」

海東「それはね・・・」

）  
）  
）

ユウスケ「アスムを・・・」

士「預かってほしい？」

海東「そっ」

ティアナ「何か・・・コイツこの世界の黒幕には興味あるけど、後回しにして良いから別の世界に向かうらしくて・・・」

スバル「そふえふえふえ、ふろはくにはいほうすふひは、はふふふんほひはらほひふほうはしふへ」

（それでね、黒幕に対抗するには、アスム君の力も必要らしくて）

ん？ああ蒼風ちゃんならアイス食べながら喋ってるよ

士「何でアスムなんだ？」

海東「・・・この世界で君達がすることはライダー全員に関わる事だからね。君達や少年君の力は必須なのさ」

夏美「大樹さんは・・・この世界が何なのか知ってるんですか？」

海東「ああ、でもそれは君達がすべき事だからね。僕はリタイアさせてもらつよ」

」  
」  
」

ティアナ「それじゃあ有難うございました」

士「大体分かったが・・・それはホントなんだろうな？」

海東「僕が今まで嘘をついた事なんてあるかい？」

アスム「ありますよね？」

スバル「それじゃアスム君、イイ子にしてるんだよ！！」

ティアナ「迷惑かけるんじゃないわよ？」

海東「直ぐに帰ってくるから」

アスム「は、はぁ・・・」

蒼風ちゃんはい子い子な感じで少年君の頭を撫でているけど・・・  
・・・少年君も一応思春期の男子だからね、たじたじみたいだ

海東「（・・・じゃあ例の件頼んだよ？）」

アスム「（あ、ハイ・・・メダルですよ）」

一応耳打ちで警告しといたし・・・この世界にもう用はないな

〃  
〃  
〃

士「この世界ですべき事か・・・」

士は写真館内にある絵に目を向ける

それは

銀色のメダルが大雨のように降り注ぎ

上空には様々な異形達が要塞を守るように立ちふさがり

仮面を付けた者達が各自のバイクに跨り、要塞に立ち向かっていき

そして・・・

赤い鷹の仮面に肩に鬼のような角と赤い体で金色の脚をした、異色の者が

先頭を切っていた

-

**番外編**

**泥棒一味からのお預かり（後書き）**

今回は息抜き程度に作ってみました

次回はG4編ラストを更新するので楽しみに!!

スウパア!! ヒーロー!! タ・イ・ム!!!

T A R G E T ・ 5

侵略する蠟／怒濤のMISSION（前書き）

ブラッキン「映画・・・見たいなあ・・・」

海東「其処までかい？」

ブラッキン「うん超見たい」

ティアナ「今年の春に高校進学の男が何言ってるのよ」

スバル「仮面ライダーラブに年の差なんてない！！」

アスム「スバルさんに同じく！」

海東「コア大戦もそろそろ発売するだろうし、DVDに期待してお  
くべきだ」

ブラッキン「…そうしょ」

## TARGET・5

## 侵略する蠟／怒涛のMISSION

警視庁、未確認生命体班室

此処では主にG3など対未確認生命体強化服を管理する場所であり散索員がモニターを通してアンノウンを察知し、タカヒロが其処へ出勤する事が彼らの任務  
そして現在も日本全国にモニターを通してアンノウンの出現に警戒を高めている……

はずだったのだ

『ククク……さあ皆の衆、掃除だ！！このような不必要な力を持たすではない！！！！』

『女王様の命令だあ！一欠片も残すのではないぞお！！』

『『ギギギイイイ！！！！』』

『『『シャアアアアアア！！！！』』』

現在、此処では大量のアントロードこと

ペデス達に侵入され

ていた

その数は街で出現した時よりも遥かに多かった  
部屋全体がペデスの体色の黒で覆い尽くされる程で、何体いるかな  
と数え切れない

それ以前に  
そのペデスが襲ってきているというのに数え  
る暇等ない

その場に居た班員は突如現れたアントロード達に襲われ、パニック  
に陥っていた  
数十人の男女は混乱しながらも班室から脱走し、運良く拳銃を持っ  
ていた者達はペデスに向けて発砲する。だが、一方のペデスは無傷  
と言わんばかりに発砲していた者達に向かって襲いかかる

「ク、クソっ!!」

『ギイイイ!!』

「アゲツ!!」

「「「ぎゃああっ!!?」」」

ペデスに殴られた男達は血を吐き、そのまま床にへたり込むように  
気絶する

少なくともペデス達は襲った人間は殺すことなく、先程のように  
気絶させるなど抵抗できないようにするだけである。彼らが抹殺す  
べき人間は『超能力を持つ人間』であって、それらを持たない人間  
は対象外であるからだ

『……どうだ?これこそが我らの『脅威』。存分に味わったな?』

「…っ！…くっ…離さないよっ！！」

『人間風情が！！女王様に何たるご無礼をッ！』

『まあ止せエクス…それより産物を探せ。奴は何としても仕留めるのだ』

その光景を傍観するのはフォルミカ・レギアとエクス

そしてペデスによって羽交い締めになされているスミコ

レギアはスミコの頭を掴み、ペデスが荒らした部屋を見ながら見せしめるように言い、そのスミコはレギアに向かって怒りが混じった声を浴びせるが、エクスは女王に無礼とスミコの腹を蹴る  
その際苦痛の声を漏らしてしまうが、レギアは彼女から視線を変え、ペデス達を見つめたまま告げる

『女王様、先程別室でそれらしき物をペデスが発見したのですが…  
…いかなさいますか？』

『消せ。形は違えど奴と同類という事は確かだ』  
『承知いたしました』

スミコは苦しみながらもレギア達の会話を聞いていた

産物っていうのは…たぶんスーツの事…

管理室にあるスーツを…破壊しようとしているの？

彼女は読みは見事に当たった

彼女そう考えている間にこの部屋の隣の『対未確認生命体強化スーツ保管庫』にあるMILDやその他のスーツを原形を留めなくする程粉々に粉碎していた

どうして…こんな事に…

スミコは目の前で起きている惨状に苦悩しながら思っていた

これは数十分前に遡る…

スミコ達対策班はいつも通り機械と向き合っていていつも通り仕事をこなしていた

ちなみにタカヒロはトイレで用を足していたわけだが…

その時だった

突如床が光りだし、その場にいた者は目を瞑り驚愕する  
光が弱まり…目を開けるとさらに驚くべき事が起こった

「ア、アンノウン!?」

「な…どうして此処に!」

『フフフフ…皆の衆!!散らばれ!!!』

レギアの声でペデス達は各自動いた…

~~~~~

- 同時刻

「ちい・・・一体どうなってんだ・・・!？」

一方トオルは逃げる時に偶然逃げていた者達と行動していた
出来るだけ被害を少なくするようにペデス達から目を欺きながらス
ミコ達が居る班室に向かっていた

「（別地域の警察の応援を待とうにも・・・これだと全員御陀仏だ
な・・・）」

「み、南さん。も、もう・・・限界です!」

「逃げましょう!このままじゃ私達・・・」

「分かった　　- だがお前らだけでぞ」

その言葉に刑事の男女達はえ・・・?と驚く

「嫌だから・・・俺一人でアイツらのトコまで行くって」

「な、何言ってんですか!！」

「氣い付けるよ?見つかったら全速力で逃げとけ死にたくなきゃな」

「馬鹿な事言わないでくださいよ!？」

「そうですね！！アイツらはもう放って行きましょう！！南さんが死ぬなんて・・・」

男の刑事はトオルの事を気にかけて説得するが・・・
トオルは刑事の胸倉を掴んだ

「・・・え？・・・」

「・・・南先輩？」

「　　オイ若いの、『放っておく』ってのはどういう事だ？」

「え、だって・・・」

「怖いのか？」

そう話すトオルはいつも通りの口調だが・・・その静かな雰囲気
怒りのオーラが混じっている
そのオーラに全員が怯んでいた

「まあそりゃ怖えよな。俺だってハッキリいってあんな化け物共相手するなんざ、何賭けられようがお断りだよ」

「・・・」

「でもな・・・あの馬鹿のタカは毎回あの化け物に立ち向かってんだぜ？」

トオルはその言葉に全員がハツとした
この状況で『神一（笑いの）より授かりし馬鹿』と称されるタカヒ口の名が出るとは思わなかったからだ。トオルはそのまま続ける

「内心怖えはすなんだよ・・・だがアイツは毎回戦ってる。怖ええはずなのに戦ってるんだ。それも何回も失敗やら、逃げられてんのに全然へこたれねえ素振りしてんだよ」

「そんな不幸続きの毎日なのにな・・・それでも出勤してんだ。スミコ達もそんなアイツのサポートに回ってる・・・それなのにジジイの俺や、お前らもサポートしなくてどうするよ？」

トオルはそう言い立ちあがりながら、話を終える
そして・・・目の前にはペデス達がいた
それには全員目を見開いて腰を抜かしていた
- トオル
以外は

「さらにだ・・・そんな奴にカツコつけさせて・・・黙って引き下
がれるかつ!!」

「み、南さんっ!!」

「「南先輩!!!!」」

「「南さん!!」」

トオルは右拳を握りしめ、無謀にもペデス達に突っ込んでいく
「無謀」 そう考えるがトオルの背中には迷いの無さが一つも浮
かんでいなかった - が

ブオオオオオオオオン！！！！

『ギギイイ！！？』

「んを！？」

突然彼の後ろから黒と銀のバイクがペデスの頭上に突っ込んだ
そのバイクに跨る者を トオル達もペデスも驚きを隠せな
った

「・・・・・・・・」

「マコト・・・？」

ガードチェイサーに乗りながら・・・G4はそのままペデス達に再
び突っ込む

右手に06改を持ち、轢きながらさらに斬りつけながらペデス達を
翻弄する

味方の異変に察し、ペデス達が先程よりも増えるが・・・G4はガ
ードチェイサーに乗ったまま全速力でペデス達に向かっていく・・・
が

「・・・なんてな」
『『ツ！？』』

G4はガードチエイサーのスピードをMaxにしたまま、ガードチエイサーから飛び降りるように離れる
ガードチエイサーは単体でペデス達に突っ込んでいき

『『ギギヤアアアアアアア！！！！』』

爆発した。ペデス達は爆散し、ガードチエイサーも粉々になった
其処では炎上して誰も近づく事はなかった

「まあこんなところか・・・」
「・・・」

その場にいる視線はG4に向けられている
G4の装着者：マコトに対する意味で・・・
だがその中でただ一人　　・トオルだけは全く別の感情だった

「お前さん…マコトじゃねえだろ？」
「「え！？」」
「！？」

「完璧に演じてるつもりだろうけどな・・・ベテラン舐めんなよ？

自分で言うのもアレだが推理力、洞察力、勘は観察係でもピカイチだぜ。中が誰かなんて分かる」

全員はトオルの言葉でもとても信じられなかった

G4がマコトじゃない

マコトじゃないとしたら…彼は何者なのか？

現在全員の思考はそれで一杯だった

「教えてくれ、何故お前がG4なんざ着てんだ………」
「シロウ」
「よ」

「……違う……違う！……オレは……木之城マコトだっ！！」

G4は叫び、走りながらその場から離れる

トオルには仮面越しで……G4の背中から悲しみや焦りといった負の感情を感じた

ポケットから煙草を取り出し、一服してから呟く

「……わからんねえ……若い奴の考える事あ」

~~~~~

「うー．．ん．．．何処だろココ」

その頃、スバルは警視庁に忍び込み廊下を歩きながら．．．とい  
うか迷っていた

しかし困っている様子はなく、むしろ誰も居ないことに疑問を持っ  
ていた

まず警察と何の関係の無い一般人が普通に廊下を歩いているという  
のに、今まで一人とも会ってない

さらに人の気配が全く感じないのだ  
『警察全員に何かがあった』、彼女にはそれだけが分かっているこ  
とだった

「ホントに何で誰も居ないんだろ．．．あ」

スバルはトコトコと歩いて行くと前方にある者を見つける  
それは．．．

「違う．．．違うんだ．．．違う！オレはッ！．．．」

小言で何かを呟きながら走っていくG4だった

G4とスバルとの距離は5メートル位だったが……どういうわけかスバルには耳に届いていた

スバルは走っていくG4の姿を見つめていると……

「G4だよねアレって……何だろう、何でかよくわかんないけど……」

スバルは眉を寄せて、胸をギュッと握りしめた

「凄く……悲しそう」

）  
）  
）

## 班室

「何でよ・・・どうしてよ・・・」

スミコは目の前で起こっている光景がとても信じられなかった  
しかしペデス達が荒らした事は既に身に染みた  
だが今はあの時よりさらに驚いている  
それは...

「どづいうつもりよ、・・・タカ!!!!」

G3が  
から…

ペデス達を仕切るようにエクエスの隣に立っていたのだ

T A R G E T ・ 5

侵略する蠟／怒涛のMISSION（後書き）

5話構成のつもりが・・・習い事の都合で6話構成になってしまいました・・・

本当に申し訳ありませんm（ー）m

G4の真実・・・必ずや明日で判明することをここに誓います！！！！

ではまた！

スウパア・ヒイロ・タ・イ・ム！！！！



アスム「まだ言ってますかアンタは!？」

貴大「んじゃ…変身!」 プロトドライバー装備

mode Proto

プロト「速効で決めるか」

Pフェニックス「了解です!!……ウワッ!？」

ディエンド「プロトフェニックスは僕が頂くよ」 右手に

Pフェニックス

Pフェニックス「ウワワアッ!？」

プロト「あのコソ泥……!?せつかく来てやったのに!!」

アスム「……と言う訳で後書きに続きますね」

## 対未確認生命体対策班室

場所は移り、再び班室

スミコの目の前には大量のペデスとエクエス、その女王レギア

そして…エクエスの隣に味方のように立つG3の姿が

「何やってんのよタカ！？何でアンノウンと一緒にいんのよ！？」  
「…ハハハハ！！私もどういう訳かは知らん！！だが一つだけ分かることは…この者はお前達を裏切ったという事だ！！」  
「…。」

スミコの質問に無言のG3、その隣に居るエクエスは嘲笑うように説明する

「貴様らが産物を保管していた所だ。この者は部屋中にあった産物を余す事なく粉砕していたのだ」

「・・・なっ・・・！？・・・」

『最初は我らも警戒していたがな…今この通り我らに忠誠を誓ったのだ！』

『コイツも此処で潰す気だったが・・・我らアントロードの恐ろしさが身に染みたのだろっ』

レギアも同意するかのようにエクエスの後ろで呟く

だがスミコはその発言に耳を貸さなかった

今までこのアンノウンと戦ってきた男が急に敵側に寝返るなんて考えたくもなかった

「アンタ達・・・タカに何をしたの！？」

『何だ、言ってる事が分らんのか？なら付け足しておくが・・・』

余に『洗脳』という力は全くもって皆無だぞ？』

「嘘だ！！」

その時だった

部屋中にある音が響いた

突然響いたその根源にその場に居る者全員が目を向ける

その矢先は                    班室の出入り口用のドア

ドアの前には

右手に06改を構えながら立つ・・・G4の姿が

「G・・・4・・・!？」

『・・・待ちくたびれたぞ。我らを消し去る・・・忌まわしき存在めが!!!!』

~~~~~

「確か・・・コツチに行つてたような気がする・・・」

一方スバルは先程見かけたG4を探していた

G4が通つたであろうルートを追うように通つていったものの

又直ぐに見失つてしまったのだつた

スバルはキョロキョロと目を凝らして探しているがG4の姿は微塵すら無い

『・・・忌まわしき存在めが!!!!』

G4は右手に06改を持って襲いかかってくるペデス達に振るう要領で斬り付け、左手には01改でこちらも同様ペデス達に向けて発砲していたが、その動きは何処か、ぎこちなかった

その証拠に01改から撃つ弾がペデス達から外れ床に当たったりでごく僅かしか倒せていない

それと対象的に接近戦での06改ではペデスに3体もろとも倒すことが出来ている

見つからないよう隠れてG4の戦い方を見ていたスバルはふと考えていた

（あの人・・・右利きだから銃が使いにくいのかな？）

スバルが考えて出した結果、『G4は右利きなのではないか』という事だった

戦況による場合もあるが明らかに06改で戦っているほうが倒す敵の数が多い

慣れない左手で戦うのは、その人が右利きでは不利なのだ

『どけ、奴が余が倒す』

『女王様ッ！』

レギアは黄金の鑑を取り出し、G4に直接対決に挑もうとする
そして鑑を取りだした時

G3がレギアの手の手を的確に撃った

『アゲツ！？』

『な！女王様！！！！』

「はっ！？」

その現状を真近で見たスミコはつい間抜けな声を出してしまった
ついさっきまで敵に寝返った男がその敵に攻撃を仕掛けたのだ
罷かと考えるのは彼女もエクエスも同じだったようで同時にG3に
目を向けた

『貴様ああ！！女王様の何たるご無礼をしたか・・・！知っての
行為かああ！！』

『・・・っ・・・おの、れ！』

「タカ・・・？アンタ何で・・・』

「失礼なのは君達だよ？僕とあの天然君を同一扱いしないで欲しいし、その前に女王の召使いになんてなった覚えもないからね・・・」

G3はタカヒロとは全く違った口調で言い放ち、G3のヘルメットを脱ぐ

その素顔は20代前半の青年で、ウェーブが掛かった黒髪というタカヒロとは全く別の人物だった

エクエスは装着者の事など構わないようだったが、スミコはその人物に困惑し、さらに偶然見ていたスバルはその人物を知っていた

『何だっ！？』

「だ、誰よ・・・貴方・・・」

「

だ、大樹さん！！？」

G3スーツを着ているのは昼頃からずっと別行動をしていた海東だった

スバルの声に気づいた海東は両腕を上げ、ヤレヤレのポーズをして呆れていた

「ハア…蒼風ちゃん、何で此処に来てるんだい？悪事をしていた覚えはないけど…自首？」

「してないですよ！そ、それを言うなら大樹さんだって何でそんなカッコ…！」

「…当然お宝のためさ」

海東はレギアの手を打つ際、落とした鑑を拾いながら告げる

「アントロード族のクイーン1世から代々受け継いできたといわれる伝説の武器であり、神器『黄金の鑑』…これ以上貴重なお宝なんて存在しないよ」

『余の神器を！？』

『貴様！大人しく女王様にお返ししろっ！…！』

「お断り」

海東はエクエスに言い放ちながらディエンドライバーで発砲し、不意打ちを浴びせながら

相手が怯んでいる内にG3スーツを脱ぎ、海東はディエンドに変身する

「何処の世界でも動き辛いつたらないな…変身…！」

【KAMEN - RIDE DI - END !】

「・・・やっぱり僕にはこっちの方がお似合いだ」

『何だその姿は!!?』

『何だろうつ構わぬ・・・余を侮辱した行為断じて許さんぞ!!』

エクエスはディエンドの変身に驚くが、レギアは怒りに震えディエンドに突進する

~~~~~

男性用トイレ

一方タカヒロは・・・

「ZZZZ・・・」

個室トイレで睡眠中だった

数十分前・・・

「・・・どうなってんだよ!？」

(来たか・・・)

タカヒロが通路曲がった瞬間

海東はディエンドライバーの銃口に睡眠薬を混ぜた針を忍ばせそれをタカヒロの首筋へ向けて撃つ

プスッ

「はんれ〜?」

タカヒロ KNOCKDOWN!

~~~~~

ディエンドはレギアの攻撃を飛び上がって避け、ペデスを避けながらスバルの元に向かう

「蒼風ちゃん」

「大樹さんあたしも戦います！！あたし達が力を合わせれば・・・！」

Standby ready

スバルは何時になく真剣な表情になり、右腕にあるバンド
「リボルバンド」の隅にある

ボタンを押し待機音が流れ、変身の構えをするが・・・ディエンドに止められた

「え？大樹さん？」

「君は鑑と・・・警察の娘を頼んだよ」

「お、重っ！！何で、です、かあと、とと・・・」

「あそこに置いておいたら何かと危険だからね。それと鑑は絶対に渡さない事。くれぐれも汚したりしないことだ」

ディエンドは鑑の管理とスミコの確保をスバルに任せG4の戦いに参戦しに行く

任されたスバルは足がふらつきながらも渋々了承し、スミコの身の安全の確保に向かった

ディエンドはブラストをペデス達に浴びせながらをG4から遠ざけ、その隣に立つ

「・・・何だよ？オレはお前がG4のシステムを欲しいと思っ
たが・・・？」

「・・・今のG4には何の価値も無い事が分かったからね」

「価値がない？」

「君のG4のシステムにはチップが搭載されていない・・・違うか
い」「木之城シロウ」君？」

「！？・・・ちがつ！」

「凶星だろう？」

死んだ木之城マコトの弟のくせにね

「

『シャアアアア！！』

海東に名前と呼ばれたG4は動揺し、ペデスが襲ってきたがディエ
ンドのがキックを浴びせ、床に転がってしまう

そしてさらに動揺させたのは『死んだ木之城マコト』という発言に
もだった

「2年前、当時刑事を務めていた木之城マコトとはある事件をきつ
かけに海岸から飛び降り自殺した。それを君と彼を追っていた複数
の警察官が追っていたが、時既に遅し。追いつめた時にはちょうど
彼が飛び降りる時だった。尚この件については警視庁上層部によ
って『逃走中』という事で揉み消された・・・だったかな？」

「…何処で知ったんで…たんだ？」

「さあね？…その後アナザー…嫌『アギト』と言つべきかな？アギトだった君は警視庁から離脱した浅沢リサと手を組み、所持していたG4システムを使い木之城マコトとして生きる事を決めた。…現在は『アリス』という偽名を使ってるらしいけどね」

「…全てお見通しという訳ですか」

G4は先程のぶつきら棒から丁寧な口調へと変わった
声から考えるに
スバルが知っている木之城だろう

~~~~~

【2009年 5月13日】 天気：雨

…兄さんが死んでから1カ月経った

僕は今でも・・・兄さんが死んだなんて信じられない・・・考えたくない人として、刑事として・・・完璧だった兄さんが何で死ぬんだ？あんな善良な人間が・・・死ななきゃいけないんだ？

「キノシロー」

・・・リサさん？どうしたんですか・・・そんなずぶ濡れになって・・・

「あんだこれからも・・・アギトとして戦う？」

いまさら何を・・・

「戦いますよ・・・それ位しか僕にはする事がないんですから」

「じゃあ・・・その戦い方<sup>スタイル</sup>変えてみない？」

は・・・？

「G4システム。あんな不気味な姿よりこっちの方がまだマシじゃない？」

「な、何言ってるんですか！！それって人間の生命を・・・」

「吸わないし、奪われない」

「え？」

「『生命を吸う』って言うのはスーツに搭載されているG4チップの影響なんだから・・・簡単な事。チップを抜いちゃえば良い訳よ。だからその分G3同様装着者の力だけで戦うスタイルになる訳だけど・・・戦闘経験じゃ警察の馬鹿より豊富なんだから平気でしょ」

「そ、それは・・・多分」

「でしょ？・・・」スーツを動かすのに人体というパーツが必要『なんて言われてるけど、こうすりゃ立場逆転。』装着者がスーツを操るを操る形になるのよ」

その時考えた

僕がG4になって『兄さん』になれば・・・？

何時もと言う訳じゃ無い・・・G4の時にだけ・・・兄さんになれば・  
・？

喋り方も、戦い方も・・・兄さんになりければ・・・消えた事には  
ならない

兄さんの存在が・・・これからも・・・

~~~~~

「
羨ましいね」

間を開けて、ディエンドが呟いた
G4はそんなディエンドに「え？」と返すが彼は直ぐに弁解した

「嫌何でもない。そんな事より…君のおかげでついに一つ完成だ」
「完成って…何の？」

？を浮かべるG4にディエンドは二枚のカードを見せる
1枚は【FINAL-FORM-RIDE】と書かれ、G4の姿に
ギガントが写ったカード
もう1枚は【FINAL-ATTACK-RIDE】と書かれ、G
4の紋章が写ったカード

「といっても…この状況じゃやり難いからね。ペデスを敵側のほう
に集めてくれるかな？」

【ATTACK-RIDE……INVISIBLE！】

「き、消えた!？」
『先程から…何をほざいておるのだああ!!!!!!』

ディエンドはカードを装身し、透明化する【ディエンドインビジブル】を発動し、それに驚くG4を今までずっと待機していたエクエ
スが大鎌を振り降ろそうとするが素手で受け止めた

「
-忘れてちゃいないよ!!-」

『グッ！？』

「僕：オレは兄さんの分まで！人類を、皆を助ける！！だからお前らに殺させはしない！！」

G4は鎌を受け止めながらもエクエスの腹に蹴りを放つ
レギアは武器を奪われた状態では分が悪いと判断したのかペデス達に命令する事しかできなかった

『グハア！』

『チイツ！…やれ！！お前からで殺すのだ！！』

『『『シアアヤアア！！！！』』』

複数のペデスが襲いかかるが、G4は信用深いがディエンドが言った通りにペデス達をレギアの方へ1か所に集めながら上段蹴りや懐に潜り込みパンチなどで反撃することにした

「ハア！！やああ！！」

『グギイ！』

『ギイヤア！！』

時に投げ飛ばし、06改で斬り付けながら相手を前方に飛ばしながらペデス達を翻弄していく

「此処だよ」

「うわっ!？」

突如G4の目の前にディエンドの姿が現れ、後ろに居たG4もエクスも驚いてしまう

その隙を突きディエンドライバーの銃口から複数のライダーカードがターゲットサイトを描くように集まり、レギア達に向ける

「ハアッ!！」

ディエンドライバーの引き金を抜くとターゲットサイトが集結してシアン色のビームが撃ち出される

- これこそがディエンドの必殺技【ディメンションシユート】である

ディメンションシユートは真つすぐレギア達諸共撃つ抜こうとするが・・・

『固まれっ!!女王様は何としても死守するのだ!!』
『なっ・・・お前達!?!』

何とエクエスは大鎌を構え、ペデス達もレギアを守るように1か所に集まった
しかしディメンションシユートは止まる事はなくレギアを残し、全滅した

『『『『『ギヤアアアアアアアアアア!!!!』』』』』

『・・・ば・・・馬鹿な・・・!!・・・お、ノレエエエエエエ!!!!』

同志を消された恨みからか、血迷ったのか
レギアは狂ったように咆哮を上げる
だがディエンドは余裕の態度を一切崩さずカードを装身する

【FINAL-FORM-RIDE・・・・・・・・G・G・G・G4
!】

音声が発せられた同時にディエンドはG4の後ろに回り、銃口を突きつける
突きつけられているG4はいきなりの事なので訳が分からず、たじろいでしまうが
一方でディエンドはお構いなしといった感じで引き金を抜いた

「え？何をするんで……ウワァッ!？」

「痛みは一瞬だ」

撃たれたG4は突然浮かび上がると、彼の武器であり4連のミサイルランチャー…ギガントに変形する

これこそがG4のFFR【ジーフォーギガント】である

ディエンドはGギガントを肩に担ぎ、標的をレギアに合わせ、ディエンドライバーにカードを装身する

【FINAL - ATTACK - RIDE…G - G - G - G4!】

『アアアアアアアアア!!!!!』

レギアはディエンドに突っ込んでいくが、既に彼女は的ではないGギガントから四つのミサイルが発射されそれらは全てレギアに直撃した

『グワワアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!』

- ドオオオオオオン!!!!

Gギガントでの必殺技【ディエンドデリート】を喰らったアントロ
ードの女王ことレギアは爆発しながら消滅したのだった
ディエンドは溜め息をつき、GギガントをG4に戻す

「ふう…一丁上がりって所かな」

「……あの」

「ん？」

G4はディエンドに手を差し伸べる

「有難うございます。おかげで奴らを倒すことが出来ました」

「…丁寧な口調だけど、兄の事は良いのかい？」

「今日で辞めます。戦いながら考えてたけど死んだ人にな
りきつてもソレは自分のためにも、兄さんの為にもならないから・
・兄さんもきつとそう言うと思うんです…これからは【シロウ】
として生きていきます」

「…まあ確かにそうかもね」

ディエンドは少し照れながらもG4の手を取った

「そつえば貴方って不思議な力を持っていますが…何者なんです
か？」

G4は先程のFFRやFARなど人間の科学ではとてもじゃないが
あり得ない力に疑問を持ち
質問する。そしてその答えは

「通りすがりの仮面ライダーさ、覚えておきたまえ」

~~~~~

- テント場

「イダダダダ！？痛い痛いよティア〜！！」

「うつさいわね！！今日あった事に反省しなさい！」

全員が集合するとスバルは早速お仕置きを食らったのだった

腕を逆方向に曲げようとし、首ホールドを喰らっている

スバルはギブギブと途絶えているが、怒りパワー全力全開のティアナには聞く耳を持たなかった

そんな彼女達を尻目に海東はこの世界でGETした鑑を丁寧に拭いていた

アスム・・・は恐らく何処かの世界で大組織と戦闘中だろう

「さあて・・・次のお宝つと」

そしてこの世界で手に入れた二枚のカードを眺める海東はどこか満足げだった

〜

- - - ???の世界

M i g h t y

「ラアアアアア!!」

『ギアアアアアア!!』

黄金の体にAの文字が刻まれている戦士は異形に斬激を浴びせる  
倒れた異形は腰のバックルが開き、戦士はそのバックルにカードを  
投げた

すると…異形はカードに吸いこまれ戦士の手元に戻ってきたのだ

「これで…6体目だ…!!」



スバル「ジャコーダ？」

天「いやゝ清々しいリンチだった」

貴大「同じ『たかひろ』として何かと気に食わないからな」

王蛇「ああ・・・イライラがすっかり消えたぜ」

スミコ「皆ありがとね」

アスム「今回は本当にありがとうございました！」

スバル「また会いましょうね！」

貴大「ああ、あのコソ泥以外3人だったらな」

王蛇「さあて・・・戻って殺りに行くかあ・・・」

天さん&カイザーさんありがとうございました！！（＾　＾ノ

## 番外編

### 子鬼の帰還と人参制裁（前書き）

次回から本編に入ります

今回はちょこつと休憩話です

それと若干小説の書き方も変えていこうと思います

## 番外編

### 子鬼の帰還と人參制裁

A M 0 6 : 4 0 【テント場】

時刻は夕方

空に架かる真っ赤な夕日で辺りは淡い紅色に染まっている

其処に突如灰色のオーロラが現れ、一人の少年が背伸びをして現れる

「うー…ん、やっと終わった・・・」

少年の名は【アスム】

彼はとある組織との戦いに勝利し、戻るべき場所に帰還したところである

アスムは懷から鷹の紋章が刻まれた金色のメダルのような物を一枚出す

「何か他にもそれらしいのがあったけど…コレで良かったのかな？  
帰ったら師匠に聞いてみよう」

不安そうに言いながらメダルをしまいながらアスムは海東達のテントまで向かった…

くくく

「只今帰りました」

「アスム君お帰り」

「やっと帰ったきたかい」

「お帰り」

アスムの帰還にスバル、海東、ティアナが迎える  
ちなみに現在海東はマーボー豆腐を作っており、何とも香ばしい匂いが広がっている

スバルは愛用枕で寝ころび、ティアナはハンモックで寛ぎながら本を読んでいる

その本は【地○の拳と○屈の魔○女】という長編小説で彼女は最近この本にハマりつきりなのだった

「何処でも盾ね、ホント・・・最近手塚さん見ないな・・・」

「ティアソレ何の本？」

「同情できる本」

~~~~~

A M 0 7 : 5 3

「ちょっと」

「どうしました？」

ティアナがマーボー豆腐をおかわりしようとしたが、蓋を開けた途端裏返った声で呟き、アスムが尋ねる

「・・・・鍋の中がオレンジの欠片で埋められてるんだけど？」

えー…詳しく説明するとオレンジの欠片もとい【人参】がこれでもかと言う感じで余っている

しかもだ。色とりどりの野菜と辛味のタレに豆腐だったマーボー豆腐は

某ボケツトの生物で炎の力を持つヒヨコのようにになっていた。それも細かく

軽く芸術^{アート}である

.....

「痛たたたたっ！?!御免なさいティア〜!」

「凄いなー食べ物であんな可愛いのが作れるなんてー（棒）」

「ほ、ほらアレだよっ!!絵画とかであるじゃん!野菜とかフルーッ使って人の顔作る奴!!」

「あつたねー懐かしーでもスバルちゃんはオレンジしか無いのが汚点だねー（棒）」

「いやあ…材料が少なかったもんで!ハハアアいだアアア!!?」

「後は黒と赤と黄色だけどさー赤はあるでしょー?君の中にー（しっこいが棒）」

「ゴメンなさい!!ちゃんと食べますから〜!!?」

ティアナ激情態は優しそうな灰色の目で笑いながらスバルの頭を撫でている
微笑ましいのだが何故か絶叫しているのは…爪を食い込ませてるかなかな?

「良いんですか…？止めなくて」

「もう慣れた。…それに第三者として見たらコントにしか過ぎないし」

海東はS心剥き出しの笑みを浮かべ、彼女達を見届ける
アスムは溜め息をつき僅かな頭痛を感じていたのだった……

〃〃〃

A M 0 8 : 4 9

「ふうう…」

「湯加減はどうですか？師匠」

「ん、まあまあかな」

夕食を終えた海東はドラム缶風呂に浸かっている
その隣には火を起こし、湯加減を調整しているアスムが居る

ちなみに先程の二人は最初に風呂に入って今はテントの中でぐっすり眠っている

「お背中流しましょう大樹さん」と誘ったスバルだが、プチ激情態

ティアナの女の眉間チヨップを喰らった事で事無きを終えたのだった

湯船に浸かりながら、彼はアスムが採取したメダルを指で弾きながら眺めていると…

「レア物も良いけど・・・もっと欲しいな」

「え？」

「…このメダルだけでも十分価値はあるけど・・・一枚だけじゃ物足りないな」

海東は物欲しそうな瞳で呟いてると、頭の電球が光りだす

（本家の所に行くべきだな・・・海賊君にも協力してもらおうか）

口元を引きつらせ、意地の悪い顔をする海東を見るアスムの顔はよく分からないと言った感じで？を浮かべる
しかしその顔はすぐに変わる、何故なら・・・

チャリイーン…ボスっ

「「あ…うあああああああ！！？」」

弾いていた【コアメダル】、炎の中に華麗にダイブしたのだから

「うわわああああ！？少年君救出だっ！！今こそ紅につ！！」

「僕出来ませんよ！？あ、熱っ！ああ！！奥行っちゃいました、し
しょー！！！」

「僕のコアメダラー！？」

「…ううん…・…煩いなあ」

そんな彼らを余所にテントの中で涎を垂らして寝てるスバルが呟いたのは誰も知らなかった

〃
〃
〃

同時刻 【???】

「…うえくしゅっ!!…うー…誰か噂してやがんのか?」

船長のような赤い服を着た20代前半の青年がくしゃみをした

〃〃〃

同時刻 【???の世界】

「ぶあくしょんっ!!」

「うわっ!?ビックリした」

「…チイツ…急に鼻がむず痒くなりやがった…」

「春だからね〜【アंक】ちゃん、風邪引いちゃったんじゃない?」

「アイスばかり食べるからだろ…ボソツ刑事さんにも悪いし…
あ!知ってるかアंक。誰かが人の噂したら、その人がくしゃみす

るって。お前誰かに噂されてるんじゃないか!!」

「・・・んなわけねえだろ!!」

何処かの世界の何処かの店でもくしゃみをする男が居た

T A R G E T ・ 7

輝く星の河（前書き）

スバル「あのさあ」
何？

スバル「思ったんだけど…あたしとティアの年って幾つ？」
えー…とね

スバル 15

ティアナ 16

のつもり

ティアナ「原作と若干ずれてない？」
あとちなみに海東とアスムについては、
中の人のリアルタイムで進行してる&MOVIE大戦後から2年後
って設定で

海東 21

アスム 16

ってなかんズイ？
ティアナ「え？アスムってあたしと同年代？」
スバル「じゃあ…少年とかじゃないんじゃない？」

まあ何て言うか…2年後と身長ざっと4?位しか伸びてなくて
背の順しても前から2、3番程度という…

海東「・・・この前オリジナルの方のヒビキに会わせてあげたけど
…」

アスム「『ハハ、全然変わってねえなーお前』って頭撫でてくれま
したけど…」

褒めてるんですね?アレは・・・」

スバル「どんまい」

虎太郎「牛乳飲む?」

アスム「　　頂きます。」

【テント場】 06:48

その日、海東大樹は虚ろな状態だった

早く起きたから眠気が半端ないという訳ではない
今までの生活でも睡眠は出来るだけとり、料理も自分でしてきた
以前士達に振る舞った事だってあるんだから

だけどね・・・？

僕は日々の生活習慣であるハンティングで疲れが溜まってる訳だよ？
人間なんだから疲労はするよ、それは絶対

な の に だ

少年君・・・？

居なかったとはいえ、弟子なんだし僕の体調位知ってるはずだろう？
何でディスクアニマルに起こさせるかな？
ルリオオカミが鼻に噛みついてきたから思わず飛び起きちゃったよ僕

くくく

「ふああ・・・おはよう皆」

「あ、皆さんお早うございます」

アスムは鉄板でウインナーを焼きながら3人に挨拶する

海東とティアナは目を擦りながら起きており、スバルは完全に寝惚けながらも起きていた

ふとアスムは海東の鼻に薄らと齒形のような物がついている事に気付く

「あれ・・・師匠何か鼻に付いてますよ」

「・・・。」

「蚊に刺されたんじゃない？こんな野原じゃ刺されても可笑しくないわよ」

君の所為だよ・・・！？

と言いたい所だけど・・・あえて言わないでおこう

仮にも彼は善良で正直な子だ

アレはあくまでディスクアニマルの所為であつて、その主である彼に悪気も責任も無い

弟子として・・・氣遣つた行為・・・のハズ

だから士のように女子供関係なく怒鳴ったりなんてしないし、小野寺君のように感情を外に漏らした事なんて皆無と言つていいだろう

「ああ・・・そうだね、此処の所段々暖かくなつてゐるし出てきても可笑しくないかもね」

「そうですか、蚊取り線香出したほうがいいですかね」

「あたしらの所にもお願い。こつちまで集られちゃ困るわ」

「ねえ御飯食べようよ」

スバルは目を擦りながら3人に言う

少しは話を聞いて欲しいものだと思つて息を吐く大人一人と子供二人だが

1日のエネルギーの為に一応朝食は採るべきだ

そう思いアスムが作ったオムレツとウインナー、コーヒーのセットを有り難く頂く事にしたのだつた

〜

【???の世界】 10:26

朝食を採り、軽く一休みした一同は

ディエンドライバーの異世界を越える力を使い、次の世界へ向かった

その後は各自自身の行動をする事になった

海東はこの世界のお宝を探すため、愛用のキャップを深く被り探索に向かうらしい

ティアナは海東と目的は違えど、この世界を調べる為に散歩がてら調べに行く

そのティアナと一緒にスバルも連れて行くつもりだったが・・・

「・・・スウ・・・スウ・・・」

「スバルさん！起きてくださいよー！」

「寝かせてあげたら？昨日は世話になったし、

神器だって彼女のサポートがあってゲットできたしね」

「・・・其の所為であたしは数時間迷子だったコイツを探すはめ

になっただけだね」

食べて満腹になったのか、再びテントに入り眠ってしまっ
しかもとても気持ち良さそうに・・・

ちなみに今の季節は温かな春まつ盛り

すぐ近くには桜の木が絵にも描けないくらい美しく咲き誇り
その地には花卉が風に吹かれて舞い上がっておりピンク色のカーテ
ンを作っていた

そんな良い環境でスヤスヤと寝息をたてて眠っている・・・
流石に起こすのは悪いと思ったのか、内一人を除いて一同は
スバルを一先ずお留守番という事になったのであった

そういえば・・・

「アスム」

「?・・・ハイ」

「コイツと海東は兎に角・・・アンタはどうすんのよ?」

「僕はちよつとスーパーまで降りて食材を購入してきます」

「一応500円持たせておいたから心配無いと思うよ」

「ええ、後は川で釣るか、食べられる草とかで補っていきますし
持ち金も少ないからメニユーもちよつと貧相になるかもしれません
が・・ご了承くださいね」

「あ、いや別に気にしなくてもいいわよ・・」

ホントに良い子ね・・・アスム

ふとティアナはそう思ったのだった

~~~~~

【公園】 13：12

海の近場に此処の公園はある

本来此処では様々な国人が訪れリラックスが出来る絶景スポットで  
ある

夕焼けが照る日の海は鮮やかな青色から日の終わりを告げるかのよ  
うに赤色に染まるのだ

今日其処には人どころか鳥一匹すら居ない  
それは何故か？

『異形』二体と『戦士』二人が対立しているからだ

「ハア！！オラア！セヤアア！！」

「・・・・・・」

『グオオオオ！！』

『ギイツ！ガギヤ！！』

その異形の名は【アンデッド】

虫類・鳥類・魚類、そして人類の祖先であり、不老不死の超生物である

その内の二体、蛙の祖先である『フロッグアンデッド』とコブラの祖先である『コブラアンデッド』は二人の戦士の猛攻に苦戦していた

「・・・チイツ・・・何時まで経っても弱らねえなあこいつ等・・・  
オイ『ナツミ』！」

こっち来て手伝え。一斉攻撃で一網打尽だ」

「『シン』お前馬鹿みてえな事抜かすな。僕だって手一杯だって事  
分からない？」

つか、んな屑に何時までかかってんだ」

「あああ！？うつせえな！」

コブラアンデッドと対立している『シン』と呼ばれている男は荒々  
しい口調で、杖と槍が合体したかのような武器『ランスラウザー』  
で、その容姿は緑を基調し、Aのスペルが刻まれたライダー

### 【ランス】

『ナツミ』と呼ばれた者は一人称が『僕』だが女性のような高い声で  
喋っており、弓矢と銃が合体したかのような武器『ラルクラウザー』  
で遠距離からフロッグアンデッドに発砲している  
その容姿はランスと似て、Aのスペルが刻まれているが体色が赤色  
のライダー、【ラルク】である

ランスはコブラアンデッドに接近し、間合いを詰めラウザーを振り  
回す

斜めに切り裂き、直球に突きを浴びせたりと一切反撃を許さず攻撃  
を仕掛ける

隙が生まれず、受けられるコブラアンデッドは防戦必死だった

「おいおい、どうした！？こっちは未だ半分も出してねえぞっ！！」

『シャアッ！！ギャッ！ギャアアア！！』

「……………」

『ゲギイイ！！ゲゴオア！！』

一方のラルクは二体と一人より若干遠く離れた所で  
フロッグアンデッドにラウザーの銃撃を浴びせている

その攻撃はランスとは違い、敵に取って多くのダメージが与えられる場所を

仮面越しながらもピンポイントで撃っていき、敵はまさに虫の息だった

アンデッド二体が各々の攻撃で弱った所で

ラルクとランス二人は仕上げにかかろうとし、カードを一枚取り出す

『グ……ギイ……ア』

「……………殺るぞシン」

「命令すんなつ！」

M i g h t y

M i g h t y

〴〵〴

・・・同時刻 【駐車場道路】

「こんな所で会うなんてね・・・」

星河ティアナは佇んでいた

蜻蛉の祖先『ドラゴンフライアンデッド』を前に・・・

だが・・・

（コイツ・・・何で攻撃してこないの？）

『ギョルルルル・・・』

今までの怪人って・・・人見かけたら襲いだすのを何度か見たことがある

でも、この怪人は目の前に自分と違う生物がいるっていつのに殺気が全然無い・・・

むしろ興味が無さそうというか・・・

畏？

だとしたら嵌る前に・・・

「ならこっちから行かせてもらっわ」

そう言い、ティアナは左腕の手首に巻きついていて、中心にオレンジとレッドが混合した宝石に魔法陣が浮かんだ白いリストバンド・・・

【ミラージュバンド】の端スイッチを押す

S t a n d b y   r e a d y

高い音声が発せられたと同時に待機音声が流れる

ティアナは両腕を前で交差するように構え、手はこれから敵を倒す武器のように

しなやかな指を揃える

そして…『あの言葉』を発する事で…

「                      変身っ! !」

S e t   U p !

光が少女を……ライダーに変える

T A R G E T ・ 7

輝く星の河（後書き）

つー！いー！！に！！！！

春休み終了日ですねー（ーーー）

勉強や部活動の事もあり、更新日が遅れるやもしれません・

一応金・土・日のどちらかで更新出来るかもしれませんが  
以後お見知りおき下さいませm  
m

TARGET・8

『A』の名を持つ切り札（前書き）

「天さんとカイザーさんトコの王蛇、+カイザの処刑タイム」

我らの判決を言い渡す！！！！

上3人「「死だ」」

タカヒロ「掟も何も破ってねえけど！！？」

『Maximum・Rider・Power』

『KABUTO・THEBEE・DRAKE・SASOWD・POWER』

『AllZecterCombine』

ハイカブ（天「マキシマムハイパーサイクロンッ！！」

『Maximum・Hyper・Cyclone』

カイザ「邪魔なんだよ・・・俺の事が好きにならない奴も・・・

『俺が嫌いな奴』もっ！！」

Exceed Charge

カイザ「ラアアアアア!!!」

「SUBRAVE」 疾風の方

王蛇サバイブ「……とつと消える……!!」

「FINALVENT」

王蛇「オ、ラアアア!!!」

バギヤアアアアアアア

タカヒロ「ボクハドコオオオオ!!!????」

これにて閉幕

「 変身ッ!! 」

S e t - u p !

音声が発した途端ミラージュバンドの中心からオレンジ色の光の粒子が溢れ、

ティアナの体全体を包みこむかのように集結される

彼女の体は細身だった少女の体型から眩い光を輝かせながら

徐々に時間を掛けながら姿を変えて行く

眩しく故目を瞑るドラゴンフライアンデッドの前で

その光は晴れ、先程とは違い仮面を付けた戦士の姿になる

純白のスリムな体に青い線のラインが走るジャケットを着て、

革製のスカートとベルト二つを腰に巻き、

バンドと同様中心に赤いラインが交差したオレンジのパーツを組み込んだ

同型の二双銃を装着している

腕にはミラージュバンドを付け、穴空きグローブが嵌められ

その眼光は変身する前だった自身の髪の色と同じ、メッキが付いたオレンジで

ピストルから発される弾丸と同じ、鋭い形をしている魔道士ライダ  
I . . . . .

『マスクドライダー・T』こと  
ティーン

仮面ライダー……

「さて……手始めにこっちから攻撃するわね」

『  
シャアアアアアア！！』

「え……！？ちよお……つと！」

ティーンはクロスミラーージュを両手に持ちながら右手に持っている銃をアンデッドに向け先手を打とうとするが、その敵は意を決したかのように形相を変え突進してくる  
転がりながら其れを回避しクロスミラーージュで発砲しながらドラゴンフライアンデッドから距離を離しておく

「あたしがライダーになったら……急に襲ってきた？」

そう考えている余裕は無い

ドラゴンフライアンデッド（以後ドラゴンフライU）は羽を展開させ、

上空へと飛行し、滑空しながら先程と同じく突進してくる

『キイイイイツー!!』

「くうっ!? 飛ぶ能力まで付いてるなんて・・・反則じゃないの!」

痺れを切らすティーンだが相手は手を緩める事なく

再び羽を展開させながらUターンし、何度も突っ込んでくる

ティーンはその猛攻に避けていくがギリギリの所で掠ったり、モロに直撃したりと、防戦必死だった

反撃にクロスミラージュー（以後?ミラージュ）に口元を近づける

「きゃっ!・・・つつ・・・撃ち落としてやろうかしらっ!」

「シュートバレット!」

Shoot - Barrett

中心部分が点滅すると

?ミラージュの銃口からオレンジの魔力弾が形成していき、

ドラゴンフライUの攻撃を避けながら魔力エネルギーをチャージしていく

直射型射撃魔法

『シュートバレット』

相手がUターンしながら攻撃し、背中を向けた寸前  
狙いを定めた

「そこだっ!!」

『キイイ、キギイイ!?』

圧縮された魔力弾が直進して発射され見事に命中する

ドラゴンフライUはティーンの攻撃に気づかなかったのかそのまま突進しようとし、

シュートバレットを諸に喰らってしまったのだ

羽を広げ再び飛行攻撃を仕掛けようとするがかなりの傷を負ったのか息絶え、立つ事もやっとなった

ティーンはその隙を見逃しはしない

へ相手もかなりのダメージを負ったみたいだし、

そろそろ限界……此処で威力のある攻撃をすれば……」

「一気に決める……クロスファイヤア……シュートッ!!」



「う、嘘ッ！？倒せてない！！」

彼女が驚いている通りである

ドラゴンフライは炎を上げながら虚ろに倒れている……

『倒れている』……とはつまり体がまだ残っている

今まで彼女は異世界を巡り多くの怪人と戦ってきた  
その際倒した怪人は跡形も残らないほど爆散し、倒してきた

しかしだ

この怪人はピクリとも動かず、  
恐らく倒したものの気絶したかのように倒れている

つまりそれは        まだ完全に倒せていない

このまま放置しておけば意識を取り戻し、  
再戦の危険性だって有り得る  
倒せたものの、技を繰り出す前はかなり苦戦していた為  
それだけは避けたい

☆起き上がる前にまた倒すしかないわね……☆

「……………バリアブルバ」

「どうした？何故封印しない？」

「ッ！？・・・誰ッ！！」

止めを刺すべきだと悟り？ミラージュに音声入力しようとするが・

・  
突如後ろからかけられる男性の声に反応し、振り向きながら銃口を向ける

その男は長身でフードが付いているコートで全身を包み、

ポケットに手をつ込んでこちらに歩いてくる・・・

フードを羽織っているせいで顔が良く見えないが

サラサラした茶髪に眼鏡を掛けているのが僅かだが見えた

それに声帯から考え、恐らく二十代前半の青年といった感じだろうか

「・・・オイ、何もしてない人間に銃向けるたあ、それでも仮面ライダーか？」

「つかライダー以前に人間としてどういう教育受けてんだ？」

『怪しい奴が出て来たら撃ち殺しちゃいましょう』って親からの教えか。

それ怖くね？」

「・・・良いから答えなさい。誰よアンタ」

「話聞けや・・・何でアンデッドを封印しない？」

倒したんだから後はカードで封印すりゃそれで任務完了ってこと  
たる」

「『アンデッド』？・・・それがコイツの名前なの？」

「はい？・・・嫌、お前知らない訳？じゃあ何？

お前、知らない奴を倒したの？」

「そうだけど？」

「怖ッ！！それ通り魔じゃんソレ！何なの、何にムシャクシャした  
の君は！！！」

「・・・むかつ・・・」

オーバーに背筋を震わせるリアクションをとる青年に  
内心苛立ちを覚えながらもティーンは警戒を緩めることなく  
？ミラージュの銃口を男に向ける

青年は仮面越しでも分かる睨んでくる目に

溜め息を吐きながら右ポケットから赤いバツクルのような物を取り  
出す

その行動にティーンは更に警戒を高め、銃口を向けるが怯えた様子  
は無い

バツクルに一枚のカードを装身し、腰部分にかざす

すると先端部分から数枚のカードが両腰に巻きつかれ、  
「シャッフルラップ」というカード状のベルトを装着する

ティーンの手とバンドとは違う淀んだ音声がバツクルから流れ、  
青年は右手の薬指と小指を握り、残りの三本を前に突き出しながら  
自身のベルト 『グレイブバツクル』を起動させた

「  
変身ッ！」

> O p e n u p <

音声が発されると同時にグレイブバツクルから  
黄色の壁 『オリハルコンエレメント』が前方に放出される  
それは徐々に放出された逆方向である青年の方に接近し、  
それを通じた青年は大きく姿が変わった……

その体色は金色のように神々しい黄色

全てを見通してしまうかのような赤い一つ目

至る所に『A』の刻印が刻れ、腰に大剣を装備した騎士のような体

その名は名の通り、『戦士』という意味を表す……………

『仮面ライダー グレイブ』

「あ、あんたが……………!？」

変身の一部始終を見ていたティーンは驚きを隠しきれなかった  
各世界のライダーの変身はこの目で何度も見てきたが

今まで変身のシーンを平然と見ていた事は無い  
ディエンドや響鬼は見慣れているが、最初に見た時は現在のように  
声を漏らしていたのだから……

何より自分とは違うその世界特有の変身が別世界の人間に  
とっては

新種の生物を見つける事と同等なのだ

グレイブは腰に下げたカードホルダーからラウズカードを取り出す  
落ちて着いてきたティーンはすぐさまグレイブに対して警戒態勢をとる

「何をやる気……！？武器型のトランプカードって正直有り得ないけど……」

「もしかしたら……！！」

ティーンはそう思っているうちにグレイブは輪投げの要領でカードを投げる

？ミラージュで撃ち落とそうと照準を定めるが……

「え！？、あれ……「通り越した？」」

「誰もお前みたいなアバズレ封印するかよ……用があんのはアツチ」

グレイブが指差す先には                      ベルト部分にカードが先程の力

ードが刺さったドラゴンフライUだった

ドラゴンフライUはカードに吸い込まれるかの如く消失し

カードは回転しながらグレイブの手元に戻ってくる……

最初は鎖が描かれたビジョンが写っていたカードだったが、

手元に戻ってきたカードはDFアンデッドを表すかのような奇怪な  
トンボの絵になり

其れにはハートのマークと『FLOAT・DRAGONFLY』と  
書かれていた

「コレで七体目……ありがとな。お陰でこっちの手間省けた」

「か、カードに吸い込まれた……？」

「……って聞いてねえし」

一通りカードを眺めたグレイブは無愛想にも礼をするが……  
アンデッドがカードに吸い込まれたのを間近で見たティーンは、興  
奮していた為  
聞く耳持たなかったとさ

【KAMEN - RIDE ACCEL!】

> Rapid <

> Blizzard <

「  
振り切るぜ」

「ッ!？」

だがそれは束の間  
突如グレイブの足元に多数の弾丸が当たり、後方には氷河期のような氷の壁が立ち塞がる  
さらにバイクをモチーフにした深紅の装甲とランプの如く青く光る目を持つライダー・・・アクセルが  
エンジンブレードを構え、斬りかかるがグレイブラウザーで剣筋を受け止めた

「な、何よコレッ!!」

「俺に質問をするな」

「お前じゃねえよっ!!っーか俺も知らねえ!!」

「じゃあ教えてあげようか?」

「・・・つく!お前は・・・!」

「か、海東!?!何でアンタが此処に!」

「おや?星河ちゃんも居たんだね」

ティーンが告げる通り、声の主はディエンドこと、海東大樹

その後ろには先程の『ペッカーラピッド』を発動し、ラウザーを構えるラルク

それに『ポラーブリザード』を発動したランス

アクセルを加えた4人と氷の壁に挟まれたグレイブにランスは言い放つ

「今日こそ倒してやるよ……ジョーカーッ!!!!」

T A R G E T ・ 9

キモチ重なる影（前書き）

「あたしの実力、見せてあげるわ」

ティーンバンドで変身！

S t a n d b y   r e a d y ・ ・ ・ S e t U p

仮面ライダーティーンに変身！！

音声入力で魔法発動！

A n c h o r - S h o t

S h o o t - B a r r e t

更にモードチェンジ！！

D a g g e r - M o d e

そして決める！！

S t a r l i g h t - B r e a k e r

DXティーンバンド!!!!

シリーズ続々登場!!

}}}

海東「ハイオツケー!!」

ティアナ「.....」

スバル「お疲れティア!」

ティアナ「.....」

アスム「玩具のCM撮るのって面白いですね!」

ティアナ「.....」

海東「D A R O」

アスバ「はははは!」



T A R G E T ・ 9

キモチ重なる影

「今日こそ倒してやるよ……ジョーカーッ!!!!」

「っ!!!!……くっ!」

『ジョーカー』、そう呼ばれたグレイブは仮面の奥で苦い表情をする  
ほんの一瞬肩を震わせたが、一秒も持たないだけであり誰も気付く  
事は無かった

一方のランスは言葉は行動へと繋がるかの如く、ランスラウザー――  
(以後RSラウザー)の剣先を  
グレイブへ向け接近戦へ持ちかける  
そんな彼に加勢しようとエンジンブレードを振るうアクセルだが・

・

「邪魔だ!!」

「な!?!?……ぐおおおお!!」

「「「!?!?」」」

「あ、あいつ味方を斬った!?!」

「どけ」と言わんばかりにランスはアクセルを蹴り飛ばす  
蹴られ倒れたアクセルに目も無くグレイブに突っ込みながら飛び上  
がり

上空からの突きを繰り出すが、後方に下がり避けられた事で当たる  
事は無かった

嫌それよりも先程の行動だ

味方であるアクセルを蹴り飛ばした事、あれにはその場に居た誰も  
が驚く  
ディエンドは何やってんだかと言いたげな溜め息を、ラルクは怒声  
を吐く

「シンツ！！何やってんだ！！」

「ぶった斬ろうとしただけだ！！」

「なら？貴重な戦力？を減らそうとするな！！只でさえ相手はあの  
ジョーカーなんだ

全体でのコンビネーションを考え、攻撃を仕掛けるんだ！！」

「説教嫌いだつつってんだろ！？うざいんだよ！！」

「・・・敵ながらいいい言葉だ感動的だな、だが・・・」

アドバイス

互いに口論を繰り替えす中、ラルクの言葉に反応しグレイブが割って入る

発言した言葉を最後に止めラウザーから三枚、カードを取り出し、グレイブラウザー（以後Gラウザー）の剣先にあるスキャン口にスキャンする

【Thunder】

【Slash】

【Tornado】

【LightningWAVE】

「無意味なんだよっ!!」

『サンダーディア』・『スラッシュリザード』・『トルネードホーク』の順で

カードの効果が発動する

その途端Gラウザーの剣筋に青色の雷を帯びた風圧が流れ込み、斜め後ろに構える

そのまま大きく振りかぶり・・・衝撃波を発動させた

「・・・ルアアアアア！！！」

「な、何！？あの技・・・！」

「クッ！」

「「うわああああ！！！」」

雷を帯びた風圧斬『ライティングムーブ』を前方に放ち

ラルクはギリギリの所で避けられたが、ランスとアクセルは直撃し、相当の威力に変身が解け、召喚されたアクセルは消滅した

鋭い眼つきにツンツン気味の黒髪の前髪を後ろに流し、緑色のジャンパーに青いTシャツを着た、ランスこと木翠シンはもがき苦しみながら倒れている

「あーちよつと・・・やり過ぎたか？」

「ああ・・・ぐあっ・・・!!」

「・・・まったく甘く見てるからだ」

パチパチ

「実に素晴らしい・・・その力絶対僕の物にしてあげるよ」

「あ・・・そっぴゃお前だけ戦って無かったな」

「何分平和主義でね、戦いとかそう言った類は好きじゃないんだ」

歓声？の拍手をしながらグレイブに歩み寄る者が居た

ディエンドだ

彼はアクセルを召喚してから戦闘に参加する事無く、後方に下がり傍観していたのだった

その証拠にライトニングムーブによるダメージを受ける事なく  
今現在こうして相手に近づく事が出来る

少し距離を開けて、真正面に向きあうディエンドとグレイブ  
右手には自身の武器、ディエンドライバー（以後Dドライバー）、  
Gライザーを持っている

「・・・武器持つてる時点でスゲエ攻撃的だと思うんだけどな、  
てか何で隠れてた訳？」

「僕は君の能力については無知と言ってもいいぐらいだ。そんな状  
況で戦場に出るなんて余りにも無謀すぎる。」

「そりゃそうわな」

「彼なら倒せるとまではいかないけど、出来るだけ君の体力を消費  
する事位安い物だと踏まえてね。だからこそ・・・」

「ある程度の傍観、更に弱ったその時まで待機し時が来れば  
自身が一気に叩く、か？」

ディエンドの言葉をラルクが繋ぎ彼は「正解」と評価する  
グレイブもほんの少し感心したが、シンだけは違った  
それならば自分は彼の思惑の材料にされたものだ

更にこうして倒れているのもディエンドの予想範囲内だったのかも

しない

『利用された』そんな考えが彼の脳裏に現れる

今なら此処でディエンドに駆け寄り一発殴り抗議したい  
だが出来ない

余程のダメージなのか起き上がるのが苦しい  
地面に手を付いて立とうとすると身体に鋭い痛みが襲いかかる  
敢えてゲームで例えるならば・・・『戦闘不能』、この言葉が彼に  
はピッタリだろう

「まあ結果ほんの一ミリも及ばなかったんけどね」

「で、予定とは若干ずれて・・・お前が相手になるって訳か・・・  
！！」

「　　そういう事だっ！」

【ATTACK・RIDE∴BLAST！】

【Tackle】

話の終わりを告げるかのように二人は自身のカードの能力を発動する  
ディエンドは『ディエンドブラスト』

グレイブは『ボアタツクル』

ディエンドは銃口を相手に向け、発砲しようとする

・・・が

『・・・昔からお前と同じだったんだ』

「!？」

突如突っ込んで来るグレイブに、もう一人のグレイブの幻影と声が重なる

何事かと重い引き金を引く指を止めてしまった

その結果ボアタツクルがディエンドに襲いかかった

「うわあああっ!！」

「・・・!？・・・」

「「海東!?!」」

ラルクとティーンは同時に彼の名を呼ぶ  
だがグレイブはディエンドの行動に驚いた  
何故攻撃を辞めたのか、避けなかったのか  
先程まで自分の戦術を観ていたのならば瞬時に避ける事だって恐らく可能  
追尾として反撃する事も可能のはずだ  
なのに・・・何故?

「嫌・・・何か仕掛ける為の作戦か」

「まだまだッ!」

「ッく!!」

「僕とした事が・・・何を今更」

【K A M E N - R I D E : C H A L I C E !    L E A N G L E !】

走りながらディエンドに接近し、突きを浴びようとする  
戦力を増やすべきだ

そう判断し、Dドライバーにカリスとレンゲルのカードを装身し、召喚しようとするが……

再び、あの声が脳に伝わる

『俺はそんな奴らを誘き出す為の……まさに餌を演じていたんだよ』

「ま、ただと……!？」

「よそ見してんじゃないわよ!!」

「!……ぐわ!？」

「……また避けない？」

「……エホ!ゴホツ!!」

再びたじろぐディエンドにティーンが声をかけるが  
間に合わず腹を突かれ、咽せながら地面を転がってしまう

先程から聞こえてくる声

未だあの過去を振り切る事に慣れていない・・・

前までは自分なりに隠してきたつもりだったんだけどな・・・  
最後までとっておくべきだったかな・・・この世界のお宝は

「分かった」

「ハア・・・ハア・・・？」

「・・・お前は特に何も考えてない、なら警戒せず倒していいって事だな」

【M i g h t y】

グレイブはGラウザーにカードを一枚、スキャンする  
音声が発された途端、彼の目の前にビジョンが発動される  
それをGラウザーで貫く事で刀身が金色に輝く

「これは・・・いけない！！」

「ルアアアアア！！！！」

ディエンドの・・・海東大樹の感覚が悟る  
危険だ  
すぐさま回避しようと動くが・・・

『自分の意思で

の元で働いていた』

『俺が第二の  
！』

となり・・・この世界を支配する！！

「くっ・・・ぐう！！」

「さっきから何やってんのよバ海東っ！！！」

「き、君何をしているっ！？」

「あ！？」

頭を押さえるディエンドに堪忍袋の緒が切れたのか、ティーンは身

を乗り出し彼の前に立つ

云わば彼の盾になっている

ラルクはティーンを止めようと声をかけるが、間に合わない  
グレイブもラルク同様驚くがラウザーを振るう直後だった為、止める事が出来なかった

光刀として放つ『グラビティスラッシュ』が地面を削りながら二人に襲いかかる

ラルクは止めようとしたが、それは必要無い事となる

「何で・・・何でよ・・・？・・・アンタが」

「お、おい・・・！？」

「ぐ……あ……ぐ……!!」

「海東っ!!」

……ディエンドが受ける事によって

〃  
〃  
〃

同時刻 【スーパー】

「ふう……こんな所かな」

一方アスムは海東達が居る所から離れた所にあるスーパーで買い出しをしていた  
その小柄な体に似合わず大量に買い込み、膨らんだ袋を腕に通しながら歩いている

周りの歩いている人々、特に年配の人には感心し微笑ましい表情をしていた

「早く帰って御飯の支度しなくちゃ」

そう言いテント場へと足を動かした

そんな彼を屋上から見上げている者が居た

漆黒に血のような赤いラインが入ったジャケットを羽織り  
黒に近い藍色のスリムな体付きをしている

その眼光はパープルの渦に黒い斑点が光っている

さらに右腕は怪人を思わせるかのようなおぞましい形で、  
黒、紫、緑といったブラツクなイメージがある色が混ざった色  
その手の甲には禍々しい形のモニターが装着されている

だが左腕にはそれとは違ったりストバンドのような装置が付けられている

それは……スバルとティアナが所持するバンドと凄似していた

「・・・足止め程度だと申したいし・・・この子達でいいわよね」

女性の声で呟く？ライダー？は右腕のモニターを操作し

Advent のリストを開き怪人が写った画面を映しだす

其処から二体選び出し、腕を上空に向け親指と人差し指を重ね弾いた

パチン！

「・・・行つてきなさい」

【KAIJIN - RIDE...CROW - IMAGIN】

【KAIJIN - RIDE...FLOG - FANGAIR】

少女は・・・..  
イレギュラー  
異端者を呼ぶ・・・

## TARGET・10

悪夢な苦しみ 怪盗な挫折（前書き）

『FINALVENT』

『Rider Jump・・・Rider Kick』

『Exceed Charge』

女性陣「ヤッ！！」 オールヒューマンキック

『1-2-3 RIDER-Kick』

『FINAL-ATTACK-RIDE DI-DI-DI  
END！！』

タカヒロ・シン「はっひふっへほおおおお！！！！！！」

アスム「あの…最後の誰ですか！？」

ティアナ「命拾いした拳句調子こいてんの！？」 今回不参加

海東「メイプル畑さんの所の勇樹君さ。…何故か僕が死んでいると  
いう設定の」

ティアナ」

間違いでも無いでしょ」

天さんはゼクターが治ったのでそちらにお返しします

T A R G E T ・ 1 0

悪夢な苦しみ 怪盗な挫折

『 俺はお前のおかげで真つ当な人間になれた』

『 馬鹿め、俺は自分の意思で動いていた』

それは違つ．．．！．．．お願いだ．．．

昔の．．．？皆の為になる事？を真つ当とした．．．

あの地の．．．人の為に．．．ライダーとして生きた

あの頃の貴方に戻ってくれ．．．！！

『後悔するぞ……俺を倒さなかった事を』

あの頃の……？海東純一？として……！！

「う…うん…っ！」

俯きながらも海東大樹は閉じた瞼をゆっくりと開ける。

その途端彼の目には真っ白い板が写った。

いきなり自分でも知らない光景に不思議がりながらも自身の状況に目を向けようと首を動かしてみる。まず除くように下を見てみるとふかふかとした白い布が置かれてあった。だが布にしては僅かな重みが覆い被さっている。それは？布？と同類の意味を齎すだろうか正確には？布団？という衣類。

そこで海東の疑問が整理されてくる。

最初に目に写った純白の板は・・・壁。

そして何より布団が覆い被さっているという事は・・・自分はベットか何かに横になっている。

何故ベットという心理まで分かるかは背中に伝わる感触だ。

布団と同様、雲に乗ったかのようなこの感触は地面から受けるものとは程遠いのだ

其処まで分かったのかは良いとして上半身を立たせるが・・・も  
う一つの疑問が脳を過った

「此処は病室か…？…いや…何故僕がこんな所に」

「…ッ！…！…そうか、あの時のジョーカーの攻撃に星河ちゃんが身代りになるうとして…それを僕が代わりに」

記憶の奥底から漸く湧き出していた。

ディエンドに変身した自分はグレイブの必殺技というべきか、攻撃力が高い技を受ける事になると思ったが

盾になるかのようにティアナは自身の前方に立ったのだ。だがあの技は如何にライダーに変身した状態であっても中身は女性の肉体。直撃すれば気絶などと言った安い物では済まないだろう。

だからこそ咄嗟の行動か…・…自分が受けるはずの物は自分で受けたのだ。

決して自己満足では無い、彼女の盾になった。

其処は対して気にして無い。？仮面ライダー？として戦う際無傷で宝を手に入れた事はないし、苦戦させられ、結局なす術も無かった事など、幾多とあったのだから。

…・…だが今回は一つだけある

ビデオを逆再生するかのようにその光景から遡ってみる

「…赤の他人に家系の一人を重ねるなんて…無謀すぎるよな」

「海東、あんた起きてんなら呼びなさいッ！」

「…ん？」と素っ頓狂な声を発してしまい声がした方を向いてみるティアナだ。彼女は説教に近い声で海東の元に向かい、近くに置いてあったパイプ椅子を開いていく。

彼女の眼つきは普段から吊り上げているが、今日は何時にも増した感じで睨みつけている様だった。

やがて椅子の形態にした後、海東のベットの隣に置き其処に腰掛ける意地の悪い笑みを浮かべた海東は冗談混じりに口を開いた

「お見舞いとは嬉しいな、君のキャラには合わないけど」

「…そのあたしのキャラがどうとかは知らないけど…何か腹立つわね…!？」

「察しなよ？」

「また眠らすわよ?…永久とわに」

静かに怒る彼女に子守唄（という名の暴力）を使われたら不味い。

逆に自身が察した海東は睨み倍增中の彼女を抑え、回避に成功したのだった。

やがて溜め息をつくティアナは膝に手を付き、そのまま黙りこむ。

.....。

部屋に響き渡る沈黙。

両者とも一向に口を開く事が無く、その場の時間が止まったかのような空間に居るようだった。

やがて沈黙した状態に耐えられなくなったのかは知らないが、海東から口を開く

「...ジョーカーは捕えられたのかい？」

「その？ジョーカー？って...あのライダーの名前なの？」

「嫌、正式には？グレイブ？。対アンデッドとしてこの世界の組織が作り上げたライダーシステム。ジョーカーはその変身者の正体さ」

「そのジョーカーもアンデッドっていうか...怪人がライダーに変身するの？」

「その事に関してはこちらから話した方が良さそうだね」

ドアが開くと同時に男性と女性が一人ずつ部屋に入ってくる。  
男性の方は白髪に灰色のスーツとズボンにネクタイを締めた三十代後半の男。女性の方はウェーブが掛かった茶色に近い黒髪に、膨らんだ胸にへそぐらいまでの赤いジャケットと短めのジーンズを羽織ったボーイッシュな格好でスバルの普段着に近い感じな二十代前半の女性だった。  
お辞儀をするティアナだが…海東はこの男とは初対面のように不審がる。こつちから尋ねようと思ったが、先に相手の方から口を開けたのだった。

「海東大樹君だったかな？…私は『尾張ヒロシ』。この？ABRO  
D？の責任者だ」  
アフロッ

「…『赤峰ナツミ』。仮面ライダーラルクだ。先程の協力とアンデッド討伐の件は感謝している」

「それはどうも」

軽く返事をするが、彼らが名を告げる際無愛想に話すナツミを見て海東はふとある人物を思い出す。

写真館の娘『光夏美』こと、ナツメロンだ。

しかし目の前に居る？ナツミ？とあちらの？夏美？は大分というか、かなり違う。

性格が特にそうだが…何よりバストが天と地の差と言っても過言で

は無いのである。

あえて彼女の胸には注目しない事にして、ヒロシは話を続ける。

「まずは初めましてだね…

ようこそ異世界のライダー達」

「…それは僕達の事かな？」

「星河さんから話は聞いた。君達は別の世界を巡りながら旅をしているようだな」

「はつきり言つて…信じられるかどうか不安だったし、言い訳の仕様が無かったから…」泥棒だ、何て言ったら不審がられるし…」

「ハハハ、何私達も耳を疑ったがね…君達の変身するアイテムが何よりの証拠になるんだ」

「「？」」

笑顔で告げるヒロシに『自分達の変身する際に使用する物が証拠になる』なると聞き、

ディエンドライバーとティーンバンドを取り出しながら、首を傾げる

「そう、それだよ。私達の組織には銃やリストバンドで変身するラ

イダーは存在しないからね…ところでそれらは何処で開発されたものなんだい？」

笑顔で質問するヒロシに二人は思い止まる。

『どう返答すれば適任』なのか迷っているのだ。

ディエンドライバーは大シヨッカーで開発され、自分はそれを強奪した。

だが…組織名がどうも？アレ？な為、信憑性に欠ける。呆られるか、苦笑されることが目に見えるのだ。

ティーンバンドの件は普通に自分達の世界の組織によって作られたといえれば納得するハズだろうが…

考えた末隣に居るティアナに耳打ちする。

「星河ちゃん」

「何よ？」

「僕と話を合わせてくれるかい？」

「は？…何でよ、てか近すぎー！」

「なら問題、…コレ（ディエンドライバー）を作った組織の名は？」

「何って…大シヨ・・・」

心理問題の答えに答えようとした時、

「あゝ」と何か納得したかのような顔をし、あくまで口に出さずに了解した

そんな彼らに不審がったのか、目を細めながらナツミが尋ねる

「どうした…？さっきからコソコソと何を話している」

「いいじゃないか、少し年が離れているみたいだけどカップルの会話ぐらい」

「ハッッ！？／＼／」

「言っておくけど…彼女は妹だよ。義理のね」

「ハッッ！？（怒）」

「おや…それは失礼」

「確かにあまり似てないし、髪の色もオレンジとは珍しいな。何処かのハーフなのか彼女は？」

「だ…あの、え、とおお…」

大人三人の話し合いの結果『義理の兄妹』という事で納められた所でコホンッとナツミから本題に入ろうとするが、ティアナが手を上げ

る事により止められる

「ところで…今回のアンデッドについてですが」

「あの、すみません」

「どうしたんだい？」

「その？アンデッド？とは何なんですか？」

「…そういう事なら予め話しておこうか」

「僕は大体理解したから必要ないけどね」

ヒロシはティアナにこの世界の事について説明する

一万年前、自らの種族の繁栄を掛けて行われたバトルロイヤル  
その戦いに出場していたのが不死の生物？アンデッド？なのだ

アンデッドはその名の通り不死。直接倒しても肉体は残り何れ又活動  
を始める

そこでアンデッド対策集団『A B R O D』はアンデッドを『倒す』  
のとは無く『封印』というやり方に至った。このラウズカードにア  
ンデッドを封印する事で肉体を監禁し、さらにその能力まで使える

代物

そして何よりジョーカーは人間でもアンデッドでも無いまさに未知の生物

そのジョーカーがバトルロイヤルに勝利した場合地球上の全種族を余す事無く絶滅させるといふ…

「そんな…」

「しかしここ最近妙な事が起きてな」

「それは？」

啞然と恐怖に満ちた顔をするティアナ  
其処でナツミがヒロシの話に繋げるように補足する

「海東、お前はあの場に居たから知っているだろうが…」

〈  
〈  
〉

1時間前…

> Might Y <

> Might Y <

「食らえエッツ!!」

「…ッ!!」

『ギヤアアアッ!!』

『グオオオオッ!!』

ランスは『マイティインパクト』をコブラアンデッドに、ラルクは『レイバレット』をフロッグアンデッドに決め、両者とも倒れる

2体のアンデッドのバツクルが開くと二人はカードを刺し、封印に成功したのだったが…

『　　ブウウウン!!』

「ガハアッ!？」

「ナ、ナツミイ!!」

突如現れたアンデッドによりラルクは攻撃を受け、その拍子にベルトが外れてしまい、ナツミの姿へと変わる。ランスはラウザーを構え、アンデッドと対立する

そのアンデッドは機械的な構造に人間の骨格のような姿をしたアンデッドであり、と言う訳か先程のアンデッドとは別格な気がランスを感じさせる

「ハッ!!何処のアンデッドさんだか知らねえけど、俺が封印してやるよ!!」

>Byte<

『ギ…ギイイ!!』

ランスは先程手に入れたカード、クラブの5『バイトコブラ』を発

動する

対するアンデッドも複眼をライトのように光らせる

「な…何だよ！…何で発動しねえんだよ！？」

『ギイアアアッ！！』

「しまっ！…グアアアッ！！」

するとどうしたものかスキャンしたカードの効果が発動しないのだ  
その後もクラブの6『ブリザードポーカー』とクラブの3『スクリ  
ューモール』のカードを試みるがラウザーはカードに反応する気配  
は無い。アンデッドはその隙を見逃さず手の甲に生えた爪を使い、  
ランスに攻撃を仕掛け、ランスは転がりながら倒れ、ラウザーも落  
としてしまった

アンデッドは無防備となったランスに接近するが…

【KAMEN・RIDE…DI・END!】

『グ…?ギアアッ!』

「「!?!」」

謎の音声が發されると同時に突如数枚のプレートがぶつかり、全枚が直撃したアンドッドは怯んでしまう  
プレートはブーメランのように回転しながら銃を持った灰色の体をした人物に刺さると…

「中々面白い事をしてるね?」

仮面ライダーディエンドがそこに立っていた!!

「な、何だありゃッ!?!」

「ライダー…なのか?」

突然現れたディエンドに驚きながらもラルクはそれを？ライダー？と認識する

一方ライドプレートでの攻撃を食らったアンデッドはディエンドを自身の敵と見なしたのか

砥ぎ爪を構え、ディエンドに迎え撃つ

『ブルルルアアアッ！！』

「おおっとっ！」

アンデッドの攻撃を避けながらディエンドは回し蹴りを決める  
そこからさらに二発繰り出し、至近距離からの銃弾を決めていくのだ

『グオオオッ！！』

「相手が掛かるみたいだし…大勢で手懷けようか？」

【ATTACK・RIDE…ILLUSION！】

カードを装身し、上空に向けて放つと撃った銃弾が四つに分裂し、

ディエンドと同じ姿をした実体としてアンデッドに立ち塞がる。これこそが『ディエンドイリュージョン』である  
合計五人のディエンドは濁流の如くアンデッドにキックやパンチ、銃弾を浴びせていく

「フッ!」

「「ヤアッ!」」

「「タアアッ!」」

『グオオオオオッ!』

さらに五人のディエンドは金色のカードを取り出す

「さて…フィニッシュだ」

『グ…アゴッ…!』

【【【FINAL-ATTACK-RIDE…DI-DI-D  
I DIEND!】】】

アンデッドが怯んでいる内に五人は素早い動きで四方を囲み、銃口

を向ける

檻に入れられた猛獣へ鞭を入れるかのように…同時に発砲する

「ハアアッ！！」「」「」

『ヤ…メアグオオオオッ！！！！』

四方からのディメンションシュートを食らったアンデッドは悲鳴を上げながら消滅する

その際言葉を発したような気がしたが…それは誰の耳にも届く事は無かった

一部始終を見ていたランスとナツミは彼に駆け寄りながら心底驚いていた

あのアンデッドをラウズカードに封印せず、直接倒したのだから無理はないだろう

「こんなものかな…トリアルというのモ」

「オイお前ッ！！どうやってアンデッドを倒しやがった！？」

「シン黙ってる。…君、名前は？」

「…海東大樹、『通りすがりの仮面ライダー』ってトコかな？」

「は？」

「オイ聞いてんのかよ!？」

その途端ナツミの左ポケットから音声が鳴る

木翠君、赤峰君、ジョーカーの反応が出た。至急向かってくれ

〽  
〽  
〽

「  
で、助っ人の力でも足りずボコボコにされた訳だよな」

「シン、お前居たのか」

「…さっきから居ただろ!？」

怒鳴っているのはランスこと『きみどり木翠シン』

彼もまた海東と同様重症を負い、海東の隣のベットで寝ていたのだ  
先程までずっとである

「それはともかく、ラウズカードの効果は無効化するアンデッドなどいるのでしょうか？」

「嫌そんなアンデッドは存在しない。居たとしても化学の力を応用しない限りそれは不可能だろう」

「化学の…ですか？」

「いや何でも無い。それよりもジョーカーについてだ」

ヒロシは腕を組みながら三人…嫌四人に話す  
そういえばと海東は手を上げる

「質問をしていいかい？」

「何だね」

「その探知機でジョーカーの反応が出たんだろう？ならそれを使い居所を突き止めれば早い話じゃないか」

確かにそうだ！と三人とも納得するが…

「それは不可能だ」

「どうして？」

「ジョーカーは人間に直接擬態する。それも常に人の姿で行動する為目で突きとめる事も出来ないんだ」

「…何？」

海東は眉を吊り上げて呟く

『ジョーカーが人間に擬態する』？

そんな話は聞いた事が無い

カリスの様にスピリットのカードの効果によって人間の姿になる事は知っている

だが…カードの効果も無しで？直接？人間に擬態するのか…？

「ところでね…海東君、星河君」

ヒロシは二人の目を真っすぐ見て告げる

「ジョーカーの封印に手を貸して欲しい」

「「え？」」

「アンデッドを直接倒せる君はとても高い戦力になる。人類の未来の為君達の力を貸して欲しいんだ」

「何言ってるんだよ、おっさん！？そんな事しなくてもオレが…」

「待ってって言ってるんだろ、…僕からも頼む、力を貸してくれ」

「ナツミまで！？」

深々と頭を下げるヒロシと同じく懇願するナツミをシンが抑えようとするが彼らは聞く耳を持たなかった  
その懇願をティアナは…了承する

「勿論です。やらせてください」

「おおお…！」

「イヤ、別にやらなくていいぞ？年頃の女がする事じゃねえし」

「それなら僕はどうなるんだ？」

「お前の場合は今時の女と掛け離れてんだよ。鏡見て来い」

「僕はパスだ」

「え？」

「何言ってるのよ？…誰よりもたか…他人の事に敏感なアンタが」

「…辞めた」

勿論嘘を通して催促するが…海東は一向に動く気配が無い  
それどころか布団を全身に包み、潜り始める  
さらに…とても彼とは思えない事を口にした

「ライダーは…今日限りで辞める」

「僕は…奴とは戦えないんだ」

「…え？」

彼の愛着…ディエンドライバーを投げ捨てながら、確かにそう言ったのだ

）  
）  
）

所変わって、スーパーの駐車場

「キャアアアッ！！」

「うわあああああっ!!」

其処では大勢の人間が恐怖に包まれ走り回っていた

突如現れたクロウイマジンとフロッグファンガイアが子供老人構わず襲いかかってくるのだ

偶然其処にいたアスムは響鬼に変身し、二体の相手をして、避難させていた

響鬼はフロッグファンガイア（以後フロッグF）を音撃棒・烈火でダメージを与えていく

「ハアアッ!!ヤッ!!」

『グゴッ!!ゲゴオオッ!!』

「イヤアアアアア!!!!」

「ッ!？」

紙を引き裂くかのような甲高い悲鳴が辺りに響く

その声に先に反応したのは響鬼

…彼の目にはとんでもない光景が映し出された

「貴方！！しっかりして貴方ア！！」

「パパー！！パパアあ！！」

…クロウイマジンに腹を裂かれ、地面を血で濡らす男性の姿が  
その妻と五歳ぐらいの娘は涙を流しながら、必死に夫の身体を揺さ  
ぶっている  
だがその夫は彼女達の声が届かないのか、届いていても起き上がれ  
ないのか…反応が無い

響鬼は仮面の奥で歯を食い縛る

目の前の敵ばかりに捕らわれ、周りの人達を犠牲にしてしまった  
自分をもつと気を配っていれば誰も傷つく事は無かったのかもしれ  
ないのに…  
自分のせいで…！

「くそおお！！！」

響鬼は烈火の淵を強く握りしめながら

再び襲いかかるクロウイマジン（以後クロウ？）に向かって走り出す

もう誰も…死なせる訳にはいかないッ！！！

その時だった

「どっっ…せいやああアア！！！！」

『ぐおおおっ！！！！』

「…え？」

突如クロウ？に一台のバイクが突っ込む

クロウ？は跳ね飛ばされ、それを見た人達は一斉に逃げ去った

「こちとら酒買いに来たっていうのに…何でこんな事なんだよッ  
…！！」

バイクに乗った人物は怒りに震えた声で呟きながらヘルメットを脱ぐ汚れたコートに艶が無いボサボサの茶髪に伊達眼鏡を掛けている二十代前半の青年だった  
睨み殺せそうな鋭い目つきでクロウイとフロッグFを見入るとポケットから赤いバツクルを取り出す

「ただでさえ不幸続きプラスアルコール不足で…イラついてんだ、責任取れよッ！」

「あ、あの…？」

響鬼は青年を避難させようと声をかけるが  
憤怒状態の彼には目の前の敵だけが見え、聞こえているようだった

先程ティアナと会った青年      『西黄<sup>にしき</sup>ジュンイチ』はグレイバツクルを腰に巻き付け、右腕を上げながら変身の構えをとる

「      変身ッ！！」

> O p e n u p <

バックルから排出された黄色のオリハルコンエレメントを潜りながらジュンイチはグレイブへと姿を変える  
拳を握ったグレイブは、腰に掛けたグレイブラウザーを握りしめながら二体に突っ込んでいく

「  
オルアアアアアッ！！！」

）  
）  
）

同時刻、『テント場』

この時刻になつてようやくスバルは目を覚ます  
昼頃までたつぷりと寝た彼女の顔は…何故か酷くやつれていた  
今の季節、未だ熱くないはずだがこれでもかという位に汗が溢れだしていた

「嫌な夢だったな……」

スバルは汗でべとべとになった顔を洗うため洗面所に向かう  
だが歩いている際……やはりあの夢が脳に映し出される

「やっぱり忘れられないよね……あの時の事」

「ギン姉……皆」

後書きを書くのは久々になりますね（＾　＾）  
ブラッキンです

えゝ活動報告にも書こうと思いましたが  
敢えて此処で聞きます

Wのポジションとなるライダーですが  
スカル（ケータッチから）にするかエターナル（統一性を考えて）  
にするか迷っています…。両方共ストーリーは出来ているんですが  
ねえ…（汗

霞さんとのコラボは其処でやる予定です

もしよろしければ感想でどちらか意見を書いてくだされば光栄です  
宜しく願いしますmm

T A R G E T ・ 1 1

晒されるグレイバー（前書き）

（今週の前書きのコーナーは都合上お休みさせていただきます）

海東「まあやること無いただけだよ」

スバル「尽きたんだよ」

『スーパ―の駐車場道路』

P M 0 2 : 2 6

グレイブへと姿を変えたジュンイチは腰に翳したGラウザーを構え、クロウエに向かっていく。

突如現れた彼に怪訝の眼差しを向ける二体だが考えた末『標的』と見なしたのか、各自の武器を手に取りグレイブに突撃する。少々早めのペースで歩きながらグレイブはGラウザーのホルダーを展開してカードを一枚手に取った。

「見た事ねえアンデッドだが…先手必勝ってことでまずは痺れだ」

> T h u n d e r <

ハベルトで変身したということは…あれがこの世界のライダー？

見つめる響鬼を余所にGラウザーにカードをスキャンし、スピードの6『ディアサンダー』を発動する。電気を帯びた剣筋をクロウエに突き付け更に相手に電気を通すことで追加攻撃を加えた。

『グオオオオツ!!』

「お前にはコイツでいいだろ!」

> B i o <

ハートの7『プラントバイオ』のカードをスキャンすることで手元から茨のツルを発生させる。生き物のように動くツルはフロッグFの体を拘束して動きを封じた。

『ゲゴツ!?!』

> C h o p <

「…ルアア!」

身動きが取れないフロッグFはハートの3『ヘッドチョップ』を脳天に食らう。渾身の一撃を浴びせたグレイブは目先をクロウエに切り替え、懷に潜りフックを腹に打ち込んだ。

『グアアツ!!』

「さて、ここらでお去らばになるぞ!」

締めと言う意味でGラウザーから一枚カードを抜き取る。そのカ―

ドは先程ディエンドを破ったカード…。

> M i g g h t y <

「ハアアア…!!」

音声が發されると同時に現れたゲートをGラウザーで刺し、刀身にエネルギーを溜められると二体に向けて一気に斬り裂いた。

「ルアアアッ!!」

『『グギヤアアア!!!!』』

『グラビティスラッシュ』をまともに受けた二体は黒い霧のような気体となって消滅した…。

それを見たグレイブは首を傾げ疑問を抱きながら変身を解き、ジュンイチの姿へと戻る。

「…? 体が消滅したという事はこいつ等…アンデッドじゃなかったのか?」

「あの、」

「あ?」

「さつきはありがとうございます！」

ジュンイチに駆け寄り頭を下げながらお礼をする響鬼。しかし筋骨な体つきとのツペらな鬼の形相の為クロウエと同等と見なし、目先を鋭くして再びバツクルを構えた。

「んだよ。まだ居やがったか！」

「あ！違いますよ！！……ホラッ」

「…え、は！？子供ッ！？うつそおおオ！！？」

誤解するジュンイチに弁解する為響鬼は顔部分を晒し？自分は人間だ？だと証明する。だがその前に鬼の姿をした者の素顔が自分より年下な顔つきをしたアスムの素顔に目玉が飛び出るほど驚いていた。それと関係ないことだがアスムは今年で16である。

「そんなに驚かなくても…」

「イヤイヤ本<sup>マジ</sup>気でビビったわ。どこぞのドッキリ並に」

「ハハでも先程は本当に助かりました。僕一人じゃ手が回らなくて…それに…」

「あ、お前も戦ってたんだ」

気づくジュンイチと対象的にアスムは苦々しい表情となった。先程男性が致命傷を負った事でだった。自分はたった一体だけに目を向け周りの事に注意を配っていなかった。だからこそあのような悲劇が起こったのだろう。それが彼にとって痛手だったのだ。

「…」

「オイどうした？急に黙り込んで…」

「…あの」

アスムはジュンイチが来る前の経路を話した。

張りの無い声で話すアスムにジュンイチは溜め息をつき頭をわしわしと乱暴な程度で撫でる。

「痛っ…！」

「氣い落とすな、むしろ誰も守る奴が居ねえで助けが無かった事のほうがかかり厳しいぞ」

「でも…最小限だとしても被害を負わせてしまったことには…」

「だからこそ。それを念にしてお前は見知らねえ大勢の人達から守ろうとしたんだからよ、ありがてえこっちゃんじゃねえか」

荒い口調だが彼なりの慰めの言葉をアスムに伝えている。

しかし結果が結果。それでも数人の命を守り切れなかった事は事実なのだ。ましてや開き直るべきでは無かったが…その分決意を固める事は可能だろう。

「もうあんな事は起こしちゃ駄目だ…。もっと強くなら無いと…！」

「ありがとうございます」

「よし、それでいいんだ」

うんうんと腕を組みながら頷くジュンイチだが、何か閃いた表情に変わりと「そういえば」と付け足しながら呟く。

「お前のそれって何だ？」

「え？」

「『変身』だよ。見た感じだとオレのバツクルと違うみたいだし、つてかいいい加減体の方の変身解けよ？」

「あー……その、何と言いますか」

「？」

質問されたアスムは口元をモゴモゴと困った様に頭を掻く。話せることなのだがその前の経路を話す必要がある。それは『答えられない』のでは無く『答えにくい』のだ。だがこのまま黙っていく事も出来ない。やがて意を決したのか相手に告げた。

「ちょっとその前に案内したい所があるんですけどいいですか？」

「は？何処にだ」

「長い話になりますし、そこで色々と話しますので…」

「まあいいけど…何でだ？」

疑問を抱きながらもこの少年に付いて行くことにした。その後買い物袋を担ぎながらジュンイチのバイクに跨り自分の帰る場所へと案内するのだった。

）  
）  
）

場所は変わって… A B R O D 資料室

薄暗い此処では図書館の様に何百枚もの厚さがある資料を纏めたホルダーがそれぞれの棚に保管されている。しかし其処は倉庫のような扱いなのか埃が舞い散り生温い匂いが漂っている。

そんな中で人の形をした影が動いていた。かなりの長身だが部屋の暗さが顔と同化して何者なのかは判別が付かない。その人物は先程から何かを探るようにホルダーの中の資料を一つ一つ眺めている。今見ている物を読み終わると人物の目的が外れたのかホルダーごと地面に投げ捨てる。

「駄目だな、どれもこれも知っている常識を詰めただけ…そう簡単に見つかってはくれないみたいだ」

かなりのホルダーを手に取り調べていたのか、盛大な溜め息をつきながら机に体を預ける。  
両腕を後ろに組んで枕としながら呆然と考え目的である資料の居所を探っていた。

「木を隠すなら森の中…紙を隠すなら…とまではいかないな。当てはほとんど見通したし」

疲労の所為で思ったことをつい口に出してしまう。  
それほどまでにその資料は『彼』にとって重要なようだった。

目元を細めながらしばらく天井を見つめていると…あるものが視界を捉えた。

天井の壁の一部に紙切れのような薄い物が僅かに見えたのだ。

「アレは…？」

男は棚を足場としてよじ登り近きながら確認を取ることにした。あくまで物音をたてずに慎重に登っていく。やがて最上まで登り詰めると薄い物はこの目ではつきりと映る。見た所その紙切れは天井の一部であるパネルに挟まった形で見る事が出来た。

「このパネル…外れそうだな大分固そうだけど切り離せば」

じっくり見た男は履いている右足の靴を脱ぎ手に取る。靴の裏側の皮を外すと中には小型のナイフや針金、ドライバーといったものが綺麗に詰められていた。

男はその中から小型ナイフを手に取り壁の一部を切り離していく。中にありそうな紙切れには傷を付けぬよう最善の注意を払いのこぎりの様に切っていくのだ…。

数十分後…

「ようやく見つけた…」

やがて綺麗に切り離れた一部を捨て手に握られた『資料』に笑みを浮かべ眺めていた。

彼の予想通り目的の資料は棚に紛れてたのではなく、上の天井に隠されていたのだった。

男はその資料に目を通すとタイトルに注目する。

そのタイトルは『A・L・J・O・K・E・R』と表記されている  
「…？」

何かおかしい。この題名は<sup>タイトル</sup>。

目を凝らしてみるとA・Lの字の前に僅かに黒筆の字が見える。どうやら埃の所為でタイトルの大半を隠していたようだった。おまけにこの部屋の薄暗さもあり度は増すだろう。

男は埃を払いながら資料の全般を確かめていく。

そして払いのけている内そのタイトルが露わになった。

「…！？これは…」

）  
）  
）

『テント場』 PM04:37

「…というわけなんですよ」

「信じにきいけど…何となく有り得そうな気がするな」

何時もの柔道着を着ながらアスムは話を終える。

彼がジュンイチに話していたのは自分が知っている事全て。

異世界のこと、仮面ライダーのこと、余す事無く話したのだった。

因みにスバルは買い物袋の中からオレンジジュースを取り出しごくごくと飲んでいる。

「ちなみにあたしとティアは大樹さんやアスム君とは違う世界に住んでいるんですよ」

「そのだいきとティアって奴は何処に居るんだ？」

「多分…この世界の探索だと思いますけど」

『へー』と頷くジュンイチだが…

…此処とは違う形で会っている事には気付いてなかった。  
そんな中スバルはジュンイチに声を掛ける。

「西黄さん」

「んだよ？」

「西黄さんってさ、仮面ライダーの他にも何かやってたりするんですか？」

「何かって…何の？」

「職業とかですよ」

スバルの質問に意味がよく通じなかったが、アスムが補正する。  
大体の意図が読めたジュンイチは何食わぬ表情になりながらも返答することにした。

「何もやってねえな。ココんとこ不景気だしよ、毎日バイト詰め」

「大変なんですネ」

「そうそう、しかも住んでるマンションとかもボロツちい上に大家のババアはうっせえしよあ、スゲー喧嘩した時なんかバイト先で泊ったことだってあんだぜ」

「そこまで聞いてませんよ」

「聞け。っーか分かち合おうオレの負の気を」

何気に愚痴も混ぜていたジュンイチに軽く一蹴(?)するスバルだが尚同意を求めるのか「酒飲み過ぎただけでよおお」話し続ける。はつきり言って高校生年代の男子女子に愚痴る大人も如何なものだ  
が…。

「そついえばお前ら家族とか大丈夫なのか？家出とかで騒がれたりとか」

「あたしは……親とかにはもうお別れはしたから」

「…僕はちよつとした施設で育ったから父や母の顔は…」

「あ、…悪いなそりゃ」

「…あたしも知らなかった…あ、西黄さんは？お母さんとかにお世話になってそうだし」

「遠回しにマザコン呼ばわりされてるような気がすんだけど…」

二言目に発された言葉に若干凹みながらも…これも返答することにした。

「 知らねえんだよな」

「 え…知らない?」

「 ああ、オレ子供の頃の記憶とか親がどんな奴なのか全然覚えてねえんだ。今も自分はライダーだって事とバイトしてる事ぐらいしか記憶にねえ」

だが…その発言は事を巻き起こす引き金へと変わったのだった。

S h o o t - B a r r e t

> F i r e <

> B a r r e t <

「ッ!!伏せるッ!」

「「うわっ!?!」」

突如発された音声にいち早く気づいたのはジュンイチだった。  
オレンジの光弾と炎を纏った弾がスバル達を捕えようとするが即座に反応したジュンイチが二人の体を抱き寄せ盾となった。

「…っ…痛っ！」

「ええ！？何なに？」

「に、西黄さん！！大丈夫ですか！？」

「スバル、アスム大丈夫ッ！？」

銃弾が撃たれた方向：そこにはティーン、ラルクとなったティアナとナツミが自身の武器を構え立ち塞がっていたのだ。

〈  
〈  
〉

同時刻…『A B R O D ？？？』

「フッフ…お疲れ様、君は十分役目を果たしたよ」

男が観ているのはスバル達が居るテント場を映したモニター。  
モニターを操作しジュンイチをアップに映した男は口元を引きつら  
せ満足したような笑みを溢した。

「  
トライアル…」

）  
）  
）

再びテント場

「その…御免あたしの所為でアンタ達まで撃つところだったわ」

「大丈夫だって！全然怪我とかしてないから！！」

「そうですよ、ジュンイチさんのお陰で…」

先程の銃弾を深く反省するティアナに対しアスムとスバルは肩を擦

ったりと慰めていく。

思えば1年前…あの日と同じ行動をしてしまった事が重なり傷口を抉られるように胸が痛かった。

「星河くん!! 気持ち分かるがこっちも手が足りないんだっ!! 頼む!!」

「チイツ! いきなり攻撃しといて今度は2対1かよ!? 何度も何度も…ふざけんなっ!!」

「…! ハイ!!」

「…バ海東がヘタレてんじゃあたしがやるしかないっ!!」

既にグレイブへ変身したジュンイチはRラウザーを槍状にして向かい立つラルクの攻撃を抑えながら叫ぶ。彼は自分への襲撃もそうだがそれ以前に関係の無い一般人まで巻き込んだことが一番許せないのだ。

> M i g h t y <

「喰らえっ!!」

「甘いんだよ!!」

> M i g h t y <

グレイブとラルクは同時にカードをラウザーにスキャンして、現れたゲートをラウザーで突き刺し、それぞれ構えを取る。

「ルアアアアア！！」

「ハアアアツ！」

光斬として放つ『グラビティスラッシュ』と紅色の矢として放つ『レイバレット』が激突し、あまりの衝撃に両者とも吹き飛ばされる。隙有りと察したティーンはクロスファイアーシュートを発動しようと試みるが、その手はスバルに止められアスムも彼女を説得しようと叫ぶ。

「待つてティア！！何で西黄さんに攻撃するの！？同じライダーでしょ！？」

「ちょ何すんのよスバル！？」

「ティアナさん！あの人は僕達を助けてくれましたし…あの時だつて大勢の人たちを守ろうとしてたんですよ！？」

「アンタ達！！あいつは他のライダーとは違うのよ！表向きじゃそうみたいけどあいつは…」

ティーンが次の言葉を発しようとした途端グレイブは頭を押さえ苦しそうに悲鳴を上げる。

「うっ……グウッ!? あ、アアッ!」

「？」

「これは……まさか！」

「ア……グッ！うそ……だろ、こん……な……きに、限って！？あ、アア  
ッ！」

「ア、アアア  
“ア  
“ア  
“ア  
“ア  
“ア  
“ア  
“ア  
“ア  
ア

「!!!!!!」

この場に響き渡るような咆哮を上げ草木が震える。更にグレイブのバツクルが外れ変身が解かれて元のジュンイチの姿と思つたがそれは大きな間違ひだつた。ジュンイチの姿は黒く染められ顔部分と腕には黄色い鱗のようなコオロギを模した人間とは程遠い異形の姿へと変わった。アスムとスバルは目を見開いていたが、ティーンは至つて冷静であり念の為ラルクに確認を取る。

「何ですか…あれ…!？」

「…あれがですか？」

「そうだ。あれこそが…」

『ウゝ、ウウゝアゝア…!!』

「ジョーカーだ」

T A R G E T ・ 1 1

晒されるグレイバー（後書き）

この前の活動報告で『おめでとうメッセージ』をくれた方々

ネロアンジェロ様

ベルト様

天様

ガタツク様

翼様

本当にありがとうございます！！m――）（m

これからも戸谷さんの芸能活動を応援していきます！

T A R G E T ・ 1 2

M I S S I N G ・ A C E o r J O K E R

(前書き)

皆様にアンケートです!!

ディエンドが使用するアタックライドは今の所3種類ですが  
もしよろしければ感想に書き加えてくれればありがたいです!!

今回の話にもニューカードが登場しますよ!

## TARGET 12

## MISSING • A CEOR JOKER

「グオオオオア ア アアアア！！！！！」

グレイブ……否ジョーカーの咆哮はその場に響き渡る。

草木は揺れ動き風向きは暴風の如く荒々しくなり、存在自体が状況を変えてしまうようだった。

やがて治まり大人しくなつたかと思えば……腕のかぎ爪を尖らせラルクへと標準を定めた。

「クツ……やらせるかッ!!」

> R a p i d <

# >Fire<

「ヴヴヴヴウウ……!!」

「先手はやらん」と言わんばかりにラウザーにカードを二枚スキャンする。

発動したのはダイアの4『ペッカーピッド』とダイア6『フライファイア』の混合技。

射撃の加速度が上がり炎を纏った弾はジョーカーに体中に命中し煙が漂うが……無傷どころかラルクに跳躍し接近した途端爪と蹴

りによる連携を受けてしまう。

『 ヴヴオオオオオオオ！！！！！ 』

「アグウッ！！・・・ク、ソ並の攻撃では無理か・・・」

「に、西黄さん・・・」

「赤峰さん！援護します！！」

西黄の変貌に暗い表情をするスバルを余所にティーンは シュートバレット を発動するがこれもまた簡単になぎ払え、爪を太刀のよ  
うに更に鋭くさせティーンに喰らわせる。

「きゃああああっ！！」

「ティア！」

「・・・西黄さん一体どうしたんですか・・・」

アスムは目の前で吠える異形にジュンイチの面影を重ねる。

・・・だが自分が知っている 西黄ジュンイチ は凶暴なジョーカ  
ーに何一つ一体として重なる事は無く、ただ交差を繰り返す一方だ  
った。

「自分も戦うべきなのだろうか」一瞬そんな考えが浮かんだが、そ  
の手は音叉を取り出すことはなくただ両腰の所で無い物を握りしめ

ているだけだった。

尚まだ立とうとするラルクはホルダーからカードを取り出すが目にも止まらぬ速さで接近し殴りつけられ、同時にホルダーからカードが零れ落ちてしまう。

『グオオオアアアッ！！！！』

「うああああー！！」

「このっ・・・！ フェイクシルエツト」

F a k e - S i l h o u e t t e

・・・直接攻撃が不利なら特殊技で惑わす・・・  
音声が發されるとティーンと同じ姿を模した人体が五体現れる。

しかしそれはあくまで自身の像を数体発生させただけ。

決して分身の術のように高速移動しているわけでは無く攻防は実体しか受ける事はないが相手の神経を鈍らす程度ならそれで十分だ。  
幻術魔法『フェイクシルエツト』により現れたティーン三体は四方を時計状に囲みクロスミラージュを突きたてる。

へその神経や意識を持っているのかどうかは不安だけど・・・ここから戦況だつて逆転できるはず

『・・・グアオアアアア！！』

「！？駄目だ！」

「え……」

ジョーカーが空中に手をかざすとその手から金色の雷撃が三体のティーンに降り注がれる。

上空に居た二体もまた電気を帯びた爪を振り上げられ五体全員消滅された。

「そんな!？」

「「<sup>ティア</sup>星河君!!」

「!!……クロスファイ……」

『アオオ`オ`オオオオオ!!!』

「あ……あああ！」

本体のティーンはクロスミラージュを構えるがその隙を突かれ、かぎ爪を交差するように身体を裂かれてしまう。ラルクや幻影の時よりも高いダメージを負い変身が解かれてしまった。

「あ……ぐう……!はあ、はああ……」

「ティアア!!」

「！凄い出血です・・・！！」

アスムが呟く通りティアナの身体は腕の腿から腹部分までバツの字を書くように服が割かれ赤い液体が止めどなく零れ落ちていく。当の本人も眉が歪み息も絶え絶えだった。まともに立つ事も出来ないだろう。

アスムはすぐさまティアナを担ぎ治療を行おうとテントまで送ろうとするがその手はラルクに止められる。

「待ってくれ！彼女は一度病院に」

『ウオア、ア、アアア！！』

「・・・というわけにもいかなそうだな！！」

「ここからだとかかなり遠いし呼ぶ暇もありません！！救急車だつて一般人を巻きこむわけにはいきませんし・・・！！」

「先程の様に傷を負わされる」と言おうとしたが再び飛びかかるジョーカーに目先を向ける。

一時ティアナをスバルに託し、両腕を振り下ろされる前にその腕を掴んだ。

「うおおお！！」

『グウウウツ!?!』

「な!?!ライダーでもないのに素手で止めたのか!?!?しかも子供が!」

「それがアスム君ですから!」

「・・・っ・・・西黄さん聞こえますか」

『ウ、ウヴァア!』

「お願いします・・・聞こえていて意識があるのなら僕の話聞いてください」

「も、元に戻ってほしいんです・・・さっきの姿を見た時は貴方もこの世界の怪物と同じだったんだって思っちゃいましたけど・・・スーパーに居た人達を助けてくれた時は本気で守り戦おうとする姿勢でした」

「待ってくれ!!そいつは人間ではなく・・・」

「人間でも怪物でもいいじゃないですか・・・!!この人が 西黄さん というのは確かなんです!!守るために戦っていたのは違いないんです!!その姿が今の西黄さんを苦しめているなら今度は僕

が貴方を……」

その小さな体型ながらも筋力が上がった腕は                      ジョーカーさ  
え凌駕するのだった。

「守りますッ！！！」

『グアアアアアアオオ！！？！』

「おおー！！」

「へ投げ飛ばした！？」

後方へ投げ飛ばされたジョーカーは思い切り地面に叩きつけられる。  
僅かな意識でその光景を見たティアナとラルクは自分達二人で歯が  
立たない相手を『子供一人』がいとも簡単に投げ飛ばしてしまった  
事に口をあんぐりとさせていた。スバルの場合は感嘆だったが。  
しかしそれも束の間起き上がったジョーカーはラルクが落とした力  
ードを回収していたのだ。

『グ、ウウウ……！！』

「……ハッ！僕のカードが！？」

「アレっ！？まだ立てたの！！」

「・・・アス、ム・・・あんたがトドメ刺せば」

「いや駄目ですよ!!」

やがて回収し終えたジョーカーは何処へ向かうか瞬時に木々を渡りながらその場を離れた。

舌打ちをしながらラルクは変身を解きナツミの姿に戻る。

「クッ・・・!迂闊だった!!」

「そ、・・・っ・・・ですねゴホッ!エホッ!」

「あ、大丈夫ティア?」

「重傷ですね・・・傷薬と包帯があるのでそれで補いましょう。二人も手伝ってください」

「うん」

「いや、ジョーカーは去ったんだ。救急車を呼ぶから待っていてくれ」

ナツミはポケットから携帯電話を取り出しこの町の病院の番号を押そうとするが「待ってください」の声に気づきアスム達を見る。

「その救急車はここからどのくらい時間が掛かりますか?」

「町からかなり離れているからざっと・・・30分程か」

「じゃあここでやります。そんなに待たせたら出血多量で間に合いませんしかえって悪化してしまいますよ。最悪の場合命にも・・・」

「でもアスム君って・・・」

「医療技術は？」

「何分山奥で育った身ですからこういった事は慣れっことです。害の無い薬草を用いて病院の方々よりも手早くできる・・・ハズです」

「何、が『ハズ』よお・・・」

「あ、ダメダメ。喋っちゃだめだよ」

「・・・それは信じていいのか？君。」

「信じてください」

ナツミはアスムの瞳を真つすぐ見つめる。

その目は一切の迷いが無く、信じてくださいという思いが口に出さずともひしひしと伝わって来る。

やがて見つめている方も決意したのかアスムと同等の瞳で見つめ返した。

「・・・分かった」

「え！」

「本当ですか!!」

「だけどこの娘の命の責任を君は背負う事になるが」

「大丈夫です!!」

その後アスム達はテント場へ移動しアスムの指示もありながら傷の手当てをしていくのだった。

しかし……何故奴は僕のカードを盗んだ？今までそういった素振りは一切無かったのに……

〃  
〃  
〃

『A B R O D オペレート園』 P M 0 6 : 4 7

その土地は名の通り公園と言っているだろう。

だが 普通 では無い。機械があちこちに設置されておりピコピコといった音が響き渡っている。

モニターに映し出されているのは先程のジョーカーの姿。

そのジョーカーは今足を引きずるように歩きながらその場に佇んでいるのだ。

その場にただ一人居た男……『尾張<sup>おわり</sup>ヒロシ』はジョーカーに笑顔で迎える。

「やあやあお帰り。そしてお勤めご苦労。更に一言……ラウズカードは回収したな？」

三言目で口調をガラリと変わるヒロシは右手をジョーカーに差し伸べる。

当のジョーカーテント場に居た時とは打って変わって無言となる。

そしてそのままラルクの所持していたダイアのカテゴリー2・4・

6・7・3のカードを受け渡した。

ヒロシの手にはランスが所持しているクラブのカテゴリー6・3・

4・5・2のカードがあり、合わせて10枚のカードが手持ちにある。

「私の計画には程遠いが……十分足りる。これでスピードとハート<sup>プロジェクト</sup>のカテゴリーを取り入れれば完璧<sup>パーフェクト</sup>!!!超越生命体の実現が遂に  
来た!!!!」

ヒロシは狂気に満ちた笑顔で高笑いする。

彼にとってはこの世で一番期待して、夢にまで見た事らしい。

やがて彼の笑い声が止むとその表情のままジョーカーに目を向け、一言告げる。

「これで君ともおさらばになる・・・消えてくれ」

そして手に持っていた手に持っているスイッチを押したのだ。

『ウ、ゴアアアアあああああああ！！』

押された瞬間ジョーカーは胸を抑える様にうずめきその場に倒れる。床をゴロゴロと転がりながら黒と黄色の異形は人間・・・西黄ジュンイチの姿へと変貌する。  
ホルダーからハートとスペードのカテゴリー全てのラウズカードを取り出しながらヒロシはほくそ笑んだ。

「ククク・・・本当にありがとう。影武者 にとっては実に良い仕事ぶりだった」

「ハア・・・ハア・・・何ッ！？・・・だれ、だお前？・・・ハア」

「ん？今まで知らなかったのかい？・・・私は君の父親だよ」

「なん、だとお！？エホッ！！」

「おっと勘違いしないでくれよ。あくまで産みの親なんだよ私は」

「もっと正しく言うのなら……『開発した』じゃないのかな？」

ヒロシでもジュンイチでも無い先程の声が響き渡る。

そしてもう一つ足音が。

声が出た方向を向くと人影がゆっくりとその姿を露わにする。

革製のキャップをツバで隠された眼で面白げに見つめてくる男……

・

海東大樹だ。

「ご機嫌麗しゅう？博士」

「おやおや……とつくにこの世界は出て行ったと思いましたよ。海東君」

「あの声……どこかで聞いたことがあるような……それに『かいとう』って」

軽く挨拶をする海東に少し驚くヒロシだがすぐに態度を改める。

その一方でジュンイチは海東の声帯、名前に聞き覚えがあるが思い出せない。

記憶の奥底を探っていきやがてそこへ辿り着いた。

「おま、え、あの時のライダーで・・・アスム達の」

「?・・・少年君達を知っているのかい？」

「ああ。・・・ん？」

ちよつと待て

「なあ」

「今度はなんだい」

「アスムが尊敬している奴で・・・『師匠』って呼ぶほど凄い奴  
つて・・・」

「僕だけど？」

「ハアアアアア!!?!」

ジョーカー体よりも更に大きい咆哮が青年・・・ジュンイチの口から発される。

先程の痛みは何処へと言った感じで起き上がり海東に詰め寄った。

「信じないオレ信じねえぞ！！あの真つすぐなガキがこんな薄汚れた大人に敬意を持つてるなんてオレア断じて信じねえ！！！」

「これは事実だ受け止めたまえ。それと顔を近付けるのは辞めて欲しい」

「事実？ジジツ！？ウソダソンナコト！！！」

「・・・っ・・・だからねえ」

激しく口論（ジュンイチが大半を占めている）をする一方ヒロシが口を開く。

「それよりも海東君？どうして君が此処へ？」

「決まっているだろう・・・お宝を戴きにきたのさ」

「お宝？・・・そんな貴重な物品は管理してる覚えがない」

「あるさ ココ にね」

「だから一体何の・・・！！？」

海東が手に持つ一枚のラウズカードを見た途端顔を引きつらせた。思考が困惑する中頭に血管を浮かべながら口を動かす。

「・・・何故お前が『V i g h t y』のカードを!？」

「全てのラウズカードを集合させ融合することで人類とアンデッドを超越した存在へ進化させる代物。どんな物にも勝るこの世界の最高のお宝・・・これは僕にこそ相応しい 貴方には勿体無さ過ぎるんだよ」

「違う! 違う違う!! それは私だけの物だ!!!」

激昂するヒロシだが海東には全く通じない。

今も余裕の表情で口笛を吹いているのだから。

だがジュンイチがどうしても気に留める事があった。

「それよりも・・・オレが開発されたってどういう事だよ」

「・・・ハハハ!! それはだなあ」

「僕が説明してあげよう」

嘲笑いながら説明しようとするヒロシの代理としてポケットに隠していた資料を手に海東が告げる。

「2年前、尾張ヒロシとはあるバトルファイトの様子を偶然発見した。その対戦表は・・・『ジョーカーVsヒューマンアンデッド』」

「ジョーカー・・・オレのことか？」

「違う。君の生誕はまだ先の話だ。・・・その結果両者引き分け。お互い傷だらけの状態で封印された。」

「それを目の辺りにした尾張ヒロシは辛うじて意識は損失してるにも関わらず肉体を残していたジョーカーを輸送し、保管する形になった。・・・己の望みは君に言わせてあげるよ」

海東はココで話を止めヒロシに振る。

「・・・私の望みは 王 となること。如何なる類でも抵抗できない！如何なる兵器でも太刀打ち出来ない！！全てが私の存在に膝ま付く王となることだ！！・・・これでいいのかい」

「上出来さ。しかしそんな研究を続けていれば何れライダー達にも感づかれる恐れがある」

「そこで思いついたのさ・・・上手く目を欺ける為に危ない標準を作ってやろうってね」

「その『標準』ってのは・・・？」

「君だよ……トリアル・ジョーカー」

「……！？トリアル？」

「『トリアルジョーカー』。ジョーカーの身体から血液を輸血し、それを元に肉体を作り出すことで新たなジョーカーがこの世に現れた。それが君。ライダー達はその脅威ばかり目を向けて尾張ヒロシには絶好の隙が生まれる。言わば君は チャンス 影武者、おかげで尾張ヒロシは無事完成したわけさ」

……自分は影武者

その事実を叩きつけられたジュンイチはどう反応していいのか訳が分からなくなる。

自分は異常な存在だということは薄々気づいていた。しかしそこまで深い訳があるなど想定外だったのだ。

「ククク……長い演説をありがとう、ジョーカーはもう用済み……  
……そしてその完成した作品がコレだ」

ヒロシが手に取っているのはジョーカーのバックルと同型の形をした紫色のベルト。

それを腰に装着してカードを1枚スキャンする。

「見るがいい……私の生涯最高の代物『タロット』を……！」

# Tarot

感情の無い音声が発されるとヒロシの姿はジョーカーと瓜二つとなる。

だがその外見はコオロギというより死神に近く身体の至る部分が禍々しくなっている。

その一方で体色も黒と緑といったブラックなイメージより灰色と虹色といったバラバラなイメージがありげだった。これこそがタロツトなのだろうか。

『!?!?どういつゴトダアアアアアアアアアア!!?!?』

『?!?!?』

「な、なんだ!？」

「あらあら・・・」

突如ジュンイチの様に苦しみだした途端地面が盛り上がった。

その衝撃は研究所さえも崩壊するレベルで瓦礫が崩れる一方だった。海東は手に持っているディエンドライバーでディエンドに変身し、1枚カードを取り出す。

【KAMEN - RIDER: DI - END!】

「影武者君！！僕に掴まれ！！」

「悪い……何だ影武者君って!？」

【ATTACK-RIDE:WARP!】

ツツコミながらも肩を掴むジュンイチを確認した後カードを装身する。

彼らの周りがシアン色の球状に包まれると光が止むと同時に二人も消えた。

コレが瞬間移動技『ディエンドワープ』である。

）  
）  
）

『ABROD外』

「ぜえ……ぜえ……!何で俺が」

一方病室の崩壊にいち早く気づいたシンは全速力で脱出していたのだった。

）  
）  
）

『ABROD外 草原』

「ふいゝ・・・何とか脱出成功か」

「みた・・・い・・・だね」

「お、オイ！？何でそんなに疲れてんだよ！」

広い草原へ移動したディエンドとジュンイチ。  
ジュンイチは溜め息をつきながらその場へ居座るがディエンドは違った。

腰を落としながら息が絶えている。ワープの反動なのかなりの体力を消費したようだった。

「アイツ・・・何で急に暴走したんだろうな」

「コレのせいかもね」

「あ？コレって・・・それは！？」

ジュンイチはディエンドが手に持っているものを見て驚愕する。  
その手にはグレイブが所持していたスペードのカテゴリーが全種類揃っているのだ。

「尾張ヒロシから取りだした物だ。全種類が揃って無い事に気づかず変身したから暴走を起こしたんだろう。まあ奪わなくても現状は変わらないだろうけどね」

「何時やっただよ……」

ディエンドの奪還に冷や汗をかきながらまたもやツッコむジュンイチ。

だがそれも束の間、空が大きく光り始めたと思えば自分達の目の前にタロットが降り立っていたのだ。

着地したそこは大きくクレーターが作られていて呼吸の音さえ耳に届くのだ。

『オゝノレエエエゝエゝエエ……』

「辛うじて意識は残っているみたいだね……」

「まあとりあえず……街にまであんなのが行っただんじゃ堪んねえわな」

あそこまで自我が損失しかけでは助ける手は無いだろう……。  
人を殺めることは気が進まなかったがやるしかない。

ジュンイチはバックルに『チェンジケルベロス』のカードを装着して腰に翳し、変身の動作を取る。

「・・・変身！」

OPEN - UP

黄色のオリハルコンエレメントを通過してジュンイチはグレイブへと変身を遂げる。

その途端ディエンドのカードホルダーからカードが2枚手元へ出現して絵柄が映し出される。

「お宝ゲット・・・か」

「カイト、オオオオオ！！」

「何だい？遺言なら聞かないけど」

「カベンライダアアバヤメ、ダノデハナイ、ノガアアア！！！」

タロットの言葉を通訳するなら『海東。仮面ライダーは辞めたのではないのか』だ。

ディエンドは面倒くさいのか溜め息混じりに答える事にした。

「そつえばまだ答えてなかったね・・・簡単な話さ、忘れればいい」

「辛い過去があるならそんな物を背負う必要は無い。それは時に自分を揺らす物にも惑わす事だってあるんだ。ならあっさり切り捨ててやるよ」

「そうでもしなきゃお宝は手に入らないからね」

言い終えたディエンドはDドライバーで発砲する。  
更に追撃としてグレイブも『ボアタックル』を発動してタロットにダメージを与えた。

『コザカシイイイ！！！』

「ッ！熱ッ！！」

「つくファイアか！」

タロットは身体に取り組んだディアの6『フライファイア』を発動しその場を攪乱する。

もうひとつハートの2『ドラゴンフライフロート』を発動させ空中を飛行した。

グレイブは歯を食い縛りながら悪態をつくが、ディエンドは余裕の表情でカードを1枚取り出す。

「あの野郎お・・・っ！かあれオレが封印したカードだぞ！？」

「気にすることは無い……さて痛みは一瞬だ」

【FINAL・FORM・RIDE…G・G・G・GLAVE?】

「……は？何のは、なしい!!?」

ディエンドの銃口から放たれる銃弾を受けたグレイブは大きく変化し、コオロギの様な異形 ファイナルフォームライド ジョーカーの姿へFFRする。しかしその一方でジョーカー？はかなり激怒している。

『いやお前何すんだアアアアア!!こつちだつて何かとジョーカーの力押さえてきたんだぞ!!人もう一回化け物にしてえのかテメエエエ!!』

「煩いな……よく見なよ姿が違うだろう?」

『え?……あ、そういえば何か白いし赤い?』

ディエンドが申してるように只ジョーカーになったわけではない。グレイブのジョーカーの黒い体は透き通るような純白に、黄色かった部分は血液のような赤色になる等体色に大きな変化を齎していた。これこそがグレイブのFFR形態「グレイブアルビノジョーカー」である。

「君の新しい力だ。行くよ?」

『オレの……ああ!!』

【FINAL - ATTACK - RIDE : G・G・G・GLAVE  
?】

『ホザケエエエエ!!』

激しく咆哮するタロットに対し二人は怯むことは無かった。

Gアルビノジョーカーは大鎌を取り出しその刀身に金色のエネルギーを集束させる。

鎌を振り下ろす事で衝撃波は発生されそれはタロットの身体に突き刺さる。

『グアアオオ!?!』

『決めるお!!海東!!!!』

『言われるまでもないさ!!』

刺さった衝撃波はブーメランのように回転しながら跳躍して、ディエンドが持つDドライバーの銃口に集束されエネルギー弾を作成していく。シアンと金色が混合したエネルギー弾の標準をタロットに向ける。

そして渾身の力を込めて引き金を引いた。

「ゾ、ゾンナァアアアアアアアア  
ア アアアアア！……！！！」

『ディエンドグラビティ』を喰らったタロットは悲鳴を上げながら爆散し消滅したのだった。

$$\begin{array}{c} \mathfrak{S} \\ \mathfrak{S} \\ \mathfrak{S} \end{array}$$

「行くのか？」

「ああ。この世界のお宝は手に入れたしもう用はないよ」

ジュンイチはバイクに跨りマンションに戻る。う事にする。

自分がトリアルジョーカーだということはさほど気にしては無いと語っている。

自分が異常だと自覚していると付け足しているが一瞬浮かない表情になっていた・・・。

「それにしてもなあ……そんな紙切れが宝なのかよ？」

「価値が分かってないね。外見だけで解決してはいけない、それは人も同じ事だよ」

「あつそ。・・・あ、そうそうアスムと蒼風に伝えてくれねえか？  
『他愛ないけど久しぶりに話ができて楽しかった』って」

「どうだか？」

「伝えるよ？」

こうして振り返ることなく別れを告げる二人であった。

）  
）  
）

『テント場』 PM10:25

「すう・・・すう・・・」

アスム達の治療により無事回復したティアナは寝息を立てて眠って

いた。

傍に居たスバルもティアナ同様深い眠りにつき鼻提灯がプカプカ動いている。

水を入れ替えに行ったアスムは今日1日の疲れなのか地面に座り一息ついていたのである。

目が虚ろになっていくうち自身が尊敬している人物の声が耳に届いた。

「あ・・・師匠？」

「ただいま」

「おかえりなさい・・・」

目を擦りながら起き上がるアスム。

しかし海東は彼の身体に毛布を被せた。

「え・・・？」

「かなり疲労していたんだろう？今日はもう休むんだ。食事ならこつちで食べるから」

「はい・・・すみません、おやすみなさい・・・」

そう言い残し目を瞑って夢の中へと誘われた。

・・・影武者君の伝言は明日伝えるか

二枚の宝を手にながら海東大樹の日々は幕を閉じるのである。

）  
）  
）

『??.?』

「……これでいい実験になったかしら」

スーパーマーケットで怪人達を召喚したライダーは海東達の居るテント場を見つめながら呟く。  
変身を解くと青色の髪を風になびかせながら、ふと空を見つめる。  
無数に輝く星は美しい星座を描いているが彼女はただ無表情だった。  
……やがて見つめている内何を思ったのか彼女にとって最も憎い存在の姿が脳裏に写る。

「絶対に壊してやる……大ショッカー……デイクイド……  
!」

憎き相手の名を呟きながら発生させたオーロラを潜り、【グレイブ

の世界】を後にするのだった。

）  
）  
）

一方ジュンイチは夜道を走らせていた。

何分遅く掛かってしまったのでライトの点灯とカーブに気をつけながら走らせていく。

「ん？んだありゃ」

ジュンイチの目の前に灰色の壁が現れるがそれが何なのか理解するのは数分も掛からなかった。

すぐさま思いついたわけではない。簡単に言えば 間に合わなかった

その壁はぶつかることなくジュンイチを飲み込む。

西黄ジュンイチはこの世界から颯爽と姿を消したのである。

）  
）  
）

「委員長駄目です！三本とも全て・・・」

「三本とも・・・何？」

「「ヒイツ！？」」

「そ、それが・・・」

制服を着た男女が委員長と呼ばれる者に報告するが逆に向こうから質問させられる。

言葉に詰まった男子は俯きながらブツブツと呟いているが誰にも聞こえる事は無かった。

いい加減痺れを切らした委員長は男子の胸倉を掴む。

「早く喋ってくれないかな・・・？君達が僕に言いたいことがあるんだろう。・・・喋ってくれなきゃ困るんだけどさ？」

「さ、三本とも盗まりました！！帝王のベルトは何処にもありません！盗まれたんです！」

「・・・・・・・・」

委員長は酷く怯えている男子の胸倉を離し、解放する。

男子は咳き込み何人かが彼に駆けつけていたが委員長は全く興味が

無いどころか罵倒していた。

「シュウジ君大丈夫!？」

「うん・・・ありがとう」

「・・・役に立たないな」

「だから嫌なんだよな・・・僕を好きにならない奴は」

T A R G E T ・ 1 2

M I S S I N G ・ A C E o r J O K E R

（後書き）

今回はエターナル様の作品とコラボする事になりました！！  
他作品のキャラを動かすのは内心不安がありますが頑張つて執筆していきます！

ご期待してください・・・・・・と言いたいところですが

来週定期テストor z

更新は再来週という形になります

ご期待くださいませ

三つ目の世界ではエターナル様のキャラとコラボすることになりました！

本編は次週投稿します。

その前に一息・・・ご覧下さいませm(???)m

テスト週間恐ろしす・・・（汗）

Third Stage プロローグ ・とある学園の黒龍騎士・

これは・・・ある人物が発した言葉の一部・・・

”合わせ鏡が無限の世界を作るように・・・現実における運命も一つではない

この言葉に 一つだけ 追語させて頂きたい

・その運命は・・・空を超え、天を超え、星を超え、誰も知らぬ未知の領域すら超え・・・・・・・・

・個々の鏡に巡りあい、与えられし運命をその背に負いながら・・・

・誘<sup>いざな</sup>われるだろう・・・

「．．．く．．き．．くん」

「．．ん．．」

「．．ろ．．さき．．ん」

「．．？．．誰だ．．俺を呼んでるのは？」

「『呼んでいるのは？』じゃなくて起きろい！！」

耳元に響いた声で少年の目は覚める。

虚ろな意識の中、目を擦りながら起き上がると先程の発信源が目の前に居る女性だということに気づいた。

見た感じでは少年よりも年が離れた二十代前半の女性である。

「あれ．．．ここどこだ？」

「もっつ！．．何時まで寝惚けてるの！ほらさっさと目え覚ます！」

「へブシ!？」

その女性から右頬に平手打ちを喰らい再びその場に倒れこむ。  
おかげで脳のスイッチがONに切り替わったがその代償は大きく、  
頬を摩りながら睨みかえした。

「いきなり何すんですか!」

「今度はうつさいわね!」ってかそれを言うなら、これからお世話  
になる公共の場で居眠りこくなんていい度胸じゃない!余裕で進学  
ってことなの」

「はい?寝てた?.....ッ!.....」

…思い出した

…あのシザースとかいったライダーと戦って、何とか倒した?..  
かな

…でその後初春はつはると脱出しようとして、その後が...なんだっけ

「聞いてんの!? 黒崎 くん!!!」

「ブハッ!?!な、なんで今度は左!?!」

「また明後日の方向、向こうとしたから!ほらっあんた以外の子全  
員集まってるんだから急いだ急いだ!」

「なんつ・・・痛う・・・」

女性に手を掴まれ強引に起こされ引つ張られる始末。

何がなんやら理解できない黒崎は軽く絶望しながら溜息を吐くが

・・・改めて見た女性の素顔に目玉を見開くことになる。

肩まで下ろした茶色の髪に身長とは裏腹に幼げな顔立ち。

：自分の記憶の片隅でそれに一致する人物がいる。

着ている服はそれとは異なりベージュのスーツ服を着こなしているがあの人物に完璧といって良いほど瓜二つなのだ。

「美琴？」

電撃女こと 御坂美琴 に。

「美琴お前はどこに、ってか何でスーツ着て!？」

「はあ？教師に対してタメ口なあ、さっきと<sup>い</sup>いい良い度胸してんじやないの」

「教師・・・ってお前まだ中学だろ」

「ブツチン」

数十分後：

【流星学園 運動場】

「ハイハイ 無事全員揃ったことで校内研修を行いたいと思いま  
す！後ろのクソガキ君はちゃんと先生の言うこと聞くように！」

「「はい」」

「・・・あい」

そこには黒崎と同じ制服を着た男女が集まっていた。

ざっと数えると二十人ぐらい居る。

美琴？は猫なで声で生徒たちの前に立ち点呼を取るが一方の黒崎は  
対象的。

頬の次に腹に刻まれた傷を撫でながら苦しげに俯いている。

その様子に気づいたのか口元を異様に引きつらせながら御坂？は黒  
崎に指差す。

「んー？黒崎君。クソガキ 君の声は全っ然あたしの耳に届かないなあ？」

「いや、なんで・・・てか？黒崎 と書いて？クソガキ と読  
まないでください！？」

「そう言う君も？弦寺マリげんじ と書いて？美琴 なんてわけの分から  
んナンバーで呼ぶのは辞めようねー」

「ナンバーじゃな．．!!」

嘲笑いながらマリの発言に抗議したい黒崎だが今になっても傷が止まない。

…内心自分と同年代の不幸少年の気持が分からなくもない様な気もする

更に彼らの漫才にクスクス、笑う生徒も出現する始末である。

そんな時こそ叫ぼう．．『不幸d

「言わねーよ!?!」

しかしそんなほのぼのな雰囲気は突如聞こえた悲鳴よって掻き消された。

「何なんだよ皆どいつもこいつも．．!!」

「「「きゃあああ!!」」」

「ヒイ!?じよ、ジョーク!ジョークだろうが!!」

ここから数メートル先で一人の男子生徒にそこにいた生徒が顔を引

きつらせ立ち退いていく。

その男子生徒が顔に刻印のような物が浮かび上がるとその体はアルマジロのような骨格に灰色の体をした

『アルマジロオルフェノク』の姿へと変わる。

「何っ!？」

「何だアレ．．．なんで人がミラーモンスターになるんだ!？」

「皆っ研修は中止!!ここは危ないから校門から逃げて!!」

「えゝ？」

「ちえ、折角におみあげになると思ったのに．．．」

携帯電話を取り出し写真を撮ろうとする生徒達をマリが逃げる様要求して、

渋々ながらも校舎から出ようとするが…

どういうわけか黒崎だけはそこから離れなかった。

それ所か何かを探すようにキョロキョロと辺りを見回している。

逃げ遅れたと思い痺れを切らしながらマリは彼に駆けつける。

「何やってんの!!あんたもさっさと逃げて!!」

「あ、先生!この辺りに 鏡 ってありませんか？」

「はあ!??何訳分かんない事言ってるのよ!状況分かってんの!??」

マリは最初会った時よりも激しく努号する。  
それもそうだろう。

先輩や同級生、その場に居る者殆どが逃げるほど恐れられているのに付いて逃げようとしなないなどどうかしてる。そんな余裕など無いのだ。

「大丈夫ですよ、俺こういう状況は慣れっ子なんです。．．あ、鏡持ってるじゃないですか！！」

「ちょ、あたしの手鏡じゃい！？」

マリのポケットからはみ出している化粧用の手鏡を抜き取り、右手で持ちながら自分が映し出されるように前に構える。

「二回目になるけど．．先生、これから起こることは誰にも言わないでくださいね」

「．．．？どどういう意味よ？？」

黒崎は左手に握りしめた漆黒に龍の紋章が刻まれたカードデッキを鏡に突き出す。

すると．．．どこから来たのか銀色のベルトが腰に装着された。

「変身っ!!」

デッキをベルトにセットすると黒い鏡像が黒崎の体に重なり、その姿を変えた。

全身が闇を表すかの如く漆黒の装甲に龍をモチーフにされている鉄仮面。

？黒崎シンジ　こと『仮面ライダーリュウガ』がこの地に降り立ったのだった。

### 【体育館裏】

「僕も見ちゃったけど・・・終わったら事情聴取だな・・・」

紫に発光する瞳は静かに一人と一体を眺めていた・・・

シンジ君のキャラが書けているか心配すぎるー山(トト山

真司（not城戸）「何、俺チンクル!？」

シンジ「うるさい!」

アスム（リュウガが龍騎に言った・・・!）

ティアナ「・・・ていうか男鹿のそれは元ネタ分かんの」

海東「今回の世界ではメイプル畑さんのキャラともコラボするよ」

士「男鹿は正直、シンジ補佐でしかない今日この頃」

スバル「まあまあ（棒）」

【グレイブの世界】を出てから五日後・・・

【光写真館】

PM02:35

「どうですか？」

「おお？似合ってる似合ってる！」

「きゃー！！可愛いですよ二人共！写真撮りましょう写真！！！」

「・・・正直微妙過ぎな気がするんだけど」

期待に胸を膨らませるスバルとは対照的に、着ている服を疑うように顔を歪めるのはティアナ。

彼女達は開封時かのように新鮮味がある制服を着用している。

二人が着ているのはベージュと白を基調とした制服に胸内に真っ赤なりボン、灰色に黒い縞模様のラインが走ったスカートで今時の女子学生の姿である。

門矢士率いる写真館組の内、夏海とユウスケは二人の制服姿を高く

称賛していた。

その中で一番興奮しているのか夏海は写真館で扱う撮影用のカメラを取りに行く。

「ほら、二人共並んでください！早く早く！」

「・・・いや、本当にいいですから」

「えー？何でなの、写真くらいいいじゃん」

「そうそう、十分可愛いって！凄く似合ってるよ！！」

「・・・お前らな・・・女生徒の制服姿にそこまで興奮するの  
もどうかと思うぞ。娘や妹でもないのに」

ただ一人椅子に座りながら栄次郎作のクッキーを黙々と食べていた  
士は呆れたように口を開く。

向かい合わせで座る海東も同じく、夏美達よりテンションが高いわ  
けでもなく、いつものドライ&クールな佇まいでいた。

「何だよお前ら、スバルちゃん達にとっては初入学なんだぞ。もっ  
と喜べよ！」

「そうですよ！大樹さんもよく見てくださいよ！！ほらほら！！」

「ちょ、ちよつと・・・」

「・・・そうだね、中々似合ってるんじゃないかな」

「微妙だろ。大体の高校生と同じレベルだ、髪も違和感ありまくりだからな」

「髪は関係ないでしょうが」

良くも無く悪くも無さそうな土の言動にティアナはツッコむ。

：しかしあながち間違いでも無い。

二人の髪の色はブルーやオレンジといった如何にもカラフルな色彩の為、学校という公共施設で過ごし学ぶというのはかなりの痛み。その為美容院で散髪もかねて黒に染めているのだ。

スバルはさほど変わらないが、ティアナの方はリボンを外し長い髪を肩に下ろしてロングヘアに変えている。

そもそも何故海東達一同が此処写真館へ居るのか：

：入校する為の手続き、保護者が必要なのだ。

生憎、海東大樹の年齢では親族というのは誤魔化せるにしても 親 という肩書までは至らず、さしずめ 兄妹 と考えられるのか妥当だろう。

彼の知り合いの中で比較的年齢層が高い人物と言えば・・・此処（写真館）の主人、栄次郎ぐらいのものだ。

・・・という考えに至った海東は速急に話をつけに行き、栄次郎自身も孫が増えたようで構わなかったらしく難なく受け入れてくれた。

そして現在に至るのである。

スバルはピカピカの一年生の様に鏡に映った自分の制服姿を見ながら、満悦な笑みを溢している。

「あたしって学校行くの初めてなんだよなあ．．．どんな所なんだろう！」

「校則がそれなりに厳しい所なら勉強一筋でガリ勉共が集まってるかな」

「士の言い分はともかく．．．クラスの皆とワイワイ騒いで遊んだりしてたなあ」

「それには至るまで、まず他人との協調性や信頼感を保つことも大事だよね星河ちゃん？」

「．．．何であたしに向かって言うわけ？」

誰もが口々に自分達が思い描く学校の想像図を思い浮かべる中、海東とティアナの会話に反応した人物．．．

・ T Gクラブ もとい 退学クラブ 所属の夏美が告げる。

「そうですね？私はあくまで自分の気持ちや考えを尊重しながら過ごすべきだと思いますよ．．．でも何故かそれ聞いた人、皆後退りしてましたけど．．．今思うと何ででしょうね？あ、そうそう！唯一話が合ったクラブの皆とは楽しく過ごせましたし．．．楽しかったなあ」

懐かしげに微笑む夏海にスバルは「へー」と返す。

だがそれは彼女一人だけであり他四人は同意することが出来なかった。

寧ろ哀れみを向けるかのような真顔で沈黙するだけである。

尚、初めて聞いたティアナは「夏海さんって学生時代何があったの．．．？」と心底思う。

そし

て．．．誰にも聴かれぬよう遙か空を見上げキバーラもまた呟いた。

『．．．．．二人が充実した青春を送れますように』

\*\*\*\*\*

【流星学園 図書室】

P M 0 4 : 1 5

流星学園に入学してから四日経ち . . . .

今日も無事六時間の学習を終えたシンジは図書室に設置されている  
パソコンを操作している。

かれこれ十分間、画面を見つめる彼だが、やがて底を付いたかのよ  
うに座っている椅子に体重を預け溜め息を漏らす。

「あゝ . . . . 駄目だ。やっぱり学園都市なんて何処にも無<sup>ね</sup>えし . .  
ホントのホントに此処、異世界だし . . . 帰れんのかよ」

疲れ果てた目を擦りながら上を見上げる。

未だに 平行世界 というファンタジーを受け入れていないシンジは先程から、『学園都市』のワードで検索を掛けてみているが出てくるのは近所の小・中・高の学校の紹介文や都市の地図といった的が外れた物ばかりで、まさにがの字も出ない状態であった。

ふとシンジの元に所々跳ね、少々の黒が混ざった長い茶髪に制服が乱れた不良のような格好をしたシンジと同年代の青年が声をかける。

「．．．どうだ？ 学園都市 発見出来たんですか、ハンター？」

「出たな、アバレオーガ、出てけ」

「何処の戦隊だ！？つーか何でお前まで呼んでんだよっ！！」

「皆が知<sup>みな</sup>ってたんだよ。たった一日で伝説上の人物に成り上がった史上最悪最凶の不良だって。他校まで噂広がってんのお前だって知ってるだろ？」

「．．っ．．いやそれは自覚してんだけどよ、もうちょい親近感をだな．．．？」

自分に当てられる視線を気にせず青年は額に汗を浮かべながらシンジの隣にある椅子に座る。

．．そんな彼の意図を即座に見破ったシンジは椅子を持ち、右横にずれる。

明らかに彼から遠ざけているようだった。  
それどころか敵視している様にも見える。

「．．．オイ」

「不良と話すことなんて無い、ライダーだとしても親近感もあった  
もんじゃない」

「あれはホントに俺が悪かったって！謝んのこれで何回目だよ」

「やるだけ無駄、諦めろ」

何処までも距離を遠ざけるシンジに四回目に頭を下げるが何時までも  
もツンとしたシンジは聞く耳を持たない。青年は毎日こうしてシン  
ジに向かい反省の弁を述べるが余程相手には答えたのか何時までも  
そっぽを向けられ、避けられがちなのだ。

．．．はあ．．．同志が見つかった感じで良かったと思っただけどな

心中で頭を抱えながら四日前．．．．．彼と初めて会った日を思い  
出す．．．

\*\*\*\*\*

四日前・・・

FINAL VENT

「ハアアアア・・・！」

そんな・・・！？何でアイツがこの世界に居るんだ！？

俺は最初見たときはアイツがこの世界に居るなんて考えたくもなかった

・・・でも当時の俺と瓜二つ、唯一の違点と言ったら体の色が黒のこと・・・

「オラアアアアッ!!」

『ギャアアアアアア!!!!』

アルマジロみたいなオルフェノクはあいつの蹴りで倒れた  
いやそれよりも……!!

間違いない……リュウガだ!!

「……変身!!」

「Stand y - b y : Complete」

デルタフォンに音声入力した俺は右腰にあるデルタムーバーにセツ  
トし、ギリシャ文字の『』を模した額にオレンジの眼光、黒色の  
体に銀色のフォントストリームが流れ、『仮面ライダーデルタ』に  
変身すると同時にリュウガに殴りかかる

「この野郎ッ!!」

「グワッ!?!」

先手必勝だ!!容赦はしねえからな!

「．．．何にやってんの男鹿」

「あ．．．マサト？」

「君、邪魔。退いて」

「待ってくれ！！コイツは俺が．．．！！」

「話をするだけ、だから退いて」

マサトは俺に武器を構えながら脅迫している

まあ．．．キレたら色々面倒だしな、しょうがねえか

「グッ．．．！！いきなり何を！」

「ハイ、会話終了」

「ガハっ！？」

「ちょっと麻原君！？」

すぐさま手刀っすか．．．容赦ねえ．．．  
ってかマリ先生居たのか

数分後…

え．．．？

ちょっと待てマリ先生の話通りなら．．．コイツは．．．

「来週からこの校に入学する生徒ですか」

「そうよ！しかも人間だしなんだから傷つけてんじゃないの！！」

「．．．それにしてもこの妙なケースは可笑しいでしょう、鑑識に回しますが彼には一応保健室で見てもらってください。事情聴取はその後になりますので」

この世界の．．．リュウガ？

\*\*\*\*\*

そして現在に至るわけである。

「まあ、後で俺と同じで 別世界の人間 って分かったけどな」

「それ誰に向かって言ってるんだ？」

黒崎シンジ と 男鹿真司

異世界の しんじ が共に揃うのであった。

\*\*\*\*\*

翌日 . . . . .

【道端】

A M 0 7 : 1 3

その日はスバル&ティアナの初登校の日。  
着こなした制服を身につけ、鞆を持ちながら此处、流星学園に向かっている。

そこではほんの少しと言えど一時期の青春が待っているのだ・・・。

そう。

「・・・すいません、この辺りであたしと同じ制服着た女子見かけませんでしたか」

「え？誰も居なかったと思うよ、通学路から大分離れているしね」

「そうですか、ありがとうございます）・・・どおおこ行ったああんの馬鹿スバルウウウ！！！！？？？」

友から目を離さない限り。

\*\*\*\*\*

そんな彼女は現在、ティアナが居る所よりかなり遠い場所で歩いていた。  
ティアナと離れ、学校にも行きつけない状況に困ったように溜め息をつく。

「．．．．．あちゃゝ．．．完全に迷っちゃったなあ．．．」

「おや？君、そんな所で何をやってるんだい」

後ろから話しかけられた声に反応して、振り向くとスーツを着用した短髪の男性が居た。

「その制服は流星学園の物だね、もうこんな時間だし登校しているはずなんじゃ？」

「あ、ハイ。ちょっとしたトラブルで道が分なくなっちゃって．．  
友達とも逸れちゃったし」

「そうだね、なら一度学校へ行つてからそのお友達を探したほうがいいかな、先生方とも協力してね。案内するよ」

「ホントですか、ありがとうございます！」

親切に接してくる男にスバルは頭を下げて、付いて行った。

男の表情が不気味に笑みを溢した事に気付かず・・・。

\*\*\*\*\*

「・・・くろさ、き・・・ハア・・・ハア・・・待、てよ!？」

「煩い。遅刻する」

今日も謝罪しようとする真司から逃げる様にダッシュするシンジ。  
何時ものように軽くあしらってその場を逃れようとするが・・・

「ん？」

「・・・ブッ!!いきなり立ち止まん!？」

「オイ、あれって流学の制服だよな?・・・学校から道外れてるぞ」

シンジが指差す方向は

スバルに向けられていた。

T A R G E T ・ 1 3

私立オーガ学園へいらっしゃい？（前書き）

真司「・・・オイ」

スバル「・・・」

ティアナ「」

シンジ「・・・」

アスム「・・・男鹿さん・・・？」

海東「・・・」

真司「・・・何故俺を見る、俺がなるとでも言いたいのか!？」

一方、真司の世界では……………

【桜ヶ丘高校 軽音部室】

「……………はあ……………」

机に頬を預けながら、鬱憤を吐き出すように溜め息をつく。

茶色になびく髪は普段の 彼女 の明るい性格とは対照的で萎れた花の様に活気が無い。

『平沢 唯』、それが彼女の名前である。

活気が無いのは唯一人では無く、部室に居る彼女の友も同意であった。

肩まで下ろしたストレートの黒髪で、唯と同級である『秋山 澪』。彼女も唯と同意で、気を落とす一方であり先程から無言の状態であった。

本来この部室はこの様な静けさでは無かった。

澪と後輩である梓以外が下校時間まで遊び呆ける等、部活動とはか

け離れた時間を過ごしていく習慣がほとんどなのだが、今はそのムードメイカーの一員である律は授業中聞き逃してしまった分まで居残り勉強、ストッパーの一員で部の後輩である梓と巧は家庭の事情があり、帰宅したのだった。

普段のムードに流される方の漑は律の様に重い空気を軽くするほど皆の中心人物では無く、行動力もまずまずといったイメージ。だからこそ一つの部屋で二人っきりの状況はキツイのである。

「な、なあ．．．唯」

「．．．．うん？」

「あのー．．．えと．．．ほら！律の奴さ、授業中居眠りして先生に怒られたる？あの時ちよつとだけ寝言言つててちよつとだけ聞こえたんだけどさ．．．た、確か．．．『味噌汁おかわり』だつてっ！」

「．．．．へへ、そうなんだ」

漑なりのジョークを言ってみたものの、当の唯は興味を示さないように額を伏せるだけだった。

やはり律じゃない限り無理か、と心中で呟きながら頭を押さえる。

：『気の合う友達が行方を暗ます』という事実には同意出来るがその落込み様は唯の心情にも大きく変化していたのである。

へ何処行つたんだろう．．．．．真司君

\*\*\*\*\*

## 今から二日前のシンジの世界

### 【廃工場】

そこでは救急車のサイレンが鳴り響いていた。

要因は．．．．．『高校生男子の救助』

その場の近くに居た者や、事故か何かと聞き付けた人達で野次馬がざわざわと騒いでいた。

シンジの体　は駆けつけた救助隊に担架で仰向けに寝かされている。

所々傷が付いた体を慎重に歩を進めながら救急車の中へ運ばれているのである。

通報した人物であり意識があつた『初春飾利』はシンジの手を取りながら呼びかけていた。

「シンジさん、聞こえますか！！目を覚ましてくださいね！！しっかりしてください！」

「君、下がって！」

「で、でも……！」

「いいから下がって！！一刻を争うんだ！早く診てもらわなければこの子の命は無いんだよ！」

初春は隊員の男達の言葉を聞いて絶句する。

しかしシンジは死の境を彷徨うほど危機が迫っているわけではない。脈は何の変化もなく正常に動いている。

だが……呼吸が完全に停止している　　のだ。  
隊員の誰もがこのような状況は一度もなかった事であり、対応に困る一方だった。

やがて救急車に運ばれ、病院へと搬送されるシンジを見送る初春は浮かない表情で見送るだけであつた。

「シンジさん………死なないでくださいね」

\*\*\*\*\*

時は戻り、シンジ達が居る世界……

# 【通路】

スバルが連れてこられた場所は犬一匹居ない団地だった。

「あのー……すいません、まだ着かないんですか？急がないと遅  
刻しちゃうし……」

「……ゴメンね、もうちょっとで着くから」

「  
おーい、お前何やってんだー？」

ふと耳に入った張りのある声に二人は目を向ける。  
先程呼んだ声の根源である真司と、面倒臭そうに頭を掻いているシンジである。  
近づいてくる彼らに「誰だろ」と呟くスバルとは裏腹に男はバツが悪  
い表情をした。

「誰だか知らねえけど、流学の奴だろ？学校行かねえのか」

「え？今から行くトコなんだけど……何で？」

「何で って……おもいつきり通学路からずれてるぞ」

シンジの発言にスバルはどういうことかと頭を傾げる。

一方、男は彼女から気づかれぬ様に身を遠ざけようとするが真司はそれを見逃さなかった。

自身が居た世界で不良にガンを飛ばしていた眠つきで男を睨む。

「待てよオッサン、コイツ連れて何処行く気だった」

「……！」

「……お前、名前は？あの人はお前の知り合いなのか」

「あ、あたし？……『蒼風スバル』、あの人は今日……  
っていうかさつき会ったばかりだけど」

スバルの返答に呆れたような目つきと溜め息を漏らすシンジは真司に目を配る。

彼の気持ちを悟った真司も目を向けられる前から同意したようで哀れみな表情をスバルに向けていた。

「小学生、もしくは幼稚園児かお前は」

「は？」

「『は？』じゃねえよ、明らかに拉致られてんじゃねえか」

「防犯教室とかで習ってねえのか？ ああいう親切すぎる奴ほどこえって怪しいだろ。下手したら誘拐、それか身代金略奪だって有り得そうなのに．．．よくもあんな胡散臭い匂いがする奴にホイホイ付いて行けるよな」

シンジ達の説教に「へえ．．．」と頷くスバル。

だが．．．．邪魔が入った事に痺れを切らしたのか、男に顔面にタトゥーのような紋章が浮かび上がり、モグラのような姿を模した『モールオルフェノク』へと変貌していく。

『チツ！もうちよつとで掛かるトコだったのによお．．．．邪魔すんじゃねえよ、クソガキヤア！！』

「え、ええ！？何あれ何アレ！！」

「だから言っただけだろ！……オルフェノクまでは予想してなかったけど！！」

「クソっ！デルタギアは学校に置いたままだし……あんまり期待できねえけどコレしか無えっ！！」

モールオルフェノク（以後モールO）の出現にたじろぐスバルを怒鳴りつけながらも彼女の盾となるように前へ出る真司は左ポケットに忍ばせた何の特徴も無い掌サイズの黒いケースを取り出す。

もしかして、と真司の考えが読めたのか忠告も兼ねてシンジは彼の手を止める。

「待てよ男鹿ッ！」

「あ！？何だよッ！」

「一旦ココは退いた方がいい、人気の無い所に隠れるか、ちょっと無理がありそうだけど学校までダッシュしてくかない！」

「……チッ！しょうがねえ」

『おおーと！！逃がしはしねえぞッ！！！！』

身を退く真司だが、両手をドリル状に変化させたモールOは地面に

潜り込む。

相手が先に行動したのかと確信して、安堵するが．．．シンジだけは違った。

「．．．？逃げたのかな．．．？」

「．．．．．かもな」

「いや．．．．．違うッ！！」

シンジの読みは皮肉にも当たる事となった。

地面に僅かな振動が走っていたからだ。

その根源であるモールの足元目がけ、ドリルを向けていたのである。

いち早く気付いたシンジは二人をその場から倒れこむように遠ざけ、回避する。

『ハハハッ！！頭が回るのはその黒髪のカキだけか！』

「．．．クソッ！デッキがあれば．．．」

「黒崎、作戦変更だ。やっぱりコイツは一発殴るッ！」

待て、と叫ぶシンジだが当の真司は聞く耳を持たなかった。

・左手に持ったカードデッキを突き出すように真正面に構える

・すると・・・シンジ同様、銀色のベルト　　Vバックル  
が出現して、腰に巻きつかれる

・右腕を空中に突き刺すように斜め上に構えながら、空気を吸い込むように溜め・・・

・吐き出すように・・・叫ぶッ！！

「　　変身ッ！！」

スライドさせながらデッキをバックルにセットすると、幾つもの鏡像がシンジの鏡像に重なり、やがてそれは彼の姿を包みこむ様に形成され仮面と装甲を身に付けた姿となった。

容姿はリュウガに凄似しているが灰色を基調として、銀色の装甲と鉄仮面を纏っている・・・

男鹿真司が変身する仮面ライダー・・・『龍騎ブランク体』！

「…………締まらない格好だよな」

「……………ドラグレッターさえ居ればなあ……………もう  
ちよつとなあ……………」

真司がライダーであつた事に目を見開くスバルとは逆に冷めた表情  
でコメントするシンジ。

シンジの発言を受けた真司は俯きながら現在不在の契約モンスター  
についての愚痴を溢していた。

勿論彼のライダーとしての姿はこの様なインパクトが少ない容姿で  
は無い。

……………望みたくも無い不慮の事故が起こらなかった限りは。

『あのガキ……………!?何者だ!』

「俺の知り合い風に言わせるなら……………通りすがりの仮面ライダー、  
か?」

SWORD VENT

龍騎ブランク体（以後ブランク龍騎）はデッキからカードを一枚抜き取ると、左腕に装着された『ライドバイザー』に装身して、灰色の長刀『ライドセイバー』が右手に渡る。

『仮面ライダー？そんな物知るかッ！！』

「なら、これから教えてやるよッ！！」

その会話がゴングの如く両者が激突した。

ライドセイバーの淵を握りしめ、モールOを斬り裂こうとするが、懷に潜り込まれアッパーを喰らわされる。

「グワアアッ！！」

「男鹿！」

『ハハッ！何だもう終わっちゃったのか、ガキがビビらせやがって！』

「・・・グッ・・・まだに決まってるッ！」

再びライドセイバーを握りしめ、今度は突く形でモールOに接近す

るブランク龍騎。

そんな彼を見かねたのか、モール〇は再び地面に潜り込む。  
姿を見失ったブランク龍騎は辺りを見回す。

「しまった！？．．．チツ、何処だよ！？」

『 此処だっつのー！』

「な．．．ガハア！！」

背中に鈍い衝撃が襲いかかる。

地中から出たモール〇はブランク龍騎の背中にドリルを喰らわせたのである。

その様子を見たスバルは、決心したかのように目を吊り上げバンドを構える。

「えーと．．．．、オーガさんッ！！」

「『男鹿』だッ！！会って数分も経たないに言われたくねえよ！！」

「．．．そんな事言ってる場合じゃないでしょッ！！あたしも援護しますからね！！」

- 援護する -

その言葉を聞いたシンジは目を丸くした（真司は『お前が言わせた

んじゃねえか』と叫んでいた)。

オルフェノク

無知の人物に安々と付いて行く、それ以前に比較的肉体の強弱が少ない側である女性、いやましてや少女が男一人手強されている相手にどう援護するというのか。

シンジが肩を掴み止めようとするがスバルは気に止めない。

「ちょ、ちょっと待てッ!? 何するつもりだっ!」

「……大丈夫です、あたし戦えますから」

真剣な表情でモールのOに苦戦しているブランク龍騎を見つめるスバルはシンジにとっては一瞬の注目の的となった。

まるで自分とは違う歴戦を超えた勇者のような勇ましい表情へと変化しているのだ。

…もしかしたら、とシンジは期待するような心持ちとなった。

「行くよ………変身ッ!!!」

右腕の制服の袖を捲り上げ、高らかに叫ぶ!!

……が、

「…………アレ？」

「『』…………え？』」

何の変化も起こらない。  
それもそのはず…………

「あ…………、バンド忘れてきたかも」

「『』オイツ！！？』」

変身ツール所持の為である。

淡い期待を抱いたシンジと真司、更に危機察知したモールのOでさえもシンクロしてツッコんだ。

「うーん、何処で忘れてきちゃったんだろ…………昨日お風呂入って…………テント場で身支度してそれから…………ん…………？」

「いや、うるせえよ!」

『俺マジでビビっちまったじゃねえか! さっきのガキとは別格の意味で!』

…馬鹿だった…二重の意味で

シンジは地面に手を付き、スバルと自身に『馬鹿』の判子を記した。

「……だが隙有り!」

『な!?!? ギャアアア!?!』

突如ブランク龍騎によって繰り出された攻撃にモールの地面を転がる。

その攻撃は……ライドセイバーの刃先によるもの。

…『刀身』では無く『刃先』だ。

彼のライドセイバーは真つ二つに折れて使える代物では無くなった。だが残りものになった、刃先を用いて切り掛ったのである。

『デ、テメえツ!』

「……やっぱり俺無理だわ、剣術何て知らねえし、教えた貰ったところでどうせ忘れちまうだろうしな」

ブランク龍騎はボキボキと腕慣らしをしながらモールの近くに近づく。



『……………は?』

「あ、あれは……………!?!」

日光が反射して鏡を作った水面は捻じ曲げるかの如く大きく歪む。  
やがて、ゆがんだ水面から紅を基調とした龍が出現した。

その名は

「……………ドラグレッダー……………!」

男鹿真司との契約モンスター『無双龍ドラグレッダー』

・

「……………ここまで似てるんだな」

「ドラゴン……………?」

体色を違えど自身が契約しているモンスターと瓜二つのドラグレッダーを初めて見入られたシンジとスバルはその姿に釘付けであった。  
腹が空いたかのように鼻息が荒いドラグレッダーは鋭く光る瞳を

モール

〇 に向ける。

『ヒッ!? な、何だよ．．．』

『　　グオオオオオオオンッ! ！』

鋭利な刃のような歯が目立つ口を大きく開け、モール〇の全身を覆うように口内に含む。

呻き声とぐちぐちと肉が噛み碎かれるような音が混じる音がその場に響き渡り、やがて不機嫌な表情になりつつ灰と化したモール〇を吐き出した。

しかしハッ、と何かを思い出すようにブランク龍騎デッキからカードを一枚取り出し、ドラグレッダーに翳す。

そのカードには『CONTACT』の文字が表記されたイラストが書かれていないカードだった。

そんな彼の意図を読み取ったのか、用が済んだのかは不明だが目にも止まらぬ速さで水面（鏡と化した）　ミラーワールド

へ姿を潜り込ませた。

「．．．っ! チッ、またかよ．．．」

「．．．上手いかないのはお互い様って所か」

「うるせえ．．．」

再び取り逃がしてしまったことに落胆しながら、カードデッキを抜いて変身を解く真司を宥めながら肩を掴むシンジ。

…このシンジもまた、不遇な運命へと巻き込まれたからこそ彼に同情できるのである。

「あのー．．．」

「あ．．．．．悪い、さっき見た事は黙っててくれねえk」

「二人共、この世界の仮面ライダーなんだよね！さっきの怪人の事とか色々知ってるんでしょ！！」

「．．．．．え？」

…この世界．．．？

…イヤ、今、『仮面ライダー』って言ったよな．．．？

スバルから問いかけられたシンジと真司は脳内にある疑問詞を組み立てていきながら質問の答えを探していく。

「スバルッ！！」

「あ、ティア！」

ふと呼びかけられた声に反応したスバルの眼前には息を荒らげながら俯くティアナの姿が。

恐らく大急ぎで走り探していた為かなりの体力を消費しているのだろっ。

深い思考にいたってたシンジ達もティアナの存在に気付き、『あい

つ（スバルの事）の友達か』と認識する。

「もー何処行つてたの、心配したんだよ」

ブチッ

「うおらあああああ！！！！！！」

「ぎゃあああ！！？」

「「？えええええ！？」」

スバルから発された一言に切れた．．．．否、キレたティアナはスバルに突進を繰り出す勢いで首筋にラリオットを決め込む。

…何処行つてた？心配してた？？それはこっちのセリフじゃああアア！！

疲れと怒りで痺れを切らしたティアナは倒れたスバルに誰にも習っていないはずである海老固めを決め込む。

悲鳴を上げながらタツプするスバルを見て、シンジにはマリと瓜二つのお嬢様とツインテールのお嬢様、真司には長い黒髪の少女と黄色のカチューシャを付けた少女の姿が脳裏に焼き付いたとか何とか。

「ハア．．．．ハア．．．．すみません、後でコイツ絞めときますから」

「さっきやったよな．．．．？」

「・・・でも結構危なかったいいよなコイツ、俺達が来なかったら今頃どうなっていたことが」

「以後気をつけます・・・」

目を回すスバルの襟首を持ちながら、謝罪の弁を述べるティアナは頭を下げる。

そこでハツと何を思い出したか、額に汗を漂わせて青ざめるティアナは左腕にある時計を見る。

時刻は『07:32』・・・つまり・・・

その場に居る四人全員遅刻決定である。

\*\*\*\*\*

【流星学園 屋上】

P M 0 7 : 1 6

「さあーで、目指すかな・・・」

屋上で購買で買ったクリームパンを頬張る海東は二枚のカードを見ながら呟く。

そのカードには『O R G』と表示されたライダーのイラスト、もう一枚のカードはブレた絵柄だが、三枚のカードが三角形を描いているイメージがある。

「・・・帝王シリーズ全制覇」

次なる獲物に狙いを定め・・・コーヒー牛乳をすする海東であつた。

\*\*\*\*\*

【???】

P M 0 7 : 3 5

「協力感謝します．．．．．」

『ま、それなりの報酬貰えるっていうんなら．．．悪くないしね』

グレイブの世界に現れたライダーは目の前に居る怪人に感謝しながら、頭を下げる。  
相手からの許しを得たライダーは目の前にオーロラを出現させ、歩を進めるのであった。

「では行きましょうか．．．．．『カザリ』さん」

『良い暇潰しにして欲しいね．．．．龍騎』

齒車が動き出す．．．．．

T A R G E T ・ 1 3

私立オーガ学園へいらっしゃい？（後書き）

長らくお待たせしました．．．．．此処から本編へ入ります！

二作品コラボ頑張ります！

## 【ミラーワールド】

P M 0 7 : 4 2

現実世界と対なる鏡の空間・・・・・・・・ミラーワールド。

虫一匹、気配の無い此処に一匹  
ドラグレッダーは辺りを飛翔しながら徘徊していた。

火の粉の様に灯る金色の瞳は何かを探しているようであり、唸り声を上げながら鏡に映る現実世界を見つめている。

『  
グルルルルルルルル・・・・・・・・ッ！』

ふと視界に入った物体は彼の最も標的としていた物体の一つ。

それは体格からして人間と認識されるが、並とは異なる姿であった。

高貴な印象を持たせる黒い体と腰まで靡くローブを羽織り、クリア

ブラウンのラインが体中に走っている。

金色のベルトを腰に巻きつけ、ギリシャ語の（オメガ）を模した赤く灯る複眼を宿した仮面を被っているのである。

瞳に映る『仮面ライダー』を標的としたドラグレッダーはそれに目掛け 飛び上がった。

「グオオオオオオオオオオオッ！！！！！！！」

\*\*\*\*\*

同時刻  
・  
・  
・  
・  
・  
・

【2F 2年C組 教室前】

「うめんさーい . . . . .」

「はあ．．．ぜえ．．．つ、連れがみちま<sup>ま</sup>よっでしまった  
ようで．．．エホッ！．．．ずいま．．．」

「アハハ、気にしないでいいわよ。転校したばかりでんならしょう  
がないでしょ」

シヨンボリという擬音が聞こえる位頭を下げるスバルと汗を必要以  
上に流し、絶え絶えの呼吸で謝罪するティアナに目の前の教室の担  
任であるマリは笑いながら手を差し伸べる。

シンジ達と接触後彼女達は全力全開の脚力と根気で校まで走ったが  
結果は残念なことに．．．．．12分のタイムロス。俗に言う『遅  
刻』で終わったのである。

「でも次は無いつて思ったほうがいいかもよ？」

「え？」

「うちの校って服装チェックやら持ち物検査やらで教師や校則かな  
り厳しいし、昔ながらの寺小屋って感じよ。此処で3年間やってく  
つてなると．．．．．ある意味きついわよ」

マリの説明を含めての発言にスバルは「へえ．．．．」と納得した  
ような声で呟くが、彼女達は海東大樹による窃盗を終えるまでの一  
時的な入学の為ほんの1週間程度。ましてやそれ以下の場合もある。  
る。

たとえどれだけ厳しい環境でも数日も持ち応えたならば軽いものだ

ろう。

そんな思考に至るティアナとは裏腹にマリは「あとさ、」と付け足しながら話を続ける。

「．．．．．此処の風紀委員長がそれを許さないわけだし」

「委員長？」

「気にしないで。ホラ、挨拶するからココで待機しといて」

「はい」

「はい」

二人の返事を受け取ったマリは教室に入っていく、中にいるであろう生徒達の挨拶が聞こえる。

後に「伸ばすな」と告げると同時にティアナからの眉間チョップをスバルに喰らわす。

「痛っ！？」

「．．．．．反省の面が微塵も無いってのがよく解ったわ」

「ごめんつてば！．．．．．あ、そうそうあの先生ってさ誰かに似てると思わない？」

「誰か　って誰よ？」

「うーん、分かんないよ。何かどっかで会ったような、無かったような」

「気のせいでしょ。それか他人の空似よ」

\*\*\*\*\*

## 【2年C組 教室】

高めのテンションでクラスを仕切るマリは二人を紹介する。

「ハイハイ！新入生の紹介です！」

「蒼風スバルですッ！！宜しくお願いします！」

「……星河ティアナです」

「そんなわけだから仲良くしてくのよー！」

『うおおおおおっしゃあああああッ！……！……！』

二人の紹介にクラス中の男子勢はテンション最高潮な様子だった。  
そんな彼らにスバルは苦笑いを浮かべ、ティアナは呆れたように溜息をつく。

後にティアナの行動は女子全員の勘に触れる事になるのだが……。

一通りの紹介を終えた二人は指定された席に付く。  
ちなみに席順はお互い隣同士で机を挟む形となり、休み時間に突入した途端早速というべきかクラス中の殆どが彼女達に駆けよる。

「ねえねえ！前の学校では何してたの！」

「え？えーと……」

「この中で好きなタイプいる？」

「う、うーん、分かんないかな」

「趣味は！！」

「……食べる事？」

「何カッp」「お前何聞いてんだ！？」「」

「Aより大きいと思う」

ぎゃーぎゃーと次々に問いかけられ、たじろぎながらもスバルは返答し続けるが一方のティアナは鬱陶しいとでも言いたげな態度でそっぽを向く。

それが目に付いたのか如何にも不良の格好をした女生徒が数人、ティアナに詰め寄る。

「んだよオ！折角仲良くしてあげようとしてんだぞ」

「調子こいてんじゃねえよオイ！！」

「・・・・・・・・ハア」

『めんどくさいな・・・・・・・・』と心中で呟きながら軽くあしらうとするが・・・・・・・・

「  
オイオイ辞めろよ！！」

黒く日焼けした肌に耳にピアスを開けた金髪の男子生徒が不良女子に詰め寄る。

「あ？何で〇組の奴がいんだよ」

「うつせえなッ！大勢で一人に突つかかんたつてんだよ、コラ！  
！ああん！？」

「「「う．．．！」」」

メンチを切らす男子に恐怖する不良女子は彼から遠ざかる。  
それだけではなくその場に居る生徒が彼を避けるようにスバル達の  
席から離れていくのである。

「あ、あれ．．．」

「よオ！あんたらが転入生か！！オレは【蛇島ナオヤ】<sup>へびじま</sup>ってんだ。  
これから宜しく！」

「うん！これからも宜しく！」

「ちよつとスバル．．．」

満開の笑顔で手を差し出すナオヤに笑顔で返しながらスバルは手を  
握る。

流石に先程の不良と変わらぬ相手に仲良くなるという考えは如何な  
物なのかとティアナは思うが、スバルのほうはさほど気にしない様  
子らしい。

「あ！そろそろ授業始まるじゃねえか！？じゃあまた休み時間な！  
」

「は．．．？あんたココのクラスじゃないの？」

「オレんところは西校舎なんだ。んじゃまたな！」

「うん、また昼休みね！」

「いや、だからアンタ．．．」

なるべく関わらない方が身の為よ。

．．．的な事を言おうとしたが彼女は聞く耳持たぬだろうと察し、胸の奥にしまう事にした。

\*\*\*\*\*

#### 【4F 講義室】

スバル達が教室に着いてから二時間後、真司とシンジは自分たち以外誰一人居ない講義室にある椅子に座っている。いや、正確に言えば『座らされた』という言い方が正しいだろう。

何せ彼らはスバル達と同文、遅刻した者同士なのだ。

しかし彼女達の場合は 初登校＆新入生 という証印があつてこそ、

自分達とは違いここに招かれた訳では無かった。  
対して自分達はどうかろう。既にこの校の一員であり、前者のような何でも許される権利など1ミリも持っていない。不平等、不公平といった反論も耳を傾けてはくれないのだ。そうやってしまっでは受け入れるしかないだろう。そうだろう。

「・・・・・・・・で、書けたか黒崎」

「書いてねえ、つか書けねえよ」

「まだか・・・・・・・・」

「お前は？」

「全然・・・・・・・・つか、」

「・・・・・・・・無理だろ」

「・・・・・・・・だが受け入れた所でこの状態が和らぐわけでは無かった。

彼ら二人は遅刻した処罰として現在机に置かれた原稿用紙に作文を書くとしてそこに座らされているのだ。

テーマは『反省文』

遅れた原因、動機、今後のわきまえを800字で書けと言うのだ。

無論、文章を書けと言われて無理だ、といった答えは無い。  
数学や理学といった知識が膨大な故に嫌悪なイメージが抱かれる方に比べれば個人の思いや意見を紙に書くというなら幼稚園児でさえ出来そうな課題である。

．．．だがココで一つ注目すべきポイントは後部分                   『800字書く』

そう、ここなのだ。

日記の様な縦書きに八列程度ある文章なら気軽に書ける為『苦勞』の二文字など存在しない。

．．．字幕なわけで解り辛いし不可能なのだが見て欲しい。  
目の前に敷かれたこの真っ白な四枚の用紙を。  
聞いた話では一枚200マス、合計4枚で800マスあると言っていた。

その紙に反省の弁を800字で余ることなく書き収める。

無理だろ。

何故？

何故、反省した意を文字で伝えるのに800字？

普通に『ゴメンナサイ』で謝まっときゃ良くねーか、．．．．．あ、  
そもそも口で言や良いんじゃないやねえか？

人間って思いを伝えるために口ってのがあんだからよ。

．．．．．思い伝えるために拳の方振るう俺も俺だけだな。

脱線したな。作文書かねーと。

．．．．．。

．．．．．。

．．．．．。

撃沈、それだけだよ、負けたけど悔しくも何ともねーし。

字書いても足りねえ、行が埋まらねえ、紙が減らねえ、分かんねえ。

やべえ．．．ぶっ壊れそうだ、脳の回転が。  
頭熱ちい．．．．．シヨートってこつ言つ事を言つんだな。

「男鹿」

「あ？」

「．．．．お前の周囲、つーかお前から蒸し暑い熱気がするんだけど気のせい？」

「．．．．．当たりだよ、冷ましてくれ」

「断る。作文出来てねえ」

．．．．．妙な語り手が現れたのでここで戻ります。

半開きの目と顔がオーバーヒートを起こした様に真っ赤に染まる真司は机にでこをくつつけながらシンジに話しかける。もはや身体と精神が底を付きそうな勢いである。

一方シンジは途切れ、途切れになりながらもペンを動かし反省文を書きあげていき、たった今一枚目が完成して二枚目に突入する。

対する真司は一枚目どころか一行も書いていない様子でペンを握る事も叶わなかった。

もはや絶望的、真司はそう察する。

「．．．．．頼む黒崎、コッチの方も手伝ってくれ」

「さっき俺何て言った？」

「頼む、マジで頼む黒埼君。壊れかけなんだよ俺は」

「壊れとけ、後 君 付けんな。つーか後ろのアイツに頼めばいいじゃねえか」

真司の助け船を冷たく追い払ったシンジは右手で文字を書きながら、紙を押さえていた左腕を動かし、自分達の後ろを指差す。

だるそうに体を動かす真司の視界に映ったのは最後部の席に座っている女性だった。

透き通るような白い肌に細く開かれている瞳に日光に反射すると黒が際立つ長い髪をツインテールにした、シンジ達と同年代程の女生徒が椅子に腰かけ、反省文を書き進めていた。

「おい、誰だアイツ。つうか何時から居た？」

「俺達より先に来てたろ」

「マジか、俺全然気付かなかったぞ」

「俺もちよつと休憩した時に気付いたけどな。多分<sup>オ</sup>組の女子だと思っぜ」

「O組ってあそこだよな、西校s y「どう？終わった」あ、麻原」

真司の言葉を渡って講義室のドアが開かれる。

整った顔形に跳ねる様に浮いた黒髪にやや目に届く程の前髪をたな

びかせ、伊達メガネの奥に映る瞳は獣のように鋭く光っている。  
流聖学園風紀委員長・2年生【麻原マサト<sup>めばら</sup>】、それが彼である。  
彼が現れた途端目の色を変え、負けず劣らずといった感じで睨み返した。

「書けた？書いてないならいい加減早く書きあげた方が身の為だよ。  
もう二時間目終わったし、課題はどんどん進む一向。学食も口で  
きない所か放課後まで引き延ばされる。最低深夜もアリ」

「……こつちとしては授業受けねえからいいんだけどよ」

「無断欠席発見。チェックね」

「イヤ、ならねえだろ！」

「……僕のやり方に従わない？」

ポツリと発された発言と同一に冷たく見つめてくるマサトにやや寒  
気を感じ取った。

それはシンジも同じく、背筋から肩まで僅かだが震えた。

氷河期でも無い涼しさに沈黙が続く中、「悪かったよ」の真司の一  
言で再び灯る。

「分かってくれたらいいんだよ。偉いな君達はちゃんと理解してい  
うのが出来るんだから。あ、そうそうコレ」

「………？……ッ！………コレは！」

「君が変身してたカードデッキ。鑑定してもらった結果何の変哲もないタダのガラクタだった。だからこんな物は僕達にとって何のデメリットも無い。だから返すよ。その代わり変身は拘束するけど」

「あ、ああ、ありがとな」

「それと男鹿、君は放課後まで反省文終わらしなよ。集会あるの覚えてるでしょ」

「分かってるって「は？お前風紀委員なのか」・・・知らなかったのかよ」

机をのりだし真司へと顔を向けるシンジの表情は驚嘆と意外が混ざっていた。

それもそのはず。不良というイメージが強い彼が学校の生活習慣を取り締まる等誰が考えようか。

「体力がある奴ってそれなりに役に立つからね。デルタも適合したし、こっちから誘ったんだよ」

「ああ。・・・さっきみてえに脅しに近い感じだけだな！」

「・・・大変だなそりゃ」

シンジからの同情の眼差しを受けながら真司は数分前と同じく机に体を預ける。

飽きたかのようにその場を離れるマサトが向かった先は最後席に居る女子だった。

「．．．．【鶴宮ユカ<sup>つるみや</sup>】、反省文は？」

「先程完成しました」

「早っ!？」

「．．．うん．．．．うん．．．OK、戻っていいよ。どうせ遅刻になるだろうけど」

「はい」

一通り見たマサトに短く返事をしたユカは筆記用具を鞆に閉まい、やがて身支度が完了したらしく鞆を背負いながらドアを開けその場から去った。

「クリアかアウトか知らないけど、一応一人消えたよ。君達もペースを上げた方がいいかも」

「ハイハイ」

「ハイ、は一回」

「．．．．はい」

「分かった」

消しゴムを回しながら洪る真司と再びペンを動かすシンジを確認するとマサトはドアから出てその場を離れる。

盛大な溜息を隣から聞こえるにも関わらず文章を考えるシンジ。  
だが……

キイイイイイイイン キイイイイイイイン

「ッ!」

久々に耳に届くこの音が彼の思考を強制停止させる。

同じくカードデッキを持つ真司にも聞こえた様であった。

即座に席から立つ二人は室内にある窓に近づき各々のカードデッキを構える。

「……ちょっと行ってくる」

「俺も行くぜ」

「お前は反省文書いてりゃいいだろ」

「ドラグレッダーかも知れねえんだ、……嫌この世界ならアイツしかありえねえよ」

「・・・なら二人で同罪だな」

「だろうよ」

「変身ッ！」

「変身！！」

Vバックルにデッキをセットした二人に鏡像が重なり、シンジはリユウガ、真司は龍騎ブランク体に変える。

「足引つ張んなよ黒崎ッ！！」

「そっちこそッ！」

それぞれの思いを抱き、二人は窓に吸い込まれるようにミラーワールドへと侵入する。

講義室には散らばった用紙が微かに落ちていくのだった。

\*\*\*\*\*

【屋上】

この世界に到着したカザリは先程のライダーに渡された物を握った手を開いた。

「フフフ．．．本当に便利だね、『ライダーメダル』って．．．」

手中にある血の様な赤色のメダルを見つめながら笑みを浮かべた。

\*\*\*\*\*

【旧校舎裏】

P M 0 9 : 3 2

『グオオオオオオオオン！！！！！！』

「ハッ！フン！セヤアアア！！」

そこに一人と一匹．．．．両者が対立していた時である。

一匹はドラグレッダー。

一人は『仮面ライダーオーガ』である。

ドラグレッダーの口内から発される火炎弾をオーガストランザーで振り払いながら徐々に攻撃のチャンスを見計らうオーガは悪戦苦闘であつた。

へ何だこの龍は．．．．灰色の体がじゃないからオルフェノクでもない。だとしたら一体．．．!?」

「セヤア!」

『グオオオン!』

急接近しながら突っ込んでくるドラグレッダーを回し蹴りで対抗して、吹き飛ばされたドラグレッダーに一気に叩こうとするが．．．

「  
待ってくれ!!」

「え?」

「そいつは俺が捕まえないかならねえ!!だから倒すのは辞めてく

れ！」

「……………アイツも異世界のライダー……………」

ミラーワールドから出たブランク龍騎がドラグレッダーを庇うようにオーガを制止させる。

それがこの世界……………【オーガの世界】の鍵となる人物の出会いであった。

「やっと見つけたよ……………オーガ」

その状況を物陰から見ていたマサトはベルトを巻きつけ、携帯型ツール『カイザフォン』を作動する。

「9・1・3」[Standby]

「……………変身」



## 【テント場】

．．．．．リュウガ達がオーガと対面した一方．．．．．

テーブルに置かれた鍋．．．．．正確にはその中身を凝視している者が居た。

少年（年齢考えたら青少年？）アスムはかの有名な像のように顎に手を当て俯いている。

鬼の修行を除けば何もすることが無いアスムは今晚の夕食について悩んでいるのだ。

海東達三者の好みを含めるのもそうろうが、季節や環境、時期に合った調理も捨てがたい。

今の時期、やたらと梅雨が続く一方であり湿気が上昇しているがそれが毎日とは言う訳では無く秋の様な涼しさもあり、心境が和む事しばしばあるのだ。

．．．と、なるとだ。

「．．．．．涼しさを考えたら．．．．．早すぎだけど素麺？．．．いや今日はどっちかというとやや温ったかい程度だし．．．．．

もつと冷やして冷やし中華が、．．．．妥当案で鍋とか？」

うーん、と一人悩み続けるアスムだが、そんな彼に教えを請うものは誰も居ない。

彼の悩みの種である、海東は詳しい事情が無いため行方知れず、スバル達は今頃学園生活を満喫しているであろう。

「あ．．．、そういえばスバルさんバンド忘れて行ったけど良いのかな？」

今朝、ふと寝袋の中から見つけたスバルのバンドを手に取り困った表情で呟くのだった。

\*\*\*\*\*

所変わって流星学園．．．．．

【旧校舍裏】

「君達は．．．．？それに今鏡から．．．．？」

「．．．．一応此処の生徒で貴方と同じ仮面ライダーです」

「その 仮面ライダー というのがどういう存在なのか知らないけど．．．此処の生徒なら授業はどうしたのかな？今の時間帯を考えれば三時間目の途中だと思うんだけど．．．．」

「どうせ俺達二人共受けることねえよ．．．あと、あの龍は倒さないでほしいんだ！．．．アイツは．．．俺の．．．．．こう．．．ペット的な奴なんだ！」

「．．．．何故に俺含んだ？」

突如鏡から登場したブラック龍騎とリュウガに多少の驚嘆しながらもオーガは二人に問いかける。

その際ブラック龍騎の返答の前語にツッコムリュウガ。  
一方のオーガは『龍は倒すな』という発言に首を傾げる。

「．．．．？、ペットって．．．君は龍を飼っているのかい？だとしたらちゃんと鎖で繋いでおかないと．．．．放し飼いにしたら

危ないからね」

「いや、あくまで 的な だから……」

「ふ……説明するのも面倒だな」……兎に角あの龍はアイツの相棒……いや、契約している相手みたいな存在なんです。俺はどうだっていいけど消滅したらコイツ（龍騎のこと）に負担があるみたいだから……」

理解し難いオーガに補足するようにリュウガが付け加える。  
流石に異世界の常識は通用しないのか話のスケールが大き過ぎたようだ。

そもそも龍騎こと男鹿真司とドラグレッダーは元は契約している筈であり、自身の力も今のようになんて衰えては無かった。だが世界の枠を超えた影響からか、ライダーとモンスターの関係に歪みが生じ、最終的には途切れる形となってしまったのだ

両腕を組み、暫し俯くオーガだが意を決したのか顔を上げ二人の方を向く。

「……分かった！それが君にとって最良な事なら……」

「ッ！！マジかッ！」

「うん、……ってアレ？」

「………居ないぞ」

仮面の奥で安堵するブランク龍騎の表情が一瞬で腑抜けたように頬が下がる。

どうやら会話の途中、諦めて次なる獲物を求めたのか、再びミラーワールドへ身を潜ませたようだった。

幾度とないチャンスを逃した龍騎はその場で肩を落とす。

「…………マジですか…………」

「う、ごめんね、僕が邪魔したせいで…………」

「いや、何ともないですよ…………たぶん」

「…………フォローしてくれ黒崎」

「水を差すみたいだけど、別に良いよね？」

「ッ………また君か！」

「あ、アイツはッ!？」

突如発された声に何時に無く動揺するオーガだが、リュウガ達にとつては聞き覚えがある。

声の根源を探すとそれはすぐ近くに佇んでいる大木の上からだと言断した。

オーガと同様、黒く塗りつぶされた携帯電話を模したベルトに、金色に近い黄色のフォトンブラッドが体中にラインを描き、ギリシャ文字の『X』を模した仮面と紫色に発光する眼光を宿した【仮面ライダーカイザ】が彼ら三人を捕えるように見つめている。

「その黒いのは黒崎シンジだろうけど……全体的に薄そうな君は声帯からして男鹿真司かな」

「そう言うお前は……麻原か？」

「ご名答。君達は専門外だけど、屑を潰す為に設けられた力だよ、オルフェノク……それより黒崎シンジ、君に変身の許可は下りてない筈だけど？反省文は??」

「変身するのは俺の自由だし、それにちよつとした休憩だ。流石に二時間も椅子に座るのは苦手だな……肩も凝ってくる」

「それは余程運動していない証拠じゃないかな。体力が低下している恐れがあるかもね」

「お前な……」

「まあ、後で肅清してあげるけど……それより、」

ぐりん、と首を動かしたカイザが向いた方向は．．．．オーガ。体全体を彼に向けると同時に腰に翳した仮面と同様に『X』を模した剣銃【カイザブレイガン】を手に取り、カイザドライバーに搭載されたミッションメモリーを淵部分にセットして、剣部分が淡い金色に発光する。

「まずオーガ、お前はこの手で殺す」

「．．．．．」

「同志である屑に肩入れする一方、人間には直接的な危害は加えていないとはいえ恐喝・威嚇等といった挑発的な行動．．．．僕ら人間に対する侮辱行為だ。大人しくこの学園から消えるんだな」

「侮辱行為．．．．それはどっちもどっちだと思うよ」

「何？」

「君達はO組の生徒を．．．．オルフェノクを完全に軽蔑、否定している。仕方は異なっても君達が行っていることは僕と同じだと思う」

「お前のやり方と同類にしないで欲しいな。吐き気がしてしょうがない」

「．．．．ならどうやったら君達と和解できるのかな」

「．．．ふざけんじゃねえ．．．．、お互い面を向き合えば分か

り合えるかと思ってんのか？未来永劫ねえよ？お前らオルフェノクなんて、生きる死体。ゾンビ臭くてしょうがないんだよ」

「．．．ッ！．．．．．」

次々と普段の口調から離れていくカイザの発言にはオーガの怒号に触れたが決死の理性で耐える。

だが一方のカイザは既に堪忍袋の緒が既に切れているような態度でカイザブレイガンを構える。

「兎に角だ．．．．．消えろよッ！！！」

「くッ！？」

「ア、アイツ！？」

接近するように跳びかかりそのままカイザブレイガンを振るおうとする。

ブランク龍騎はすぐさま反応して、ライドシールドで塞ぐためガードベントを発動しようとする。

GUARDVENT

- ガキイン！ -

「つて．．．」

「き、君は．．．!？」

「何の真似かな．．．?」

．．．だがそれは、ブランク龍騎  
はなく．．．  
男鹿真司  
のもので

「．．．ライダーは助け合い　って、どっかで聞いたことある  
しな．．．!」

「　黒崎ツー!」

リュウガ  
のドラグシールドによるも  
のだ。  
黒崎シンジ

\*\*\*\*\*

## 【2年C組 教室】

・キンコーンカーンコーン・

甲高いチャイムが校内に響き渡る。

3時間目の授業終了のチャイムであり、10分間の休憩である。

「うーん!! 終わったあー!」

「現国なんて何年ぶりだろ・・・」

スバルは後ろに体重を預けて背伸びをして、ティアナは懐かしげに

眩きながら教科書とノートを片づける。

因みに3時間目は現国の一種である古文であった。

やたらと古文の解読や読み書き等苦戦（主にスバル）したがその場で得た学習と知識で何とか切り抜けられた。

「お腹すいた〜お昼休みまだかなあー！」

「もう1時間だから頑張りなさい」

「そうは言ってもさあ……………1分1秒が長すぎるよあ……………早弁していい？」

「弦寺先生にチクるわよ」

「え……………ゴメンやめとく」

「よろしい」

空腹にぶーたれるスバルだがマリの存在を出された途端大人しくなる。

別にマリでなくてはならないと思うだろうがそれがそうでも無い。

2時間目の授業、その時は公民（社会のこと）で政府や当時の異国の文化がテーマであった。

マリはその担任教師である。

始まってから15分後、あろうことにスバルは盛大にいびきをかきながら熟睡モードに陥ってしまい、感づいたマリは短めの赤いチヨークを宙に投げ、落下する際スバルへの標準に定まった所で凸ピン

でチョークを飛ばしスバルの左鼻へと一直線に突っ切り、見事命中したのである。

勿論咽るながら起きたスバルはマリの威圧的な何かで授業に取り組んだ。

更に付け足すなら鼻に付いたチョークの粉は授業終了まで拭かせてはくれなかったとか……。

「うー……あの時はホントに驚いたよ」

「アンタの自業自得でしょうが」

「だけどさあ……」

未だに机に顎を擦り付けるスバルを無視してティアナは次の授業の準備をしようとする。

流石に無視されることに嫌気が刺したのか、どういわけかスバルは隣のティアナの机に自身の机をひっ付け……

「何よ？」

「あのですねえ……」

ムニユッ

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「もう少しし人の話を聞くべきだと思いますよ、ティゝアさん」

…何故かティアナの胸を鷺掴みにする。

その行動にティアナの顔の筋肉はカッチカチに硬直する。

そのまま指を動かそうとするスバルだがそれは叶わぬ結果となる。

に あ や

代わりに誰かさんの絶叫が響いたらしいが……。

あ

● ● ● ● あ

あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ

あ

\*\*\*\*\*

# 【美術館】

流星学園では本校舎の隣に倉庫と呼ぶには勿体無い建物がある。

それが此処美術館なのだ。

室内はまさに神秘的でかの有名なお偉い画家さんや歴史に名を残した名作が展示されている。

現在、そんな場所に海東大樹は潜伏している。

「・・・ベルトも無いんじゃないな・・・絵画もある意味戴きたいところだけど・・・その前に」

海東はその場に立ち止まり、・・・ディエンドライバーを取り出し、カード装身したと同時に銃口を後ろに向ける。

「子猫退治が先のようだッ!!」

【KAMEN・RIDE…DI・END!】

「おっと!」

銃口から発される銃弾とライドプレートを同時に標的に向けるが、上空へ飛び上がったことで上手く回避する。

「お会いできて光栄かな……?……グリード」

「君が生きてるなんて思ってもみなかったよ、……海東大樹」

この日、この時間……ライダー（ディエンド）とグリード（カザリ）が対立した。

## second・collabo memory 1（前書き）

今回は4つ目の世界に干渉する前の前実談です

現在の三つ目の世界・オーガ編でもエターナル様・メイプル畑様と二作品コラボを行っていますが……

……終了後、ベルト様・相生乱銅様の作品とコラボします！

本当にありがとうございました！！

小説を書いてから連続で二作品コラボは初なので緊張感・不安が募る一方ですよw

特に相生様に関しては契約してから三カ月以上お待たせして申し訳ございませんm（ ）m

因みに……今回のコラボはベルト様が執筆なされているストーリーにも影響しています

ご覧下さいませッ！

## second・collabo memory 1

．．．．．とある世界、

### 【風都】

その日、この街では僅かに濁った風が隙抜ける様に運ばれていた

……風力によるエコロジーが栄える街

風都

此処風都はどの都市よりも高揚感のある風が流れ込むことで有名である。

その象徴と表すべきなのがどの建物よりも勝るかのように聳え立つ、築30年を誇る『風都タワー』。

一時期、とある事件により崩れ去り地に落ちてしまつたが、数か月に及ぶ民衆の再建により無事復興。刻一刻と動く風車かざぐるまが今もまた豊かな風を齒に寄せ、街に与え続けているのだ。

更に子供や大人、その都市に滞在している全般の民衆に好評な評価がある『ふうとくん』というマスコットキャラクター等の名物も健在して、観光スポットとしても一目置いてる。

そしてもう一つ……『仮面ライダー』の存在。

地球上の伝説や生物の記憶を秘めた『ガイアメモリ』に関する数々の難事件を解決した風都タワーに次ぐ民衆達の希望なのだ。

その紅一点を務めるのが、右が緑・左が黒を特徴とするこの世界の仮面ライダー……

だが…留まる事を知らぬガイアメモリ事件が相次いでいる中、颯爽と解決していく筈の仮面ライダーが一月以上前より消えたかのように姿を現さなくなり緑も黒も欠片も無いのだ。

勿論ガイアメモリに関連する事件が多発というわけでも無く、一般の市民のみの事件は警察が専門なので仮面ライダーが割りこむ事は至って皆無だ。

しかしである、市民にとってタワーと同等で称賛されている存在が不在という事実は風都市民にとって不安や疑心を募らせた。

更に…追い打ちをかけるかの如く、市民にとって不穏の存在が……

あの 悪魔 が潜伏しているという噂が…

\*\*\*\*\*

## 【風花荘】

街からやや遠く離れた所にはアパートが佇んでいる。

新築という訳でも無く、目新しさと聞かれたら少々薄い程度だが、個性溢れる住人達が住む温かみのある場所。それが此処、風花荘である。

その中にある一室ではただ一人：風花荘大家の孫娘『松下里美』は窓の奥に浮かぶ空を見つめている。

彼女が見つめている大空は、覆い尽すように灰色のオーロラが占拠していた。

因みに風花荘は南極に建築されているというわけでは無く、北方向にある日本だ。

そもそも普通に見られるオーロラは明彩色を基調とした物が一般であって、灰色という暗いイメージが浮かぶオーロラは歴上の科学者は勿論、今世代でも発見されていない限り有り得ない現象なのだ。

…しかし里美は理解している。

以前彼女は風都に散らばるガイアメモリとは異なるメモリによる効

果で平行世界に行き着いたことがあるのだ。その時は彼女自身も最初は目を疑ったが実際に体験した為受け入れる事にした。

…あのオーロラにはその時と同じ感覚と似てるのだ。

それが勘なのかという事については保障は無いが少なくとも、それと似ている。

里見は軽く吐き出すように溜め息をつきながら、腰まで靡く黒髪を掻き上げ、窓から目を離す。

「……はあ、あのオーロラはいつになったら消えるのでしょうか？」

『あゝオレもそんな気するツスねえー、ダルイけどお』

「…………え？」

突如後ろから聞こえた気の抜ける様な声に反応して、里美は恐る恐る後ろを向く。

彼女の視界に映ったのは…自身が最も接するべきではない存在だった。

形だけ見れば人間の骨格に当て嵌るが、全体的に左右対称の姿だった。

全身が灰色の体に頭部の右部分が鋭く、左部分がウェーブが架かり、右目が吊り目、左目が垂れ目。  
更に脚まではいかないが腕や肩が鏡映しにしたように逆方向に曲がっているのだ。

一目見た途端、理解する……『ドーパント』だと。  
里美は顔を引き攣らせ、後退りする。

「そ、そんな……！？何時から……！」

『さつき到着したばつかスよあ、あ、そうそう、因みにオレ【E<sup>ア</sup>A RTH】に所属してるモンで、【平行・ドーパント】てえーの。』

「こ、来ないでください！！きゃっー！！」

「襲つたりしねえからダイジョビ×2、オレ熟女派だから15、17に興味なーの。まア手短に済ませてェし……」

怯える里見などお構い無しな雰囲気とチャラけた口調で接近してくる平行・ドーパント。

すぐさま里美は祖母、又は別室に居る青山を呼ぼうとする

「お、おばあちゃんッ……！たす……」

が、

「 あーい、ご乗車アリガ〜、一名様とその他ツーパーアご案内〜ん」

手を上に伸ばすと部屋全体を包みこむようにオーロラが飲み込む彼女とドーパントを飲み込む。

「 上野くん．．．．．！！！！」

その後、何事も無かったかのように里美とドーパントは姿を消した。

\*\*\*\*\*

【風都市街地】

多数のドーパント騒動を無事解決した『上野進也』は疲れを取るように背伸びをしながら練り歩いていた。

彼もまた風都で戦う仮面ライダーである。

やや耳までかかる黒髪が街に流れ込む風に当てられ、前髪を浮かせる。

だが、

つい最近移住したとはいえ、街の変化にある程度は確信した進也はどこか不安な面影だった。

「……変だ、異世界からの怪人も倒したし、メモリも全部回収したっていうのに」

何でオーロラが消えてないんだ？」

進也が、そこに居る市民達も頭上にある大空を眺めていた。

彼は先程、異世界を巡る仮面ライダー二人と『召喚の記憶』を宿したコール・ドーパントにより出現したライダーとドーパント達、更に自身も知らないアンデッド等の異形達を協力して見事倒す事に成功したのだ。

その後、別れを済ませ風花荘に帰宅しようとする進也だが……

元凶であったオーロラの減る傾向が全く無いのだ。

事件に立ち会う前はあくまで風花荘から見える程の小規模だったが、急激な日増しでも起こったのか、現在は風都を丸々飲み込みそうな規模に変化している。

まだ何か起こりそうな不安感を進也は感じていた。

…しかもそれは突然だった。  
オーロラが急激に大きくなったな、と思った矢先地面に近づくかの  
如く接近してくるのだ。  
その現象には市民達も怯えるような声に包まれ、進也もまた後退り  
する。

「なッ、何だ!？」

やがて地面に辿り着いたオーロラはそのまま何事も無かったかのよ  
うに消え去る。

建物も、

市民も、

花も、

タワーも、

風も、

全て残して、

上野進也のみがその場から消え去った。

\*\*\*\*\*

## 【????の世界】

「フフ 竜チャン残して他二人は確保成功、叔父様に報告しなくっちゃ!」

気のいい笑みを浮かべながらディスプレイに映る【Wの世界】の現状を眺めている、見た目20代前半の女性はレポートにペンを進めながら、手に持つガイアメモリのスイッチを押す。

## 【PSYCHO】

\*\*\*\*\*

一方、

【???】

「やっと帰れたと思ったら今度は何処の世界だ…？」

その年でありながらホワイトのスーツと深々と被ったハットという何処かのハードボイルドな印象を持たセル少年……『鏡弥アラタ』は辺りを見回す。

…其処は彼が先程立ち会った風都に凄似にしている。

しかし、

殆どの建物や瓦礫となり果てて、全壊しており

辺りには餓死したであろう、肉体が腐りきった死体

風都タワーに似ているが、歯や柱の彼方此方が崩壊した歯車

草木が枯れ果て、生氣という存在が疑わしく

風一つ吹かない光景だった

## second・collabo memory1（後書き）

随分と前の話ですが『Wポジションはスカルorエターナルか』。

皆様が投票してくださった結果……

スカル 1票

エターナル 5票

ということで……【エターナルの世界】に決定しました！！  
やっぱりVシネ効果凄えww

【エターナルの世界】編は7月の下旬に更新予定です  
ちょうどDVD発売時期だー（^w^）イエイ

因みに時列順には

ベルト様が現在執筆なさっているコラボ編終了後

【エターナルの世界】介入     ：メンバー「進也・里美・アラタ」

……といった感じです！

…追記すると月々金のどちらかで進也sideの方を執筆して  
いこうと思います！

まずは【オーガの世界】完結まで執筆作業だYO！orz

## second・collabo memory2 (前書き)

無事テスト期間を終えました…… (冷や汗)

前回から十日以上更新出来ませんでしたが一気に投稿ペースを上げていこうと思います！

その前に軽く一息ということば……どづぞm)・v・(m

【????】

- シュウウウウウウン…… -

「…ッ!?…此处は一体…」

謎のオーロラに飲み込まれた上野進也が行き着いたのは四方も分  
らぬ薄暗い空間だった。

冷房でも効いているのか冷たい空気が漂うせいで、肌が震え不思議  
と寒気もする。

いや、それよりも状況を掴む方が先決だ。

オーロラに巻き込まれたとなると、先程の件から考えれば異世界へ  
来たと考えてもよいだろう。

もう一つの可能性を用意するとなると、風都より遠方の地域だとい  
うのもあり得なくはないが。

突然訳の分からない空間に居る事に困惑しながらも左右上下戸辺りを見回す。

僅かな視力だが、機密な壁と鬼火のように不気味に光りながら作動している機械も幾つか見渡せた。

そうなる何処かしらの室内という考えが進也の脳裏に現れる。

その時…

「お気に召したかしら」

「ッ!？」

突如背後から伝わった、妖艶に撫でられるような声が耳に届く。  
即座に進也は体全体を後方へ向ける。

「誰だ…!!」

「あらあら、そんなに身構えちゃって可愛いわねえ。

でも安心しなさい、危害は加えないわ。…寧ろ貴方が必要だからこそ此処に招き入れたのよ?」

え?、と引き締めた頬を直ぐに崩してしまった進也。

今の自分の様子を見てほくそ笑むのは、進也より背がある20代後半の女性だった。

さらに、と解かされた綺麗な黒髪をストレートヘアにしているが前髪の先端が黄色と青の色彩、それを耳に引っ掛けてデコを丸々出

すようにしている。

見た感じだと青山と同じ種類の赤淵の眼鏡を掛けているようであり、研究員の様な白衣を纏い、淡い紫のスーツから大きく膨らんだ胸元にピンクに近い紅い唇が女性としての魅力を醸し出していた。

「あのー…どちら様でしょうか」

「ん。そう言えば自己紹介をするべきだったわね。  
では改めて、九十九コーポレーション通称「アース EARTH」の第38代目局長を務めています、『九十九鈍／つくもにぶる』という者です。以後お見知りおきを」

「あ、はい、こちらこそどうも…」

幼稚な子供を相手にする態度から手の平を返したように堅く一変して、白衣の上着ポケットから名刺を取り出す九十九鈍に戸惑いながらも渡された名刺を受け取る。

其処には彼女が言った通りの地位が記されていた。

…が一つだけ目を伺ったものがあつた。

『地球の欠片・ガイアメモリ提供』

「え！？」

どういう事だろうか。

自身にとって危険分子であり、対象者に大きな被害を齎すガイアメモリを何の悪びれも、隠し気も無く作成して、この世に提供されているのだ。

目を向けられぬよう隠密に事を進ませるアルファベッドとは違うものの、人体を脅かす麻薬を配布されている事実に変わりは無い。

「さて、上野進也君？」

「は、はい」

「早速ですが此処は異世界であり、君達が住んでいた風都とは全く異なる地域環境です。

君は仮面ライダーとしてガイアメモリを質量兵器として扱い、何れ占領を目論むアルファベッドと対立しています違いますか？」

「はい、……でもあなた達もそのガイアメモリを作っているんですよ？」

「そうですね、しかし私達EARTHはアルファベッドとは対なる存在です。

EARTHはガイアメモリを有効且つ的確に構造して配布し、個人の生活環境を支える為の言わば必需品。

アルファベッドは記憶を身体を<sup>メモリ</sup>調合させ、それを剣として傷つける組織。対して私達は剣でも無ければ盾でも無い。  
いわば薬。

この地球で苦しむ貧しき方々に生命と神話の力を分け与え、救済す

る事を目標としております。<sup>モットー</sup>

貴方達の印象では密売という響きがあると思いますが誰にでも使用。

このプロジェクトのおかげで此処近辺はガイアメモリによる社会の発展が成されているのです。」

鈍は坦々と告げながら進也に1枚の紙を授ける。

イラストや写真も付けて赤・青・黄等の明彩色の太字でこう書かれていた。

『人類の平和の源に   ガイアメモリEvo  
lion・Xtreme』

- 『NEW・CleanEnergy！

EXメモリ』

- 『我々EARTHはメモリによる人々の平和の維持  
する事をここに誓います』

「……そんな…嘘だろ」

啞然だ。

開いた口が塞がらないとまではいかないがそれでも内心は驚きが隠せない。

風都で尤も脅威の欠片である筈の代物がこの世界ではどうだ。

写真に写っている幼い子供や高齢者はその手にメモリを握り、当り前であるかのように使用している。

それも笑顔でだ。

まるで欲しかった玩具が手に入ったように指をピースにして歓喜に浸っている。

若者も一人ずつ所持しているが何より意外な項目が老人達だ。

神がおいでなするように手を合わせ、拝みながら受け取っている。

危機感がないという肯定を通して、恐らく誰も同意することはないだろう。

皆が皆常識を通して認知しているのだ。

一瞬口元が裂けるかのように頬を動かした鈍は掛けた眼鏡を押し上げて、進也に告げる。

「良い光景でしょう。」

そこは苦悶も絶望も悲観も妨げられる空間。

まさに理想郷。

ガイアメモリのおかげで世の中が平和になったのよ……………でもね」

「？」

「その平和を地獄に塗り替える輩が紛れ込んでいる、と言ったらどうするかしら」

…どういう事だ？

そんな疑問を抱くが鈍は急々と話を進めていく。

事は2年前まで遡る。

EARTH地区のA区域から連続して通り魔に襲われるという殺人事件が起きた。

当時の時期もガイアメモリの個人配布は行われており、今の現状と比べれば大分劣るが事故や交通関係による自己防衛のことを踏まえ、各自一本ずつ保持する事が任じられていた。

そんな時代に起きた殺人事件は決まって行われる犯行方法<sup>パターン</sup>があつた。

1・被害者は決まって、体中をナイフで切り付けられ、頭から喉元にかけて首を切断されていた

2・その人が所持していたメモリは手元から消失しているor粉々の破壊されている

3・犯行後、被害者の血と断定出来るもので、

人が書いたと思われるメッセージがビルの壁や地面に大きくこう書かれていた

☐

in H?ll  
ich freue mich darauf

地獄を楽しみな

□

今後もC区域、F区域でも同様の殺人事件は頻繁に起こり、全般の地域は恐怖と混沌に包まれた。

民衆も襲撃対策に応じて、より強いガイアメモリを求める様になった。

…半年後その恐怖はピタリ、と止まり、そして時が過ぎることに普段通りの生活に戻った。

しかし26(・)連続で起こった連続殺人事件。

これは最大にして最凶な惨劇として、EARTHの経歴に刻まれた。

「そんな事が…」

「犯行方法は鑑識課による調査だけど…ガイアメモリによる力では、と判明されたわ」

「ドーパント…って事ですか？だとしたら誰が…」

「少なくとも鋭利な刃物といった凶器による殺害方法が妥当案ね」

だが進也は当初の疑問がまだ解決されていない。  
そんな夢の無い昔話を聞かせる為に世界の境界線を越えて、連れてきたのだろうか？  
自分にとっては関係の無い話にも疑問を抱くが……漸くの所で本題が出される。

「そこでね上野進也君……この事件解決に協力して欲しいの」

「え！？でも何年も前の話だから時効とかも……」

「そうでもないの、その殺人犯は今も尚、この都市に溶け込んでいるという情報も入ってるわ。」

「しかも相手はドーパント………対象者に損害を負わせず使用されたメモリのみを破壊する マキシマムドライブが可能な貴方にこそ頼める話なの」

進也の答えは直ぐに出た。

「…分かりました、おれも出来る限り協力します！」

相手が連続殺人犯という事に多少の恐れはあるが、仮面ライダーとして是非とも協力したい。  
以前のミッドチルダの件でも然り、風都だけを守る男ではない。

悩める人たちが居て、それを解決出来るのが自分であれば乗るべき話だろう。

そう決断しての答えだった。

「…そう、嬉しいわ。ではこれを受け取ってくださいね」

「ん？…あの、これは…？」

鈍が懷から包装紙で包んだ何かを取りだし、それを進也に差し出す。手の平で掴める形状で何故か自分の持っている物と同じ触り心地がした…。

何だろう、と思い丁寧に破きながら中身を確認すると…自身の予想が半分当たった事に驚く。

それは進也のベルト……ロストドライバーに凄似していた。

しかし本来赤色に染められている筈の配色は濁った紫色に変色して、どういう訳か刺々しいパーツや色彩を彩っていて、禍々しいイメージがある。

一つしかないメモリを搭載するスロットも三又に分かれているように、腰にあるマキシマムスロットも、もう1つ追加され、至る所が愛着と違っている。

更には『M』のイニシャルが鋭い眼を描いている漆黒のメモリもセツトで追加されている。

そんな思いなのか…どうという訳か関わってはならぬ危機感がある。

「『トライドライバー』」

……近代のダブルドライバーより強化と耐性を重ね、  
個人でも変身可能を目的として制作された新世代型のベルトよ。  
本当なら使い慣れている方がいいかもしれないけど、それを使って  
貰っても構わないかしら？」

「あ、いえ、別に構わないですけど……」

「それは良かった……じゃあこのマニュアル通りに変身してテスト（  
・・）してもらえるかしら？  
最初は慣れが肝心だし……私もちよつと席を外すわね」

そう言つて鈍は髪を整えながら別室に向かう。

懐からも何かのレポートを手に持ちながらそれに目を移し、その場  
から立ち去る。

そのレポート用紙には『 STEP・1 A R A T A・K A G A M  
I N E 』

「まあ……直ぐに実戦に移るんだけどね」

僅かに唇を動かすが、進也の耳には聞こえなかった。

一方の進也はマニュアルを熟読しながら書いてる通りに事を進ませ  
ていく。

## 【DARK】

まず初めに中心にあるスロットには……先程手に入れた『闇の記憶』  
を秘めたダークメモリをセット。  
未だその力は未知数だが、物は試しだろう。

## 【MOMENT】

次に左右あるスロットの内、右には『刹那の記憶』が秘められたモ  
ーメントメモリをセット。  
意味は 一瞬、一時 ……永遠の対の意味になる。

## 【ETERNAL】

最後に自身の愛着……『永遠の記憶』を秘めたエターナルメモリを残  
ったスロットにセットする。

「これでいいのか……？まあ、とにかく……変身ッ……！」

進也はベルトを見つめながら呟くが、事件解決の為ならやらねば、  
と思いドライバーを展開する。  
悪を正そうという思いは本物だった。

そう…

この時までは……

【M O M E N T / D A R K / E T E R N A L】

\*\*\*\*\*

【パラレル空間】

此処パラレル空間は『平行の記憶』を持つパラレル・ドールパントの能力。

時空間の超越やその境目を操作する事が可能なのだ。

現在、その境目で松下里美はパラレル・ドールパントが話す『仮面ライダー』について説明している。  
坦々と告げていく中、漸く終了の時が来た。

『ざっとこんな感じッス、理解OK?』

「……ッッ!!?」

全てを聞いた里美は血相を変えて、進也が写った時空間に駆け付ける。

冷や汗を掻きながら、決して聞こえる事は無いと知っていながらも進也に向かって…叫んだ。

「ダメですッ!!変身したら…!!  
上野くうくううーん  
!……!!」

しかし里美の思いは届く事無く…無残にもこだました…。

\*\*\*\*\*

【廃墟地】

鏡祢アラタは一先ずその場を散策していた。

彼自身も来た事もない、無知な場所な為せめてもの情報が欲しい。

今の所は戦争でも起こったかのように全壊している数々の建物と血生臭い匂いが漂う道に転がる死体しか見ていない。

正直に言えば気味が悪かった。

帽子のつばに手を掛けながら、歩いて行くと……

「?…あれは…人か?」

瓦礫のすぐ隣に死体とは全く異なる小柄な物体  
られたように横たわっている。

否子供が捨て

フードが付いた緑色のパーカーを着ている為、素顔までは認識できないが肌色の手だけは僅かに見える。

骨となつて餓死するどころか、腐敗している様子もない。

いや…寧ろ寝ているといえようか。

一定のリズムで体が小刻みに動き、「すう…すう…」といった声ま  
で漏れている。

この子は生きている。

一応起こさぬように、抜き足刺し脚忍び足と近づくアラタだが…

『ギャアアアッ!!』

恐竜の様な唸り声と同時に何かが襲いかかる。

「うわつと!?!」

間一髪で避けたアラタは即座に『髑髏の記憶』を秘めたスカルメモリを取り出し、臨戦態勢をとるが相手を見た途端その手は止まった。

何故なら…それはギジメモリによるAI機能で行動する『メモリガジェット』だった。

透き通るようなクリアホワイトの体色に小柄な恐竜型のガジェット……『牙の記憶』を秘めた『フアング』は唸り声を上げながら、後方に居る子供を守るかのようにアラタを警戒している。  
アラタが子供を襲おうとしてたのかと見かねているようだ。

『ギャアアアア……!』

「…待て、俺はそいつに聞きたいことがあって起こそうとしたただだ」

『グルル……!!!』

数歩近づくとアラタに機械といえど毛を逆立てるように唸り続けるフアング。

完全に和解できる状態ではない。

どうしたものか、と頭を抱えるアラタだが、……目を擦りながら子供が起き上がった。

「……ううん……どうしたんだいフアング、また組しきの犬がきたのかな」

『ギャアオンツー!!』

「まってくれ、その前にかおを洗わせてほしい……ふあああ……」

隠れていてください、と意味なのか吠えるフアングを制止する子供は起き上がり、アラタの姿を確認する。

見た目は7歳程の体型で、膝まである黒い半ズボンと喉元まで閉めた緑色のパーカーからはみ出た素顔は実に女の子寄りな美形だった。服と同色の緑色のメッシュが掛かった黒い髪を肩まで伸ばし、前髪を中心は見えやすいように髪留めで結っている。子供は透き通るような水色の瞳でアラタを見つめている。

それがこの世界の住人……【ライト】との出会いだった。

\*\*\*\*\*

そして…

【???】

HyperClockOver

「 着いたな…」

此处とは違うもう一人の彼も到着した……。

second・collabo memory2 (後書き)

次回はオーガ編更新予定です

……ホントにどうしてここまで長くなったんやorz

T A R G E T ・ 1 6

交渉と理由と帝王の素顔？（前書き）

長らく更新できなくて申し訳ございませんでした…m（・・）m

更新ペースを早くするつもりがこんなことに…反省してます（汗）

ご覧くださいますッ！！

両者の対面は良行、悪行とも言えぬ複雑な形となる。

世間一般に置いて人と人とが顔を合わせる時、

まして初対面なら互いは健全に整えた礼儀で接する事が常識と認識とされている。

人としての魅力と存在を相手と和解、それからの関係性は当人達次第により定まる事となる。

友人・知人・恩人といった様々な関係で自身との？がりが存在するのだ。

唯一感情を伝える事が可能な者ならそれは理想的と言おう。

…だが一つの蟠りわだかまが生じて険悪な形と早変わりする恐れもある。

そうなると自身や相手にとっても一つの固念が抱かされるのだ。

それ以降仲の修復や、縁を切るかの二通りの選択で両者との関係性は大きく歪める結果となるのだ。

しかし目の前に居る存在は決して和解が可能だとしてもそれは望めぬだろう。

前文の仮定は対する者が 人間 という存在だからこそ成り立つ事。言葉を発せない猿と対極の存在である人間では余程の事柄が起らぬ限り、可能性は平均50%未満だと推測されているという……そう、例えるなら

『いきなり銃を向けるなんて、野蛮にも程があるんじゃない』

…彼 猫獣類の王／カザリ のように。

「脅迫を含めた僕なりの挨拶だよ、欲望の王：グリード」

\*\*\*\*\*

### 【体育館裏】

迫りくる光斬から身を後方に乗り出すリュウガ。

麻原マサト カイザ が繰り出す攻撃は相手に反撃という二字を与えるという甘さを1滴も漏らさない。

フォトンブラッドで刀身状に構成されたカイザブレイガンと無く斬り付けようと攻める。

しかしそれが長時間と延長することも無く、瞬時にカイザブレイガンの持ちて付近に搭載されているコッキングレバーを引き、持ち手を変える事により剣ではなく銃口から発射される光弾を真正面から浴びせる。

「くらえッ！」

「B l a s t   M o d e」

「ぐ、ああああー！！」

「おっと？動きが鈍った．．．よっ！！」

後退したリュウガから隙を逃さず肩を掴み腹部分に2、3発フックを入れ、止めと言わんばかりか突き飛ばすかのように蹴りを決められる。

容赦の無い戦法に圧倒されるリュウガは成す術もなく、体を地面に預ける事となる。

チッ、と内心で舌打ちをしてデッキからカードを一枚引く（ドロ）。

ドラグブラッガーの頭部を模した、ガントレット型召喚機ブラックドラグバイザーに一枚セットして、ベントインする。

「ちっ．．．ここからが正念場だつての」

S W O R D V E N T

「．．．本当に摩訶不思議だよ、その手品<sup>マジック</sup>」

発せられた音声と共にリュウガの手元にはブランク龍騎が所持する

ライドセイバーと同一形成だが、『漆黑』という単語が実に似合い  
そんな黒一色の大剣      ドラグセイバー      が手に渡る。  
こちらのリュウガはブランク龍騎とは違い、契約しているモンスター  
ーが手札にあるため、威力や耐性もケタ違いだ。

相手側も再びカイザブレイガンをブレードモードに切り替え、地面  
を蹴り上げてリュウガに振り下ろす。

焦らずドラグセイバーの太刀で受け止める様に上空に構えるが…誤  
算だった。

この時、空から差す日光がカイザと重なった事で逆光により姿を妨  
げられてしまったのだ。

更に自身の眼にも直撃してしまい、あまりの眩しさに瞼を閉じてし  
まった。

へくっ！？しまった…！！

「はあアッ！」

「ぐああアア！！」

大きく油断した代償にカイザから振り上げられるフォトンブラッド  
を帯びた光刃が捧げられる。

真正面から突くよりも上から墜とす力量の方が強い為、装甲に大き  
なダメージが襲いかかり、手に持った剣が離れ、倒れこむように後  
ずさるが、そんな彼に構わず尚もカイザは追い討ちを仕掛ける。

マルチデジタルカメラ型パンチユニット【カイザナックル】を組み  
立て、右手に装着する。

リュウガも手放したドラグセイバーを拾いに行くが、させるかと言

わんばかりの右ストレートの要領のラッシュを叩きこまれ、防戦一方だった。

「ゲフツ！があ…はっ！？」

「はあ…こんなに弱いくせによく立て付けたものだよ」

「エゝホッ！！」

「死なない程度に加減しておくけど……肋骨の2、3本ならどつて事ないよねえ??」

「クツ…ソツ！」

淡々と告げる脅迫的発言とそれに伴うように繰り出す打撃に押されつつあるもののデッキからカードを取り出そうとするが既にリュウガの戦い方を酷知したカイザはぐるん、と肩慣らしたナックルを腹に突き刺す。

「……馬鹿が」

「ゲホッ!？」

「どういうトリックか知らないけど、胡散臭いそのカードから武器を出してるんだろっ。それ以外は無防備に近いわけだね、なら封じ込めばいい話じゃないか。そうだろう？」

「くっ…」

「答える」

再びドスの利いた声で首根っこを掴み、壁に叩きつけられる。

ゴギツ、と骨が碎かれるような鈍い音を奏で壁から左肩に送り込まれる強い衝撃が身体に襲いかかり、リュウガは苦痛の声を漏らすと同時に左肩を負傷してしまった。

あまりの猛攻に反撃の隙を窺いながら戦ってはいるもののそう簡単には生まれてはこない。

まさに絶体絶命の四文字がお似合いだろう。

その時が満ちる前兆であるカイザ。

仮面の奥で余裕に満ちた笑みを浮かべカイザドライバーにセットされたカイザフォンの画面を展開し、ENTERキーを押す。

「Exceed Charge」

「……苦しいだろう。悔しいだろう？虚しいだろう？貧弱で最弱名自分が憎いだろう？？」

「でも……これで終わりだよ……」

低い音声と処刑宣告と共に左足を数歩下げ、右拳を構える。

カイザフォンから流れるフォトンブラッドが金色に発光しながら身体中に行き渡り、やがてナツクルを握る右拳に到達して前方のリユウガに突き出す。半歩後退して、腰を屈めて低姿勢になりながら餌を見つけた猫が飛びかかるか

のように……否、一応格好付けて言うならば、幾千も逃げ続け弱った小鹿<sup>バンビ</sup>を遂に仕留める瞬間のチーターといえようか。

## グランインパクト

カイザシステムに搭載された主にカイザナツクルを用いた殴撃型の戦闘技の一種であり、オルフェノクの身体を一撃で灰とさせるという…。

その他にもカイザブレイガン等のマルチウェポンによる技のバリエーションも豊富なのだが……あくまで相手が　オルフェノク　であればの問題。

ライダーの姿である今なら重傷を負う程度で済まされる事なのだろうが、　生身の人間にでも当ててみれば？

当然死は明白である。

なのに目の前の彼は一般の生徒と殆ど変らぬリユウガ　黒崎シンジ　を威圧だけで無く、力でもひれ伏せようとする程だ。本当に秩序を守る気にいるんだろうか。そう疑いたくなるだろう。

「ほら、…喰らいなよッ!!」

「…くっ……!」

「やべっ…!マジで洒落にならねえぞあれ!」

そんな思考に浸っているなど知る余地も無く、渾身の勢いで地面を蹴り上げたカイザはリュウガに接近し、その拳をリュウガに突き刺そうとグランインパクトを繰り出す。

リュウガの全神経が回避する事を命令し、デッキからドロしようとするが、その途端体に鈍い痛みが襲いかかった。

発信源は左肩。先程壁に激突した拍子に起こった負傷である。体を動かそうにもそこから広がる傷は限りなくリュウガの身体を蝕んでいた。

「…痛っ…う、動けない」

「でええいやああああッ!!」

時が停止するといった奇跡など起こる事もなく、カイザの拳が接近する。

壁を背もたれにしている為、バックステップを行おうとするも使えない以前に左肩の傷がプラスされている。

前方には獅子、後方は絶壁。

ありのままに受けられるのが鮮明か、と刹那思うが…

地面に転がった、僅かに見える破片を見逃すことは無かった。

「あれは……！……覚悟決めるかッ！！」

そしてグランインパクトが決まろうと思われた瞬間、

ガラス（……）の破片に取り込まれるようにリュウガは微量に動き、吸い込まれていった。

「何ッ！？」

思いも寄らぬ行動にカイザは驚嘆し、振り下ろした拳は空中を掠め、空振りとして終わる。

わけが分からない。

仮面の奥で苦虫を噛んだような表情を浮かべながら、リュウガを飲み込んだガラスの破片を見下ろす。

勿論それは塵同等な物であり、何の変哲の無いガラスだ。

彼自身、先程のドラグセイバーやシールドを出した芸当に驚の反応を示さなかったのは何らかのタネがあると思い込んでいたのだ。はつきり言えば紙切れ（カード）の1枚や2枚で太刀や矛を出すの等何時ぞやのファンタジーだ、と内心小馬鹿にしてみただのだ。

だがこれだけは明かせれない。

人間がガラスの 物質体に取り込むなど有り得ないことなのだろうからだ。

…これを公表するものならこう伝えるだろう

『この目で確かに留めたのだから』

そんな無知な彼だからこそ……

## STRIKE EVENT

この策は読めなかった。

「隙ありッ！」

「!?……うああああああ!!」

突如左方より何1000 もの熱気を受け取ったカイザは悲鳴を上げながら、地面を転がる。

その熱気の根源は……破片から飛び出したリュウガの左腕に装着されたドラグブラッガーの頭部を模したガントレット ドラグクロの口内から溢れ出る黒炎によるものだった。

打破策はミラーワールド。

グランインパクトが迫る瞬間、リュウガは照らされた日光により、反射して現れた鏡面から鏡の世界に身を潜め込ませた。

偶然にもリュウガ達がミラーワールドから現れた瞬間を目撃しなか

ったカイザが戸惑ったその隙を付いて、昇竜突破を決めたのだった。しかし傷みを承知で行ったリュウガ（シンジ）の身体にも負荷はある。

土壇場だった、と言える状況下でも左肩の傷みは激の域に達し、小ミリに動かすだけでも彼にとっては苦難だった。

「くっ……やり過ぎたか……」

再発した痛み思わず膝を付くリュウガだが…

「…ッ……全くだよ人の気も知らないで足なんて付けてさ、殺したいの僕を？」

直ぐに耳に届いた声に反応する。

その目先には…苦痛の声が混じりながらも喉元辺りを撫でながら立ち上がるカイザがいた。

相も変らぬしぶとさに今日で何度目かも分からぬ舌打ちをする。

ターミネーター  
「機械人間かお前は……」

「異常、という意味合いなら君には言われたくないんだけどなあ……」

「そうかよ」

リュウガは呆れたように呟きながら再びミラーワールドに潜ろうとする。

一時退散することを決めたのだ。

デッキの中に潜ませた切り札達を使えばカイザの足を付かせるぐらいのことはできようが、傷みは身体中に浸食するように広がる一方であり、好戦的ではない上に決して完全勝利というべきか痛み分けという形で終わりを告げるだ

ろう。

しかしカイザにとっては獲物を採り逃がしたような心境であったがために、にがしてなるものかと、威嚇するかのように吠える

「待ちなよ……保健室なら僕も一緒に付いてあつてあげようか、全身骨折で動けませんって言つてさあ」

「ガキ扱いすんな、保健室なら自分で行くし……何よりお前は気味悪くてしょうがねえんだよ」

そう言い残しリュウガはミラーワールドを通り一時その場から離脱した。

何の痕跡も残すこと無く。

その場に一人残されたカイザはカイザフォンを取り出し、ENTERキーを押して麻原マサトの姿に戻った、……直後地面を盛り上げる様に下方に蹴り上げた。

溜まっていた鬱憤と彼に対する苛立ちが彼にとっては最悪の受難だったようだ。

「だから嫌いなんだよ……僕のことを好きにならない奴は皆……！」

\*\*\*\*\*

### 【保健室】

P M 1 2 : 3 2

男鹿真司とオーガ（来る途中で変身解除した）が向かったのは保健室だった。

室内は快適に休息できる事を心掛けているのか洗練されていて、天井に設置されているクーラーは心地よい風が溢れ出ており、誰にでも有意義な環境を作っている。

原に別室にある体調を崩した生徒用に純白のシートが敷かれたベツトには……お昼寝タイムというサボりに浸る蛇島ナオヤも布団に身を埋めながら盛大な鼾をかき、真司とシンジ同様反省文を書いていた鶴見ユカも何事にも動じ

ぬ氷のような無表情で弁当箱の卵焼きを口に運び、ソファに腰掛けていた。

真司もその類で、ユカが座っているものと前合わせに置かれた同性のソファに身を預け、室内に漂う冷房に浸る一方。形はどうであれ各自の昼休みを満喫中である。

「じおおお……ぐがあああ……」

「……」

「ああ……生き返るう……」

溜め息と共にそう呟いてしまっただった。

何分蒸し暑くてしょうがないこの季節には、外に出る行動まで慎みたい状況であってクーラーから冷たい空気は至福の時である。

ふと足音を感じ取った真司は、冷えた麦茶を淹れたコップを掲げる男に目を向ける。

見た目で判断すれば30代前半といったところで、黒いジャージに純白の白衣を纏った薄い黒色の短髪に三人よりも長身の男……『春<sup>は</sup>馬<sup>る</sup>ユウジ』は御盆に載せたコップを真司に差し出す。

その行為から察するにどうやらこの男はこの校の教員であり、保健室の担当を務めているようであって  
オーガに変身していた人物であった。

「はい、冷たい麦茶でよかったかな」

「ああどうもツス。ちょうど喉乾いてたんで」

「よかった、……あ、鶴見さんの分も淹れようか？」

「……結構です。購買で仕入れておきましたから。後、…出すならあそこで外来語の練習をしている彼の鼻に45 程度に熱した薬湯を淹れて差し上げては」

「……ハハ、了承できないかな……」

自販機から仕入れた紅茶が入ったペットボトルを靴から取り出すついでに熟睡中のナオヤの影が見えるカーテンを指さしながら、要求するユカにギャグ漫画のような冷や汗をかきながらユウジは断言する。

近場に居る真司もおいおい、と言いながら内心嘲笑うがユカの表情を改めて見ると一瞬にしてそれは冷めた。

目が本<sup>マジ</sup>気なのだ。冗談云々なくして。

尤も今も彼女は青筋ひとつ浮かべぬ氷面で相手を見つめてるのだが。

「……」

「（……ガチだ、この人ガチだ）……あー…鶴見つつたか」

「…なに」

「俺、最近ここに入学してきた」

「男鹿真司君、よね。」

「あ……ああ」

「他校の不良を血ので濡らして結果病院送りにしたで噂の」

「（……あながち間違つてねえな）」

「その後には駆け付けに来た警官の顔面にギターを叩きつけた挙句、過去に両親を自身の手で黄泉の国に葬ったといわれるんでしょう？」

「誰だその悪魔は！？」

「思わず納得してしまいそうになったが、後半部分は聞き捨てならない。

恐らく噂が伝染する内、内容自体に変わりはないものの疎かではあるが改変されていったのだろうか……行き着く先があんまり過ぎるだろう。

どこの誰だ、と怒りに暮れながら男鹿真司17歳、『そいつ会ったらブツ殺してやりましょう』と此処に決意した。  
因みにこんな不良でも親御さんは健在中。

「……地球の核付近まで土下座させてやる……」

「なんの話？」

「何でもねえよ」

「はは……気にしないでね、今お菓子用意するから」

苛立ちが募る真司にフォローを入れるべきか、ユウジは教員用のデスクの引き出しから胡麻饅頭やクッキーを取り出しながら慰めていく。

その好意には大人しく従うべきであろう。

何にせよ一先ずこの気持ちは犯人に拳で返す事にする真司だが……どこことなく本題を聞く事を思い出し、菓子袋を開けようとするユウジに声をかける。

「そうだ、…先生。さっきの事なんだけどよ……ちょっと場所を移して聞きてえんだ。」

「あ………さっきの事って……」

「当然だろ？」

この時だけ眉を吊り上げ、喧嘩時のような睨みをきかせる。  
勿論言わずもがなだろうが、彼が使用していた帝王のベルトの件についてだ。  
オーガ

時は1か月ほど遡る。

美術館で保管されていた帝王のベルト2本が奪還される、という事件が起こった。

これには教員も生徒も混乱状態に陥る。

本来そのベルトは流星学園の繁栄を願って科学技術の元提示された物であり、象徴・証と言った呼称で貴重品とされている。

更に不可解な点がもう一つ

『地を統べる帝王』の異名を持

つオーガがオルフェノクのみ（・・・）を守っているのだ。

早速犯人が割れた、と確信するだろうがあの姿形から変身者の素性までは割れない。

只一つ推定できることは……適合率が高いオルフェノクであることのみ。

…尤も自身の黒歴史（という名の噂）によって薄れが生じているのはつい最近になってからのこと。

最近になって入校してきた真司にもその事柄は耳に入っていて、困惑なクラスメイトに便乗して頭を唸らせていたが、…蓋を開けてみるとどうだろう。その正体こそが目の前に居る温厚な男なのだ。

ユカやナオヤが居る事を含め、洗いざらい話してもらった見で何とか包み隠そうとしていたのかユウジはバツの悪そうな表情を浮かべながらたじくが、

会話の状況を理解したユカが手を挙げて助言する。

「……先生、押されてばかりじゃ一気に立場が悪くなりますよ。こ  
ういうのはもう少し反発するべきだと思います」

「でも間違っではないし……」

「これだからお人よしとか甘ったれとか言われるんです。別に先生  
だって好きでベルトを盗んだわけじゃないんでしょう？宛てもない  
人から急に差し出されたんですから所謂恵み物みたいなものと思っ  
て結構なんですよ」

「う、ごめんね……？」

「謝ってくださいとは言も言っていないが」

「は……？……じゃあ待てよ鶴見。お前先生がオーガだってこと知ってたのか」

「あそこで鼻提灯を膨らませてる彼と私だけは（……）知ってるわ」

「はああああ！？」

……マジですか。

内心思わずそう呟く。

相手側は啞然と口を『』にする真司の事などお構いなしで

勞しげに目を細め、途方のドアを睨みつける。

「……で、その誰かさんは何時までそうやって盗み聞きしているつもりなの？」

「え？」「」

「しまっ……」

「ほらあゝ！！だから、入ろっつて言っただじゃん、あたしもう限界だよー！」

「うっさいわね！あんたの自業自得でしょうがー！」

弱々しく叫ぶ声と鋭い怒鳴り声が廊下に響き渡る。

別室で寝てたナオヤも聞こえ、人の休養を妨げられたのが不機嫌かのように歪んだ表情で欠伸を掻いていた。

しかし、真司にとつては「どつかで聞いたような……」と首を傾げる。ガラツ、と恐る恐る扉を開いた人物は……

「し、失礼します……」

「薬くださあああい……！」

……スバルを背負ったティアナであった。

\*\*\*\*\*

P M 1 2 : 3 8

所戻つて、美術館。

目の前のグリード（カザリ）にディエンドライバーの銃口を向け、

威嚇体制として構えるディエンド。

一方の猫類王・カザリもライオンを模した鋭利な爪が生えた腕を…  
…追加に自身の属性である疾風を纏い、ディエンドに差し向ける。  
お互いフェアとも言い切れぬ状況下になりつつあった。

「さて……何故欲望の王様がこんな所（世界）に来ているのか、理由を教えてもらおうかな？」

「いいよ、……至って単純な話さ、訳あってとある人間を抹殺して欲しいって依頼があつてね、それを果たしに此処まで来ただけだよ。それ相応の報酬も分け与える条件で通してあげる事にしたのさ。要するにGive&Takeだよ」

「……へえ、君が『人間』に従うなんてね」

カザリが人間と同盟を組んだ。

その発言にはディエンドも心外だった。

本来自分達人間とは相容れぬ存在であることもそうだが、大抵人間に対するグリード達は、手駒として従う・仲を深めるといった理想など微塵足りとも無い者などプライドが高い存在がディエンドの視点だったが、…対してカザリ

はどうだろうか。

グリードの中でも中々の策士である彼は話し次第にもよるのだろうが聞く耳を持っていたのだ。

ディエンドの反応に見かねたカザリは、フツ、と短くほくそ笑みながら言い放つ。

「僕も虫頭<sup>ウウア</sup>じゃないんだ、効率の良さは把握してるよ。……尤もこの件が終われば手に掛けるつもりだけだね」

「ふうん…なら陰ながら応援してあげよう、……じゃあ僕からの質問だけでも何の用かな？」

「悪くない話さ、  
僕と手を組まない？」

\*\*\*\*\*

### 【保健室】

P M 1 3 : 1 1

現在スバルはもう一つ設置されたナオヤの隣のベットに体丸ごと潜り込ませ、小刻みに震えていた。

おまけに『あうっ……』と涙声が混じった声で呻きながら時々、いたい、と呟く始末。

此処で再び時を遡ってみよう。

1時間前…… スバル & ティアナは食堂で昼食をとることにした。

他の生徒は親が作った、又は朝一番起きて自分で作った弁当を用意して、教室や廊下など各自好きな場所に移動して食す者が5割ほど占めていたが、激しい睡魔と自力で起きれない ティアナの場合胸揉みスバルかアスムが起こすか ため暫くは学食で済ますことにした。

スバルは山どころかスオイ〇リー並に盛ったミートスパゲツティ、ティアナは体脂肪などの健康面を気にして肉類は敢えて控え目にした定食を注文。

周りの生徒たちや教員がざわつく事も気にせず、ティアナの食事情にけらけら笑いながらがつつくスバルだったが……  
此处でまさかのトラブル発生。

『……っう……』

『?どうしたのよ』

『気持ち悪い……っっていうかお腹痛い……』

『は?…あんたが?』

苦しみながら腹を抑えるスバルに思わず呆れた声を漏らす。

余程の事情が無い限り、食に関する事（アルコール以外全般）には胃は何時でもタイフーンな彼女が険しい状態になるなど考えた思いがない。

しかしスバルの表情は青筋が湧き、吐き出してしまいそんな趣であつて大抵のことには慣れているティアナも心配に感じ彼女の背中を擦る。

『ちよつと大丈夫なの…？』

『うん…平、気だか……う…』

『全然平気じゃないでしょ！…ちよつと保健室まで行きなさい、あたしも付いてつてあげるから……ご飯もっもう残しなさいよ』

『ええ…勿体無いんだけど』

『体の方が重要だし、何よりアンタ十分食つたでしょうが……ほら肩貸してあげるから…』

そう言いながら席を立ち、スバルに背負うように屈むティアナ。その際、

…するならおんぶね、と要求するスバルだったが

分かつた人間サンドバッグとして生きたいの？、と病人に威圧を掛ければ黙り込み、大人しく従つて保健室に向かつたのであつた。

\*\*\*\*\*

「  
というわけでありまして……」

「…とりあえずお勤めご苦労さんって所だな」

「全く…普段の行動の反動なのよ、却っていい気味だけど」

ユウジより漏られた麦茶を啜りながら閑話するティアナに真司は賞賛の言葉を送っておいた。

対するティアナはG4の世界と朝の登校の件も含めて、苦しむ彼女を尻目に長年の恨みが晴らせたかのような微笑を浮かべた。

【もう何も恐くない】

そう言いたげ気な…

後に告げるユウジによれば単なる『食べ過ぎ』ということで腹痛薬を飲んでから、今の現状。

暫く安静にしておけば効き目が現れ、痛みも治まるだろう、と追記する。

尚、家でも大幅な食事を控えるようにしたほうが良い、とのことだ。

そんなユウジは新たに仕入れた胡麻饅頭にチョコクッキー…ついでに喉飴をデスクに置く。

…真司の時と同じ微笑を浮かべて。

偶然とは言えティアナに話を聞かれたこともあって引き攣ったような作り笑いしか出来ないようだった。

「…はい、どうぞ」

「ありがとうございます……ところでさっきの話なんですけど…」

「…先生コレ逃げ場なしだぜ？」

「うん…僕も洗いざらい話すつもりだよ……でもここだけ（……）の話で聞いて欲しいというか…その」

「はぁ……それなら心配要りませんよ先生」

溜め息を吐きながら慰めるユカは「注目」、と視線を集めるかのように席を立つ。

何をするのか、とユウジ以外の二人はキョトンとするが…

突如彼女の顔に紋章を浮かびあげ、全身が発光すると、鶴をイメージさせる灰色の異形……クレインオルフェノクへと姿を変える。

それを見た二人は目を見開いた。

「……ッ!!」

『校則に興じるから殺さないけど……一言でも漏らせばあなた達の身の保証は無いわ。だからこれは契約…これから話すことは出来るだけ内密に。分かった?』

「鶴見さんッ!!」

「……分かった。…でも俺にだって対抗できる手段があることは忘れるなよ」

例えば女であろうとも喧嘩を買う鋭い目つきで警戒してカードデッキ

を取り出す真司。

…尤も弱体化状態での現在なら勝率は50%未満<sup>いま</sup>。

ティアナの方も疑心を持った表情だったが、暫しの沈黙頷いた。

三人（後に伝えるスバルにも伝える）の契約関係が完了しクレイン  
オルフェノクはユカの姿に戻り安堵の溜息を吐き捨てソファに座る。

「これでいいですよね先生」

「協力してくれたのは嬉しいけど…脅しとかそんな乱暴な方法は駄目だよ？」

「…いい加減分かりましょう。こういった手口でいかない限りこの人達は絶対に先生のことを公表しますよ。『この人がオーガだ』って、話し合いなんかじゃ通じないんです」

「そんなことは無いよちゃんと面を向き合えば…」

「それは絶大な支持がある先生だけです。生徒は違うんですよ。」

私達オルフェノクは人間とは仲良く暮らすなんて出来な  
いんですから」

自身の意見を発するユウジに呆れたように論理で突き付ける。  
するとどうだろうか…説教する気力を落としたのか押し黙ってしまった。

しかもそれは冗談にも聞こえない、満更でもない様子。

疑心の眼差しで首を傾げるティアナと真司・凜とした無表情でユカの  
三つの視線が彼に集まるが…

………意を決したように頭を上げて淡々と告げる。

「分かった……まず、何で僕がこのベルトを持っているかだけど……」

\*\*\*\*\*

一か月前の……下旬だったかな。

僕もその頃までは普通の保健室担当の先生だったんだ。

蛇島くんはよくサボリ（本人は遊びに来てやった、って言ってるんだけどね）

でもその頃は試験週間とかで皆勉強に費やしていたし、「博物館の提示品が盗まれた」って大騒ぎだったからね……鶴見さんや蛇島くんみたい……とは言わないけどあんまり生徒が来てくれないのがちょっと淋しかったかも。

教員の仕事を終えて帰ってきたのが確か……2時ぐらいで夜遅くだった気がする。

一仕事終わった僕は帰って、明日の生徒のみんなに配る保健便りを作らなきゃいけないから頭の中で文章や内容を下書き（想像）してたんだけど

玄関に知らない荷物が届いてたんだ。

割と大きい箱で宛先も不明で書いてあったのは届け先の『春馬ユウジ』だけ…。

不思議に思いながらも箱を開けて、中にあった包装紙を破っていくと……

【帝王のベルト】の1つ…金色に煌めくオーガギアが置かれていたんだ。

『え……！？なんで…』

当然僕は驚いたよ。騒動の元となった物が送られてくるなんてってあの時はちよつと混乱してたけど急いで警察に届けるべきだと悟ったんだ。

でも…中身をよく確認してみたらベルトと一緒に1通の手紙が入ってたててそれを見開いた。  
そこには、

突然のご無礼、誠に申し訳ございません、お荷物の件についてはご確認いただけたでしょうか？

唐突であることを認知してそちらのオーガギアを春馬様に進呈

いたします

貴方様なら存分に使用が可能という事実が推測されています

勿論そのベルトの扱いは貴公にお任せいたしますが…手荒な行動はお控えください

そしてもう一つ、今後警察や本校、民間人への通告を一切禁止することを要求します

それに…貴方様の夢だって自身の手で叶えられるかもしれませ  
んよ

『 僕の……夢を……？ 』

それが…オルフェノクである僕にとっての始まりだったんだ。

\*\*\*\*\*

話を終えると彼の表情…否顔にユカと同様紋章を浮かばせる。  
体から発光する光が止めば、木馬模した灰色の異形 もくば ホースオ  
ルフエノク。

これ以上の弁解ではなく、何も包み隠すことなく証拠を表すためだ。

「え…先生も…!？」

『うん…これが僕の本当の姿。死んだ僕が人の介護をするなんて可笑しい話だけだね。でも守ることなら出来そうだから』

「先生…」

『人間の方の皆は僕達オルフェノクを敬遠する…仕方ないことなんだよね。それはすぐ分かってる。

自分と同じじゃないというのは十分恐怖の対象だから…それでも…ほんの少しでも良いから…傷つかれずに済む方法が一握りでもあるならそれを実行したいんだ。』

ホースオルフェノクから再びユウジの姿に変えて自身の思いを…心を告げる。

その言葉には嘘偽りの様子も、紛れも無い真実と感じられた。  
ティアナも彼に対する興味心を擦られたのか、真剣に聞き入れている  
だがこの男1人…男鹿真司だけは腑に落ちないことがあった。

「あんたの言い分は分かったが、…でも…まだなんか隠してないか

「？」

「「えっ？」」

「先生の意気込みっていうか、夢っていうか……そういうのは大体分かった。でもそれってオーガの力を借りてまでやることなのか？ 仮に正体がばれりゃ何もかも全部御陀仏なんだぞ」

「男鹿：？あんた何言って」

「……春馬先生、洗いざらい全部話してくれよ。どうにもあんたは不信感あり過ぎんだ」

真司の言葉にユウジは硬直する。

……やっぱりか……

どうやら的を見事に射ていたようだ。

まず彼の疑問としては「何故ユウジがそこまでオーガに固執するのか」

少なくとも真司の視点では『春馬ユウジ』という男は拳を扱うように実戦向けでも無ければ、好戦的では無さそうであった。

流石にそこは保健室の先生。自身から怪我を申し込んだりはしないのだろう。

今回重要点となりえる『ベルトを渡した人物』である。

そもそも彼の在籍や事情まで網羅していることすら謎であり、そもそも何故ユウジ（……）を選抜したのだろうか。

適合性が高いという種類の内、彼に白羽の矢が打たれた、となれば一瞬納得できそうだがそうでもない。

労力を費やしてでも掻き探せばそこら中に転がっているだろう。

特定するにも大分絞れてきた結果  
ユウジとの面識が深い上、  
尚且つベルトの奪還が可能な人物。  
そう考えても可笑しくはないだろう。

我ながら奥底を付いている（と腐抜ける自分）推理に感心すると…  
それまでずっと聞き逃していたティアナの声が僅かに聞こえた。

「男鹿ッ！！！」

「うおい！？」

「何時まで自分の世界で迷い込んでるのよッ！」

「わ、わりい…」

「あ、あの、その…」

「ハア…悪いけどこれでお開きにしてくれないかしら、この通り先生もどこかの世界に迷い込んでるみたいよ。」

「こっちは聞きたいことは…」

「あら……随分と物忘れが激しいのね、契約解除なんて絶対に許さないわ」

顔に紋章を浮かべて、パニくるユウジに助け舟を出すユカ。

…女子高生に介護される30代の教師ってなんなの…？

そうティアナはふと思った。

…しかしユウジを慌てる素振りを見た真司は諦めたように、ハアと溜め息を吐き、更に置いてあったチョコクッキーに手を伸ばす。

「分かったよこつちも何も詮索しねえ…自分で探すわ」

「…探す（・・・）？」

「ま、こつちの話だ、気にすんなよ」

右から左へ受け流せと言わんばかりに軽く払いのけ、チョコクッキーを頬張り、冷たい麦茶で流し込む。

彼が何を言ってるかなど当然ティアナも知らない。本人のみである。束の間の落ち着いた雰囲気に戻るかと思っていた矢先、天井に設置されたスピーカーから甲高い男の声が校内に響く。

『2年 組 鶴宮ユカ at once（至急）に職員室にきな  
Sai プツッ

「…鶴宮さん僕も付いて行くよ、弁解するぐらいしか協力できないけど（…個人的には弦寺先生も居てくれたらありがたいけど）…」

「じゃあお願いします」

「ごめん、ちょっとだけ話をしに行ってくるよ。…あ、5段目の左の列から三つ数えた所の棚にお饅頭とか置いてある好きなだけ食べてね」

先程の声の主を知っているのだろうか、不機嫌に顔を歪ませるユカを連れて、ユウジは職員室に向かって退室する。

しん、とした保健室には首を傾げるティアナと真司、薬が効いて熟睡中のスバル、

…何時の間にか起きていたナオヤ

「…………ちっ…どこまでオレ達舐めてんだ」

そして…

（まっただろ…）

鏡という物陰でナオヤに同意するシンジ（リュウガ）のみであった。

\*\*\*\*\*

数日後…

今日もティアナ・スバルは登校日である。

テント場から近辺のバス停へ向かって8分、バスに乗る間13分、徒歩で片道20分。

初登校ならば左程感じないだろうが連日となるとダルさが生じてきたのだ。

…その反面、横に居る今の小娘スバルは何なのだろうか？

前日の体調不良も無事完治され、今じゃ元気ハツラツなドリンク状態であり、ウキウキとスキップをする始末だ。

正直言えば…その晴れやかフォーム眩し過ぎる。

「あたし、ふっかーっ」

「……あのまま末永く眠ってればよかったじゃない…」

「なんかいきなり罵倒された」

厄介者この上ない親友の復活に黒い覇気を出しながら愚痴るティアナ。

…これ、朝からの親友の会話なのだろうか。

しかし彼女が放つそのネガティブオーラは一瞬でかき消された。

『くそおおおッ！！どいつも、こいつも……バカにすんじやねえええ！』

「……！……あれって……」

校門前の運動場。彼女だけではなく、既に教室待機していた生徒達の視線が集まる。

そこには…カイザと対峙するエレファントオルフェノクの姿が。

\*\*\*\*\*

勿論生徒だけではなく、朝早く出勤していた教員の1人であるユウジも目撃していた。

同種であり、何より生徒同士が殺し合いしているようにしか見えな  
い彼が動かない訳が無い。

一人一人の目を欺きながら体育館の裏へ移動してベルトを腰に巻く  
と、オーガフォンの0のキーを三度入力して、ENTERキーを押  
す。

「大変だ…行かないと…！」

「0・0・0」「Stand・By…」

「変身ッ！」

「Complete」

ベルトにセットすると共に低い音声とクリアブラウンに発光するフ  
ォトンストリームが彼の身体中に張り巡られ、春馬ユウジは仮面ラ  
イダーオーガへと変身する。

黒きローブを纏う、大地を統べし帝王。

オーガフォンに搭載されているミッションメモリーを長剣オーガス  
トランザーに接続し、カイザ達の元へ向かおうとする。

…が、

【KamenRide KYOKI!】

【K a m e n R i d e   G I L L S !】

「行つてらっしゃい

そして王手だ」  
チェックメイト

『邪魔しないでくれる?』

「…ッ!？」

自身へ標準を定める海東大樹そして……欲望の王に制された。  
ディエンド  
カザリ

## second・collabo memory (前書き)

はてさてお次は進也くんsideです0(^-^)

進也くんが所持するガイアメモリに若干追加設定があります

では、ご覧くださいますか・・・(ノシ

## second・collabo memory3

研究所。

実験は整った。

九十九の元へ集結した3人はの目の前にあるのは、灰色の歪むオーロラの前に立つ。

3人の内、痩せた白人と太った黒人の男2人はコネクタに各自自身が所持するメモリを刺す。

【OPABINIA】

【ALGORITHM】

白人は鱗に包まれた体に複数の眼、獲物を捕食する鋭く分かれた長い舌を持つ、カンブリア紀に生息していたと思われる絶滅危惧種……『オパビニアの記憶』を宿したオパビニア・ドーパント。

黒人は全体が白と黒のオッドカラーに包まれ、1から100までの数字が彩り、虫眼鏡を模した複眼を持つ者……『数式の記憶』を秘めたアルゴリズム・ドーパント。

そして、先頭に立つ男も左ポケットからクリアブルーのメモリを取り出す。

「ではこちらも……」

【SANCTUARY】

【S】のEXメモリを空中に放ち、引き合わされる磁石のように彼の喉もとに現れたコネクタに吸い込まれる。

様々な動植物や遺跡を混合させたような神秘的なイメージを沸騰さ

せる、  
『聖域の記憶』の宿したサンクチュアリ・ドーパントへと姿を変える。

パレルルが作りだしたオーロラへ向かい、歩を進めた。

\*\*\*\*\*

一方、アラタは海岸近くを散策していた、……ライトを連れて。  
最初会ったときは彼の護衛らしいファングの猛攻に一苦労したがそこは主である彼が抑えてくれ、この地域全般について質問したもの、

「きみからはボクの興み心をくすぐらせる何かがある」と目からビームであるほど煌めていた彼の瞳にはアラタの疑問など何処吹く風であり、結局何も分からず仕舞い。

しかしあんな場所に幼い子供を放置するわけにもいなくなり、仕方なく同行させていた。

「こ、れ、は……イシガニ！？いや、まちがいない。べつ種に見えなくもないがトゲが頻ぱんに見られるハサミ！この頑じょうなこう羅！！……ついにこの目で拝むことができるなんて！！！」

そんな彼は現在、砂丘付近で横歩きするイシガニの親子に興奮していた。

衝動は行動へ移り変り、両手でつかめるサイズの蟹（親）を手に取

り、体の隅々まで直に眺めている。

思えばずっとこの調子だ。

何かを見つけてはそれに研究心が燃え上がっているのだ。

先を急ぎたいアラタは鼻がハサミで挟まれているにも関わらずその表情は『新 発 見』による衝撃の強さゆえか何のこっちゃとばかりに恍惚としているライトに「おい」と呼び掛ける。

「いい加減終わってくれないか？俺だってこの世界に来てから知りたい事が有り余ってるんだからな」

「ああ悪いね……しかしこのガイアメモリ…過このT2とは構ぞうが僅かにことなるようだ…君はこれをどこで手に入れたのかな」  
「メモリ…？なに言って…っ！」

ライトの発言に冷や汗を掻き、即座にポケットを漁るが、

…スカルメモリは見事にライトの手元に納められていた。

男の冷たさなどすっかり忘れ去り、返せ、と手を伸ばすも、その身軽さだから為せる技なのか俊敏……それどころかクロックアップ並に動き回りながら逃げていくため、中々取り返せない。

「こ、こら！？」

「おっと」

「待てよオイ！」

「うお」

「…それは俺の愛着なんだ！だか」

「とおう」

「ああああああZECTでもないのに何で音速超えられるんだあああ！」

何時もなら彼の（ネタにしやすい）親友が吐きそうな台詞を吐くアラタ。

\*\*\*

（００）：：？：ぶあくしょん！！ 察してください

\*\*\*

しかし…

【PROTO/CHESSE・MAXIMUMDRIVE】

突如聞き覚えのある音声が鳴り響くと、ライトを含む足元が脈のような線で図を描きながら輝く。

その構図はチェスや将棋などで駒を置くことに行われる板に近いだろう。

唐突に起きたことに動揺するアラタ、興味を示すライトだったが…

隕石の如く落下してくる火炎弾が襲いかかった。

「なッ…?!…避ける!!」

「んん？」

咄嗟の判断ゆえか、すぐさまライトの小柄な体を抱きかかえながら降りかかる火炎弾から回避していく。

発射源は上空から浮かんでいる物体によるもの。

物体から空襲は2人に襲いかかり、鳴り止むことを知らない。

一通りの襲撃が終わったのか焼け野原の様に辺りが焦げ臭い臭いが立ち上っていた。

遠目から見た限りへり等の飛行物体ではなく、人型をしている何かだった。

その者は背中に装着したプロトフェニックスの翼を羽ばたかせながら、降下する。

敢えて言うならば、戦士…というよりも異形に近い。

究極のW…サイクロンジョーカーエクストリームに近い前左右異なるカラーを施した姿なのだ。

右は毒々しい紫色・中心には禍々しい黒色・左は純白の白色に何十個ものマキシマムスロットが身体中に巻かれ、それは両肩にも付属クラッシャー口元を無色のフェイスベールで隠し、Mを模した血が固まったような複眼は未だに俯いた状態ではあるものの視線だけで理解できた。

更に背中に翳しているのは悪魔が所持するような三つ叉の槍。一言でいえば、3色の仮面ライダー。背中に翳した槍……トライデンツァーを構え、僅かに呟いた。

「仮面ライダー……トライ……」

足元に振り上げる。

刹那、

その痕跡であるクレーターが出来上がった。

「っ」

たったそれだけの行動にアラタは息を呑むしかなかった（もう一人はテンションフォルティッシモ状態の興奮気味）。あの『トライ』というライダーには不穏、狡猾、等といった負の空

気が感じない。

少なくともこちらに敵意を抱いている事だけは認識できた。  
向こうがその気だと言うならば自分は正当防衛として、それに応えるのみ。

## 【SKULL】

ライトから取り上げた（この時「実験器具が…」とぶーたれるミニ研究者がいた）『髑髏の記憶』を宿したスカルメモリのスイッチを押すことで、音声が届り響く。  
更に帽子を露わになったその瞳でトライを睨み、腰に巻きつけた『ロストドライバー』にスカルメモリをさし、起動する。

「変身……」

## 【SKULL】

彼の身体中を飲み込むように吹きかけ、漆黒の体へと形成していく。

・相手を見すらえる黒い眼まなこ

その勲章を表す『S』が刻まれた髑髏

・薄汚れつつも、歴戦の遺恨を残す純白のマフラー

そして、その瞳を包み隠すように帽子を被る…

鏡祢アラタのもう一つの姿……

仮面ライダースカル。

「さあ……お前の罪を数えろ……」

\*\*\*\*\*

## パラレル空間。

里美は悶絶していた。

密かに思いを

抱いている人物。

だが今はどうだろう。

その瞳には感情否、生氣すら感じない。

最早その手で弄ばれるだけの人形としか見れなかった。

「なん、で…どうして…」

『ホーントメング。でもオレっちもバイトなわけだし、これ、掛か  
ってるんだわ』

悪びれも無い態度で親指と人差し指を合わせ、¥のポーズをするパ  
ラレル。

金銭目的である彼には同情する様子すら皆無だ。

このまま彼女を幽閉しておけば、と今後の給料のことに妄想を描く  
パラレルだった。

この時まででは、

## 《HyperClockOver》

「なら、返せ」

『…あい?』

次の瞬間、

……パラレルに向かって盛大に振り上げた回し蹴りが炸裂する。  
それはモロに首元に喰らったことで、突然の奇襲に咽ながら何回転  
もしながら転がる。

蹴り上げた者は人型の戦士。

青い装甲に身を包み、深紅の複眼はゆっくりとパラレルを見すえ、  
クワガタ虫をイメージさせる戦士は戦闘態勢に入ろうする。

しかし、

パラレル本体が傷が負わされたことにより、その場の空間は大きく  
歪み始める。

足場の悪い中現実世界へと繋がれた穴が誤って吸い込まれるように  
落ちていった。

「きゃああああああああッ!!!」

「ッ!!!しまった!?!」

『やべっ…ひとまず、逃げとこー…』

戦士の隙を突いてパラレルは別の時空間に繋ぎ、そこから現れた穴に潜り込んで脱出する。

追おうとするも今は落ちてしまった里美の救出の方が先決だった。

「ヤバいな……かなり骨が折れるだろうけど……探すしかない……」

ハイパークロックアップ」

《HyperClockUp》

左腰に取り付けたカブト虫を模した銀色の機械の中心部分にあるボタンを叩くと……

……戦士の姿は輝かしい光に包まれて姿を消した。

『戦いの神』は再び時空間を探索を始めたのだった。

\*\*\*\*\*

- スカルvsトライ -

トライとスカルの戦闘は続いていた。

スカルマグナムを射撃を浴びせるも、トライデンツァーを円形に回

転させることで銃弾を弾き飛ばし、懷に潜り込んだところをフェンシングの如く突いていく。

接近する格闘戦や自身の武器を駆使した戦闘が繰り広げられる中、直接的な打撃を与える為腰に装着したマキシマムスロットにスカルメモリを装真する。

#### 【SKULL・MAXIMUMDRIVE】

「スカルキック…！」

戦闘能力の数値を格段に上げる骸骨の記憶のオーラにより、強化された跳び蹴りをトライに決めようとするが、見かねたトライは動じることなく【S】のインシヤルが刻まれた桃色のメモリを取り出す。

#### 【SWEETS】

『お菓子の記憶』を宿したスイーツメモリをスロットにセット。

#### 【SWEETS・MAXIMUMDRIVE】

「……スイーツ・パラダイス…」

小さく呟くとトライの顔・腕・脚・胴…身体全体が溶けていき、スカルが放ったキックはその体を突き抜けるも、溶解された状態のトライには無傷である。  
ノードメジ

液化化、…嫌、敢えて、ホイップクリームと例えるべきだろう。空かさず次の一手を繰り出そうとするが、クリーム化したトライが足元へ接近し、彼の両脚を固めさせる。

マキシマムを解除したトライが新たに【M】と【G】のメモリを取り出し、両肩のマキシマムスロットに装身。

#### 【MAGICIAN】

【GENE】

【MAGICIAN / GENE・MAXIMUM DRIVE】

「ジーンズ・マジック…」

周囲に散らばった瓦礫の破片がトライを集点に浮遊する。

『魔術師の記憶』を秘めたマジシャン・メモリの能力…超能力サイコキネシスにより効力のものだ。

…だが、それだけではない。

ジーン・メモリが宿す『遺伝子の記憶』により、破片の遺伝子分子は大きく変質され、金鉄合金の鋭利な槍へと変化を遂げる。

ただその前にスカルが気に掛かったもの…

それは、

「ツインマキシマムだと…！？」

先程の奇襲の時と同様、彼がツインマキシマムを無傷で（・・・）発動していることについてだ。

本来ガイアメモリによるマキシマムドライブとはメモリに秘めた直接的な功打撃として変貌させ、対象者のガイアメモリを破格することとが一般的。

それに対しツインマキシマムとは、『ツイン』の言葉の通り、メモリを2本駆使することにより、発動させる技術。

…が、その反面自身による負担も多く、それ以上も然りで最低1本のみしか使用することしかできない。

それは寧ろ自害、自傷と言っべきだろうと、禁断の技として称されるほど。

だがそんな技を2連発していたトライは痛み分けどころか、平然と行上無傷の面持ちであり、複数の槍が一直線に降りかかる。

攻撃力の高い連撃に押されつつも耐え凌いだスカルはマグナムの標

準をトライに向ける。

「なら…！」

【SKULL・MAXIMUMDRIVE】

「スカルパニッシャー…！！！」

スカルメモリをマグナムに装身することにより、マキシマムが発動する。

相手が使用し続けるツインマキシマムよりは、威力は劣るが銃口から連射される銃撃はトライを捕らえ、後退させるであろう……が、

イマジンブレイカー

【IMAGINBREAKER・MAXIMUMDRIVE】

音声が発された瞬間、後に起こると思われた爆発音と掻き消されていた。

そして目の前には何の変哲もなく右手を翳しているトライ。

トライデンツァーの淵部分にあるスロットには【I】のメモリがセツトされ、そのメモリのマキシマムを発動したようだが、…解せない。

「おい…何故お前がそのメモリを持っている…！？」

何時もの冷静さを忘れてしまい、多少息を呑みながらトライに問う。だが無理もないだろう。

先程トライが発動させたマキシマムは…『上条当麻の記憶』の秘めた、幻想殺し（イマジンブレイカー）によるものなのだ。

幻想殺し……それは異能を打ち破る力。

魔法や超能力、異端なる存在をその力で消し去ることが可能となるのだ。

まさに、『幻想を殺す』

彼が住む学園都市の科学技術により、その力を組み込むのに苦労があつたが唯一１本のみ成功した代物ののだが、

そのメモリは今後の彼の為に託したはずなのだ。

スカルの質問に応える素振りもせず黙然とイマジンプレイカーのメモリを抜き取り、【B】と【U】のメモリを取り出し、両腰のスロットにセット。

【BREAKER】

【UNICORN】

【UNICORN/BREAKER・MAXIMUMDRIVE】

「……ユニコーン・ブレイク……！」

鋭い角を帯びたオーラと拳を構える。

貫通力を拡大に上げる『一角獣の記憶』を秘めたユニコーン・メモリ、

更に物理攻撃の力量をアップさせる『破壊者の記憶』のブレイカー・メモリによるツインマキシマム。

本来ならばユニコーン単体でも一掃するほど力はあるが、ブレイカーがプラスされたことにより抜群だろう。

「ハアアアアア……！！」

「クツ、やばい……！」

勿論攻撃には避けようとするもSWEETSのクリームによる拘束が阻んで身動きが取れない。

このまま避けることも不可能な状態で朽ちてしまうのか……そう確信した時だ。

ドゴオオオオオオ……！！

ツインマキシマムの衝撃は大きく伝えられる。

正式に言えば彼の足元にだ。

どう見てもわざと外したとしか見えないトライの行動に啞然とする。

「なに……」

「……げて……ス、……ルさ……」

今まで殆どが無言だったトライが苦痛の声を漏らす。

相手も動揺しているが、スカルの瞳を見つめ、言葉を繋いでいった。

「スカ、……ルさ……ん……」

「……な、」

ほんの僅かだが確かに聞こえた。

『スカルさん』と確かに呼んだのだ。

(……待てよ?)

ここでスカルはやっと思いつけた。

?複数のマキシマムに耐えられる存在?

?相手がライダーである事なら?そのライダーの名 で呼ぶ

男?

そしてなにより……?現在の幻想殺し(イマジンプレイカー)  
のメモリの所持者?

この三つの条件で絞られたことにより……答えは脳裏に颯爽と現れる。

しかしその問答にはすぐさま疑惑が浮かぶ。  
いや、真っ向から否定したいだけだろうが、

何故帰ったはずのこの世界に、  
純粹心溢れる彼がするはずがないのに、

決して此処には居ないはずなのに、

なぜカレが？

「う…あああつ！！！」

「ぐあ！？」

大きく身振るいしたトライは再びトライデンツァーを振り上げ、脚の拘束が解かれると同時に遠方に弾き飛ばされる。

だがこの男も黙って見てはいなかった。

スカルの方が圧倒的に不利と悟ったライトは手提げバッグから一本のメモリを取り出し、アラタに目掛け豪快に投げる。

「かがみねアラタ、これを使うんだッ！！」

「え、あ…？」

渡されたのは【C】のイニシャルが刻まれた黄緑色のメモリ。  
なにかと、問おうとしたが…

「早く使えよこの野郎」とばかりに研究者としての期待に

満ち溢れた？きらきらアイ でスカルを見つめているため、やってやらないといけない気がしてきた。

この際マッドでも信じてみようと思い決意をしたスカルはサイクロンの使用を黙認。

「ちょっと痛いけど…我慢しろよ!!」

【CYCLONE・MAXIMUMDRIVE】

「…ハアッ！」

「ッ!？」

銃口から吹き荒れる緑色の風圧弾がトライに命中し、後退りさせる。…先程のマキシマムは『疾風の記憶』が秘められたサイクロンメモリであり、今回の場合はマグナムの銃弾を風圧に変化させ、威力を高めるもの。

しかしスカルの前腕には反動した分が激しく響いており、流石に連発して良いものではなかった。

「…くっ…凄い力だな」

「…っ…」

「…やはりそう簡単には倒れはしないか、…【お前】だもんな」

パラレル空間を通って、その様子を遠目で見ていたオパビニアとアルゴリズム…サンクチュアリは彼が使用した緑色のメモリに目を見開いた。

『なにつ！？』

サイクロン

『あれは…CYCLONE、ということは…』

『…ああ、あの方に間違いないだろう』

サンクチュアリの言葉に賛同するように2体は黙って頷く。

所変わり、またもや防戦一方となった状況下に陥ってしまったスカ  
ルを圧倒させていくトライは【K】と【R】のメモリをマキシマム  
を発動させていた。

「くっ…待て！！上」

【KAMARD】

【REAVE】

【KAMARD/REAVE・MAXIMUMDRIVE】

「……カオス・マンティス…！」

音声が發されると、

…トライの右脚に禍々しい闇・神々しい光・灼熱の烈火にタキシオ  
ン分子が含まれた電力が流れ込む。

先程使用したメモリは、地球の記憶を宿したガイアメモリとは異な  
る存在、

仮面ライダーの記憶が組み込まれたライダーメ  
モリという類。

たぐい

まず1つ目は、破滅の断罪者、

仮面ライダーレイブの記憶。

そして二つ目は、自然を支配せし大地の神と称される者

仮面

ライダーカマードの記憶。

ワイルドスイート

地面を蹴り上げ、Wのカテゴリー6…『カオスキマイラ』の複数属  
性とタキシオン分子が混合され、カマキリの鎌を沸騰させるオーラ  
を纏ったキックを落下時のスピードに合わせ、スカルの腹部へと突  
き刺す。

並のマキシマムとは違い、断罪者と大地の神の必殺技は相手を屈服させるに十分過ぎる力だった。

「うおあああああッ!!」

「フッ…」

その衝撃故ドライバーからメモリが排出され、変身が解けたアラタは黒く汚れた海へと落ちていく。

その圧倒的な勝敗にライトとサンクチュアリ達3体は目を見開いて、息を呑むことしかできなかった。

だがそんな中ただ一人

彼の意識が再び動き出した。

「…めろ…こ…も、いじよ…やめ…ろおおおおおお!!」

自身への……本来の彼の拒否に悲鳴が木霊する。

彼は自身への行動に嫌悪が、憎悪が、逃避したいほど差していた。今まで使用してきたメモリの大半は別世界のライダーに授かったものの。

イマジンブレイカーは勿論プロト、スイーツの類は自身よりも歴戦を歩んできた者から託されたメモリであり、思いなのだ。

だが、今の自分は何をしている？

恩師である彼を打ち負かしてしまった上、そのメモリを『悪用』として使っている

信じてくれた貴大や志乃しなのの思いを踏み躪るのと同等。

そんなことは絶対に拒否するトライはC・P・U・Sのイニシャル

が刻まれたメモリを放り投げる。

捨ててしまったメモリは…自然と落ちていくアラタのポケットに納められ、聞こえもしなければ、見えもしないだろうが仮面の奥で涙を流し、彼らに謝罪の弁を告げていた。

「ごめ…ん、な、さい…スカルさん…プロトさん、トリガーさ…」

「あら？まだ生きてるのかしら？？」

「ッ！？」

貴方はアタシの命令に忠実な且つ最高の操り人形よ…黙ってアタシに任せればいいの？

「ああ…ぐう、あう…いや、だ…あああ…」

必死に足掻くも彼の思考は又もや機械の様に停止される。

ゆっくりと虚空を見つめて、彼を追うために『覚醒の記憶』を秘めたアウエイク・メモリ、

『召喚の記憶』のコール・メモリのマキシマムを行う。

【A W A K E / C A L L ・ M A X I M U …】  
「……？」

「A W A K E…『覚醒の記憶』と名づけるべきだろうか、…しかしこんなタイプのメモリは見たこともなければ聞いたこともない…ぼくの知らないメモリ…？……興味深い、ゾクゾクするよっ！！」

『『『えっ』』』

「ッ!？」

それを見た瞬間、トライとドーパント3人は硬直する。

歡喜に溺れるライトの手元には……あのスカルを打ち負かしたトライからこっそり回収したアウェイクのメモリと……それに打ち負かされたスカルメモリ。

何時の間に、と誰もが思う中サンクチュアリは彼を捕えるように指示を出すも時既に遅し。

すぐさまスタッグフォンとバットショットにギジメモリをセットし、ライブモードにさせたガジェット達に任せ、とんずらこいていた。

「くっ!ガジェットですか……!」

「い、痛ッ!やめるッ!？」

「……!」

「……あの、れえ……お待ちなさい、ライト様ああ!」

目晦ましやツノ打撃を受ける三人。

サンクチュアリの悲鳴は、ライトは勿論……誰一人届かなかった。

\*\*\*\*\*

流れ着いたついでに目を覚ましたのは、ゴツゴツの岩が散乱している海岸だった。

風が吹き荒れ、薄い潮の匂いが鼻をくすぐる。

波に打たれたせいでお気に入りだった白いスーツも今やボロ衣であった。

寒さで身を震わせるが腰に違和感を感じ、俯いた瞬間目を見開く。

…どういわけか見覚えのない銀色のベルトが巻かれていた。

見た感じだとロストドライバーのような機械的な構造とは異なり、どちらかと言えば岩石を削ってベルトの形にしたというべきだと考えるべきだろう。

だが、不思議なことに頬や腕・脚部分に付いた血筋や傷、痛みが癒えていくのだ。

恐らくこのベルトによるもの…治癒能力らしき何かを秘めていると推定される。

一先ずはその力に委ねることにしたアラタは落下する際彼から渡され、手元に握られた4本のメモリを見つめ、溜息をついていた。

「…なにがあっただ…」

上野…」

再び独立行動となったライトは鏡祢アラタ搜索作業に没頭中だった。彼としてはスカルメモリを今日一番の収穫らしく、早速部品を解除して中の構造をチェックしたり、終いにはこれを元にオリジナルのメモリを量産していきたいが、彼の存在はライトの好奇心に大きく

衝撃を与えたらしく、ガジェット達に探索させている。

バットとスタッグが出陣したところで、お次は【P】のギジメモリに透き通った水色のカラーをした不死鳥型のガジェット。

…ただ名の通り不死鳥がモデルらしいが、小型ゆえか燕にも見えな  
くない。

メモリをセットし、ライブモードにした『フェニックスウェポン』  
へと変化させる。

「探さく者は『鏡祢アラタ』この人物を見つけたらボクのもとに知  
らせるんだ。分かったねP H O E N I X？」

『ピイツ』

主の命令に鳴き声で頷くフェニックスは雨雲が昇る空へ航空する。

鏡祢アラタの顔写真や情報などはデータにインプットした所で後は  
見つけるのを待つのみ。

さて、と頻りついた彼はフロッグやデンデン等ガジェットのメン  
テナンスをするため手提げバッグの中を漁り、ガジェットとギジメ  
モリを引っ張り出す。

…が、

…

……

………無い。

隅々まで探してみるも……必需品であるサイクロンメモリが見当た  
ら無いのだ。

それもそのはず、

先程渡して以降、アラタに貸し切り状

態なのだから。

「…うむ、非じょうに不都合なじょう況へ陥ってしまったようだ  
…」

\*\*\*\*\*

【????の世界】

AM10:43

その日、少女はとても不機嫌な心境であつた。

いや…『少女』とは言つても、見た目から察するに10代前後の女子高生と称した方がいいだろう。

服装も薄着のセーラー服に更にまた他種のセーラー服を重ね着して肩まで伸びた黒髪に、前髪はヘアピンで止めて、横に流している。

そんな少女は現在、ジャラジャラと金銭のような音を鳴らしながら段ボールを運び、それを積んだ箱の山にまた積んでいく。

そしてまた、積んで運む、その繰り返し。

その作業をしているのが彼女だけでは無い。

Tシャツを着た30代後半の男は黒色のゴリラや深緑のカラーをしたトリケラトプスのような手のひらサイズの小型機械の手助けを受けながら、段ボールに銀色のメダルを入れていく。

「まったく……何であたしがこんな事をしなきゃいけないの……」

「まあまあ、手貸すくらい良いじゃないの。」

「……って言っても、……あの男に难道でしょ？恵んでやる意味が分かんないんだけど」

「違う違う、やるのは【あの娘】。あれも後藤ちゃん寄りの熱血努力家っぽいし、慣れりや直ぐに使いこなせるだろ」

『ウオンウオン！』

ゴリラ型の機械も男に賛同しているのか、両腕をブンブン、と回して肯定する始末。

「缶にまで急かされた」と呆れ半分な溜息を吐く少女。

だが、この事態は抗議しても絶対に拒否不可であるのだ。

もはや【郷に入っては郷に従え】という単語に従い自身の任務を受け入れるしかない。

未だに腑に落ちぬ面持ちで10箱の段ボール、そして……中心にガチャポンのカプセルとレバーが一体化したようなベルトを肩に担ぐ。

「じゃ、行ってきます。……あ、あと帰ってきたらおでん奢って下さいよ」

「気をつけて行けよ、ナガちゃん」

大量の【セルメダル】を積んだ箱と彼女に捧げるベルトを持って、

彼女

神那賀雫は不気味に揺れ動くオーロラへと向かった。

second・collabo memory<sub>3</sub> (後書き)

Count the memorys!

現在彼らが使えるメモリは…

・進也

M：刹那の記憶／モーメント

G：遺伝子の記憶／ジーン

R：仮面ライダーレイブの記憶／レイブ

I：上条当麻の記憶／イマジンブレイカー

K：仮面ライダーカマードの記憶／カマード

B：破壊者の記憶／ブレイカー

E：永遠の記憶／エターナル

C：召喚の記憶／コール

D：闇の記憶／ダーク

・アラタ

C：西洋将棋の記憶／チェス

P：仮面ライダープロトの記憶／プロト

U：一角獣の記憶／ユニコーン

S：お菓子の記憶／スイーツ

C：疾風の記憶／サイクロン

・ライト

M：魔術師の記憶／マジシャン  
G：剣闘士の記憶／グラディエーター  
S：髑髏の記憶／スカル  
A：覚醒の記憶／アウエイク

## お休みの報告

蒸し暑い生活のあまり、クーラー生活が続き、インドア状態のブラッキンでございます（C；）  
（＝3  
この事は活動報告でするべきですが、この場を借りてご報告いたします。

実はこの度、お盆の時期に実家へ帰るため、3、4日程遊びに行きます！

毎年の恒例事項となっておりますので（笑）

基本僕はパソコンを通して活動しておりますので、

そのせいで小説を観に行ったり、感想を書いたり返信が出来ません

…T T

そういう事で、ほんの少しお休みしようと思います。

この後はあんまり関係無い話です

D O E Oで『？シネマ：仮面ライダーアクセル』を借りれました

やっと照井ドーパント（？）ことBOOSTERの勇士を拝めれますよv（^o^）v

エターナル？………完売でした（笑）

移動中にまったりと観ようと思います！

ちなみに本編は4割ほど出来ていて、完成までもう少し執筆作業に掛かります。

帰って来て、数日後に更新しようと思いますのでお待ちくださいませm(・・)m

それでは、  
海ではしゃいだり、従兄達と遊んだり、夏休みを満喫しにいつてきまゝす

以上、？ブラッキン でした( ^ ^ )ノシ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2279r/>

---

仮面ライダーディエンド～世界を盗む大怪盗～

2011年11月17日17時00分発行